
カンピオーネ暴虐伝～オリピの秘宝～

EGG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネ暴虐伝〜オリピの秘宝〜

【Nコード】

N9848X

【作者名】

EGG

【あらすじ】

西条祐一は転生者である。チート能力でウハウハしたいと言ったら、カンピオーネ！の世界に放り込まれた。

西条祐一はカンピオーネである。神の権能と集めた神器を駆使し、今日も世界の危機として戦うのだ——多分

カンピオーネ！の世界でオリピオーネが好き勝手する予定です。

ある程度原作知識があるものとして書いております。主人公がいな
い部分は大体原作と同じように進むので、バツサリカットするか茶
化しながら進めるかのどちらかです。説明不足な所も多いかもしれ

ません。

書くのも投稿するのも初めてですが、多くの二次に惹かれ、マンガも始まるし書いてみようかな？と思った次第です。読み難いかもしれないのですが、お付き合いいただければ幸いです。

作者の神話知識はマンガや小説から得られたのが全ての薄っぺらいモノです。Wikiを始めとして、主にWEBで調べはしますが、その程度なので、原作以上の神話の解体などは期待しないで下さい。

はじめに

太字、赤字、青字は単なる強調ですが、黒一色というのもなんなので、『うみねこのなく頃に』の文字ルールを使用させていただきました。その内金文字も出てくるかも？

読み難いから多分やらないと思いますが……。

赤字——断定。事実がどうあれ、このSS内では（どこか矛盾が無い限り）真実として扱う。

青字——推測。根拠ある否定が無い限り真実として扱う。

という感じで使っています。が、はつきり言っているんな意味で上手くいくかわかりません。

なお、会話文で大きくなっていたりするのは単に声が大きくなっているだけです。

無理でした。太字も色も文字サイズも全部潰れて均一に。くそう、インパクトが……

悔しいので、こういう事をやる予定だった、という事は伝えておきます。

できる方、やり方を教えて下さい。お願いします。

主人公オリピオーネの能力は当然チートですが、“カンピオーネの権能はどこか落とし穴がある”の方向性で作っております。主人公は欠点も理解しておりますので、隠しながら戦っていきます。

また、チートは権能だけでなく、体術、魔術も当てはまります。むしろこっちが本当のチート。

主人公を構成する元ネタの60〜70%はエロゲです。特に体術。権能は半々かな？魔術は大体ガープス、降臨術はシャーマンキングと言ったところです。

あと、序章で奪った権能ですが、実のところ彼との対戦は主人公の権能を出す為に急遽でつち上げたので、まだ詳しくは設定していません。取り敢えず複数の能力を持つ《東方の軍神》と同タイプの権能にするつもりです。

元々は単にオリピが好き勝手するSSだったのですが、1話書いた時点でカンピオーネ！キャラクターのツツコミと化してしまいました。先を知っているが故の暴走です。アンチをする意図は全くありませんが、原作者様が「お前が言っな！」を連発するだけあって、ツツコミどころが多いのです。

拙い文ではありますが、「あー、あるある」と思っただけであれば幸いです。

序章

地上の何所でもない場所、生と不死の境界のある平野でその戦争は行われていた。

その騎士は父や弟たち、そして共に叔父王を奉じた騎士仲間、20名程とその10倍の兵卒を従えて王の仇たる神殺しに決戦を挑んだのである。

しかし、結果は無残なものだった。仇敵たる神殺しは、何所から取り出したのか床几に腰掛けたまま一步も動かず、呼び出した配下に掃討を命じるのみであった。

自分や騎士仲間はまづろわぬ身ではないとは言え、それでも一騎当千の強者である。だが、一般兵にまでそれを求めるのは酷である。彼らは神使として最低限の強さを備えていたが、騎士たちの足元にも及ばない。敵にも強力な兵が多数いたし、魔獣や幻獣の類、強力な火箭を放つ鋼の箱（騎士は知る由も無いが、ようするに近代戦車である）の群れは騎士たちを以ってしても簡単には打ち破れなかった。包囲を破った者も居るには居たが、神殺しに攻撃を仕掛ける前に中空に魔方陣を描くように展開された武器の群れから放たれる雷火によって討たれた。

一方的に蹂躪されたと言う訳ではなかったが、肝心の神殺しにはあらゆる意味でダメージが無い。その身に掠り傷の一つも無ければ、権能で呼び出された軍隊相手に消耗を強いたところで何の痛痒も無いのだから。

騎士はこのままでは自分達は無駄死にだと理解している。起死回生を求めて一騎討ちを申し込んだが、無視された。

「王よ、面目次第もございません。アヴァロンに取り残され御身の仇を探す事も出来ず、しかし、時を経て仇敵と会い見える幸運に浴しながらも、掠り傷一つ付けられぬまま……。おお、主よ！何故あの男に神をも殺める運命と力を与え給うたのか！？願わくば、せめ

て一太刀、一矢報いる力をお与え下さい!!」

無念と絶望が吐き出させたことだま絶叫だった。もはや、敗北は避けられない。仲間たちも殆どが討ち取られ、神殺しの権能に取り込まれて、先刻まで味方だった自分に武器を向けている。恐らく自分も直ぐにそうなるのだろう。人ならぬ騎士をして、遣る瀬無さだけが募るのであった。

ところで、この騎士はまつろわぬ神として顕現した、とある物語の王である軍神の眷属（神獣クラス）である。しかし、彼自身もまた物語の主人公と成り得る存在であり、元はと言えば古き太陽の神格まで行き着く英雄である。そしてここは生と不死の境界、アストラル界と呼ばれる場所である。世界の過去と未来、その総てが記されているとされる場所であり、不死の領域——神話の世界と繋がる場所だった。

実際に彼の言うところの“主”が力を貸してくれたのかは解からない。何が如何作用したのかなど結果の前には些細な事である。そう、神話の世界より騎士の前身たる神の、英雄の力が降臨し、彼をしてまつろわぬ神と成さしめたと言う結果の前には……。

「おお……主よ、感謝します!」

彼は敬虔なキリスト教徒だった。少なくとも物語ではそうなっている。聖杯探索の音頭も執ったし、失敗はしたが実際に探索もした。だが、まつろわぬ神——別に天使ではない——が一神教の神に祈り、感謝を捧げるのは如何なんだろう?と神殺し——西条祐一は思った。が、

「確かに貴方は俺に勝ち得る力を手に入れた。兵たちではもはや相手にもならない。望み通り、一騎討ちと言うことになる」

旗下の兵では勝てなくなったのも事実なので、ようやく腰を上げたのであった。

「神殺しよ、私は卿を討ち滅ぼし、仲間たちの無念を雪いだ上で地上に舞い戻り、今一度我が王を復活せしめる！」

猛々しい宣言。しかし、彼はその方法を知っているのだろうか？彼を召喚したのはその王なのだから……。

「あの時、我が朋友と共に居た魔女めが王復活の鍵なのであろう？理も論も弁えぬ猪と思われるては心外だぞ」

「そいつは失礼。じゃあ、始めようか？」

顔色から読まれたのであろう疑問を返されたのも軽く流し、祐一は剣を取って構える。

「応、では、尋常に果たし合おうではないか！」

騎士の言葉と同時に祐一は高速移動の権能も駆使して襲い掛かる。彼にとっては両者が剣を構え、開戦の言葉を放ったなら決闘は開始なのである。だが、

「いきなり獣のように襲ってくるとは……。先程までの泰然とした態度は、我らなど取るに足らぬ存在だと言いたかったのかな？それとも、卿自らと戦い得る騎士を前にして気が昂ぶったか？」

流石は太陽の騎士、余裕を持って受け止められた。力も剛力無双を誇る彼の方が上である。

「しかし、卿の力がこの程度のはずは無いな。この程度の輩に我が王が敗れたとは思えぬ！……さあ、本気を出せ！」

剣を合わせたまま強引に振りぬかれ、祐一は吹き飛ばされてしまったが、すぐさま体勢を立て直す。

実のところ彼の権能はさして戦闘向きではない。好戦的な性格で、且つ攻撃的な権能もあるのだが、神を殺めるには総じて攻撃力が足りないのである。その分大した副作用も発動条件も無いのだが……。だからこそ彼はその威力を自分以外に求めた。

周囲に浮かぶ武具がその典型例である。これらの武具は、一部神具という強力な物もあるが、基本的に呪力を流せば一つの（炎を出したり、稲妻を出したり、強風を出したりする）魔術を放つだけのものである。しかし、神殺しの大呪力と周囲の力を集束し放つ権能

を使えばいずれは神をも殺める力となる——時間は掛かるが——。

神具に至っては、そもそも神が自分の為に作り出したと言うシロモノなので、まつろわぬ神相手であろうと問題無く効果を発揮する。事実、彼が今手にしている剣は、エリンの四秘宝の一つであり、斬れぬもの無しと謳われたヌアザの剣である。先程の攻撃も呪力を込めていれば敵を剣ごと真つ二つにした事だろう。しかし、折角の機会なのだから直ぐに終わらせるのは勿体無いというもの。

結局のところ、彼はまつろわぬ神となった騎士を前にしても、舐めて掛かっていたのである。緒戦で優勢だった事もあって、切り替えるには少しばかり時間が掛かりそうだった。

とは言っても終わりと言うのは訪れるもの。時間にしてなら十数分だが、彼らは共に神速の遣い手であり、事実、既に何百合、何千合と切り結んでいる。騎士の攻撃は速く、力強く、技芸に富んだものであった。流星は湖の騎士に最高の称号を譲るまではその位置にあった太陽の騎士である。だが、それだけだ。どうやら、この騎士の権能は敵を討ち滅ぼす剣と言うよりも、生き残る力、継戦能力に重きを置いている様だった。実際、一度生き返っている。いや、敵の心臓を撃ちぬく光の槍も有ったのだが、祐一は呪力を打ち消し、吸収する権能を所持していたので一度きりしか使われなかった。エネルギーを操る力といい吸収する力といい、純粋なエネルギーに強い男なのである。

ともあれ、

「あんたが生き汚い奴だと言うのは良く解かった。だが、一日にそう何度も蘇れる筈も無し、決着を付けさせて貰うぞ！」

「自信の根拠は卿のその魔剣か？一度は殺られたが、そう何度も喰らいはせんよ！……しかし、決着を付けるのは望むところ。確かに残された太陽のちから神力は残り僅か、しかも卿は私の力を自分の

ものとする事が出来るときている。しかし、私も見切ったぞ。その力は我が剣の内に籠めた神力まで取り込めない。よしんば取り込めたとしても僅かばかりのはずだ！」

——次の一合で決着を付ける——共にその覚悟を決める。騎士は有らん限りの神力をその剣に籠め、……神殺しは左眼を真紅に染めた。

「……！」

驚きは始め、声にもならなかった。自分と戦い、“神殺しも疲弊している”その感触は彼にも有った。それが如何だろう！？左眼が真紅に染まった瞬間、神殺しから初めに対峙した時よりも膨大な呪力が吹き荒れ、さらに強大な活力を与えているではないか！！

いや、それ以前にこれは王が自身と臣下たる自分たちをより強大にするために使う権能ではなかったか？

「それは魔王殲滅の力！！何故、神殺しの魔王たる卿が使えると言うのだ！？」

狼狽は致命的な隙だった。今の祐一はその隙を見逃すほど優しくも油断しても居ない。決闘が始まった時と同じく、しかし今度は剣に必殺の意志と呪力を籠めて……斬り捨てた。

何故魔王殲滅の権能が使えるのか、など言う質問は不粋である。

何処かの剣神から篡奪したに決まっているからだ。神殺しの権能のメカニズムなんて当の本人にすら解かっていない。パンドラ——全ての神殺しの義母であり、人間に神の権能を与えるのだと言う女神——にでも聞けば解かるのだろうか？……まあ、聞いた所でどうなる訳でも無し、祐一も気にした事は無かったので如何でも良かった。「八つ目の権能か……。今度はどんなのだろうか？次こそすぐ出せて、神様相手でもダメージが与えられるやつが良いんだけどな」

今まで得た権能のメカニズムより、これから得る権能がどんなも

のか考える方が楽しいし、建設的だと祐一は思っている。因みに“この権能には、微妙に彼の思い描く様な力は無かった”と言う事が解かるのはもう少し先であった。

序章（後書き）

主人公の権能を見せる導入部。

大切なのは戦闘シーンじゃありません。

もっと上手く書ければ良いのですが……（TAT）

グリーニッジレポート

―2000年10月に賢人議会の調査員が提出した西条祐一についての報告書より抜粋―

彼は1999年12月31日にアンゴルモア大王（本人談、篡奪した権能より何処かの嵐神であると思われる）を殺めカンピオーネになった少年です。しかし、現地の魔術組織『正史編纂委員会』ですらその状況を知りません。『古老』なる彼らのオブザーバーが事後で説明してきたと言っています。

（中略）

彼は古老の頭目である『ご老公』の直弟子だという事もあり、正史編纂委員会に形の上でのみ所属しているということになっていますが、今は勿論、以前においても彼に対して指揮権を有している訳ではありません。

（中略）

さて、先程もうしあげた通り、彼は巫覡の才を持つ神官ではありませんが、術者として大成したか？と言えば疑問でしょう。なぜなら、呪力を溜める資質が無かったからです。彼の身体は普通の呪力を溜めません。教会や神殿（日本で言うところの寺社仏閣など）の聖なる威力に清められた、或いは人間の手の入っていない純粋な自然の精気のみしか蓄えないのです。そしてこれが彼をして神殺しと言う偉業を成さしめるのです。

（中略）

彼には降臨術の素質がありました。巫覡の才と清らかなる呪力のみを蓄える身体と言うのは、至純の精気の固まりであるまつろわぬ神にとって非常に居心地が良かったのでしょう。彼は『天之尾羽張』なる神剣を手に入れました。或いは魅入られたと言うべきでしょうか。

（中略）

以上から、彼と彼の神剣にはアストラル界に行き来できる能力が具わっていたと考えて良いでしょう。アストラル界で戦闘が起こった為、我々は一人として新たな神殺しの誕生を見守る事が出来なかったのです。

―2008年度 西条祐一についての報告より抜粋―

この恐るべき魔王が（本格的に）出現して早四年の月日が流れました。イタリアの剣の王サルバトーレ卿と時を同じくして出現した年の近い、しかし彼よりも四年は早くカンピオーネになった彼は、それまで目立った動きが無かったのにも関わらず、各地で戦いを繰り広げる様になりました。まるで自らが弑し奉った戦神オーデインの権能に操られるかのように……。

（中略）

どこからその資金を調達しているのか？彼の戦場は紛争地域だけではなく経済界にもあるという事は御存知の事と思います。そこで得た資金で以って多数の傭兵や暗殺者を雇い入れ、戦いの園へと舞い戻るのです。

（中略）

彼の権能は現在で既に七つあると言われております。彼自身優秀な術者であり、カンピオーネ特有の膨大な呪力をも有しておりますので、それが魔術でどれが権能か解からない事もあるのですが、彼と（比較的）仲の良いブラックプリンス黒王子やサルバトーレ卿から漏れ聞く所に依れば間違いないと思います。

さて我々が現在把握し名付けた権能は《神気発衝》（Power Shot Breaker）《追跡者》（The Chaser）《斬？》（Absorption Force）《王威の魔剣

《(Knights of the Round) 《叡智の左眼》
(Left Eye of Glory)の五つ。残り二つは正確な能力が伝わっておりません。もっとも、この五つも伝わった事が全てだとは思いませんが……。

(中略)

彼は戦いに関する依頼は(報酬次第ですが)意外と簡単に引き受けてくれます。しかし、嘗てよりの蒐集癖(彼は黒王子と共に知られる神器のコレクターであり、探索者です。もっとも、強引に借りて行くという事は無いのですが……)は変わりありませんので、結社の秘匿する神具を差し出せと言われるかも知れないことはご承知置き下さい。

一話 七雄神社にて

草薙護堂は神殺しである。キャリアは二ヶ月程度だし、世間様（と言っても裏の世界）に認知されているとも言い難い。しかし例え本人が認めたくなくてもその事実は覆せないのだ。

草薙護堂は名跡クラッシャーである。カンピオーネと成つてからの彼は、肩をぶつ壊されて野球が出来なくなった鬱憤を晴らすかのごとくイタリアの各地を破壊している。ミラノのスフォルツェスコ城、パレルモのフェリーチェ門、サルデーニヤのカリアリ港、シエナのカンポ広場、そしてつい先日にもローマのコロッセオ。来年にはギリシャの財政破綻と言うビッグニュースがユーロ圏を直撃すると言うのに、その前にイタリアの財政破綻を報じさせる気なのだろうか？カンピオーネは一魔王（天災）だから損害賠償請求も出来ねーのである。この世界のユーロ圏の未来は暗そうだ。……サルバトーレやヴォバンも居るし。

しかし、言い訳させてもらうなら悪いのは彼一人ではない。諸悪の根源とまでは言わないが、2人ばかり断罪されても良いんじゃないかな？と言う人物が居る。

一人は彼の愛人であるところのエリカ・ブランデッリ。彼女は愛人（と勝手に名乗っている）の立場をフルに利用し、断れない（理由をつけて）護堂に無理やり自分の厄介事を押し付け、彼の名声を高くしているのである。『魔王である彼を心の底から本気で愛している』から許されると言うレベルでは当然ない。その頻度と成果はイタリアの活動家たちなど及びもつかないほどののだ。許されているのはひとえに魔王の後ろ盾あつてこそである。

そしていま一人は、野球で彼を刺して肩をぶつ壊した少年Aである。彼がもし護堂の肩を壊さなければ、護堂は多分神殺しには成らなかっただろう。故に数々の破壊も無かつたはずである。まあ、今更だが。

そんな彼が向かっている先は七雄神社と言うところである。別に“ム力つくから破壊しに行く”という事ではない……はずだ。コロッセオ破壊の折にエリカからとある神具を預かったのだが、どうもそれが正史編纂委員会とかいう日本の呪術組織（多分である。しかし万里谷祐理とかいう巫女の独断だとは思えない）の琴線に触れたらしく、持つて来いと言付かったのだ。天下の魔王カンピオーネに對してである。という訳で彼は余所様の神具を持つて日本の神社に参ろうという罰当たりな事をしているのである。

他に場所は無かったのだろうか？別に話すだけなら喫茶店でも良いし、内密でも何処かの店を貸切にする事ぐらい出来たはずである。

そんな益体も無い事を考えながら長い石段を登りきり、鳥居を潜ったところで、

「よくいらして下さいました、草薙護堂さま——。カンピオーネである御身をお呼び立てした無礼、お許しくださいませ」

と、深々と頭を垂れた巫女さんに出迎えられた。

昨日万里谷祐理について、護堂の妹である静花は『すごい』と連呼した。妹のボキャブラリーの貧困さを少々憂慮しながらも“頭が少し可哀想な美少女？”と理解したものである。本人が近くに居るのに電話を代わらないのは——静花にも非が有るにせよ——おかしな事である。『明日は用事があるから無理』と言われる事を想像しなかつたのだろうか？

「万里谷祐理と申します。昨日はいきなりお電話をおかけして、失礼いたしました」

確かに美少女だった。上げた顔から上品さと、予想外にも聡明さが伝わってくる。しかし、どこか抜けているのは間違いない。失礼なのはいきなり電話をかけてきた事では無い。そもそも電話とはそういうものである。

何より失礼なのは“自分の用件だけ告げて、こちらの都合も聞かないまま一方的に約束事を押し付けた事”である。勿論自分が居なければそれで良い。しかし『横に居たんだから都合くらい聞けよ』

という事である。代わると言わなかった静花も悪いが、代わるという発想自体が無かった万里谷祐理はそもそも断られる事を考えなかったと言う事でもある。

護堂がヴォバンみたいな性格なら、今頃七雄神社はこの世に無い。正史編纂委員会も終了のお報せを届けられた事だろう。護堂が庶民派を自称するような偽善者で助かったと言うところだろう。よくまあ、こんな世間知らずを一人で使者に立てたものである。責任は上司にも行くというのに……。

「なあ、君も魔術師たちの仲間でいいんだよな？ほら、ヨーロッパにいるみたいだ。日本の連中に会うのは初めてだ」

「はい。……あまり十把一絡げにくくられたくないのですが、そのご認識に大きな誤りはありません。私は武蔵野を守護する巫女のひとりとして、この社でお勤めをしています。ささやかですが、呪術の心得もございます」

十把一絡げにくくられたくないと言ったが、護堂にはどうしても別モノだと思えなかった。エリカといい、ルクレチアといい、人の事なんかお構いなしに自分の都合を押し付けてくれるのである。経験の浅い護堂が“魔術なんて怪しい技術を学ぶ女は人の都合を考えない”と思ってしまうても仕方のない事であろう。

「……ええと、万里谷さんはひとりだけ？誰か、他の人はいないの？」

出来れば誰かに同席してもらいたい。健全な10代半ばの男子だし、美少女は決して嫌いではない。が、いきなり二人きりはハードルが高い。

「はい。今は私ひとりしかおりません。ですから、御身の逆鱗に触れるような失態がありましても、罪は私ひとりのものとなります。どうぞ、お怒りは我が身のみ下されるよう、ご寛恕を請いとうございます——」

「あの、万里谷さん？今、変なこと言わなかった？」

「荒ぶる魔王たる御身のお怒りは、私ごとき殺めたところで収まる

ものではないと承知の上で申し上げます。何卒、関わりなき無辜の民を戯れに踏み潰すような真似は、お慎み下さいませ。慈悲と寛容を示すお振る舞いは、王者の人徳にございます。全ての咎は、どうか私ひとりのみ帰するものとご容赦下さい」

誰かに同席してもらいたい。出来れば上司の方に。

この巫女さんのような（多分）下っ端一人で人死に出るような罪が贖えるというなら使用者責任なんていらないし、責任を取るために居る責任者なんていないのである。おっと、思考がおかしいな。どうやら動揺しているらしい。

「ツツコミどころがありすぎて困るんだけど、まずひとつ。俺が君をどうするって言うんだよ？俺はネ口でも董卓でも織田信長でもないぞ。誰が殺したりするか！」

「……それはつまり、命を奪うだけでは飽き足らないという意味なのでしょうか？」

「じゃなくて。いいか、俺はごく真つ当な文明人で、荒っぽいことは嫌いなんだ。その辺りを少し理解して欲しいんだけど」

「……はい。もう覚悟は決めております。私をお嬲りあそばすと言うのであれば、お望みのままになさいませ。すぐには楽にさせないと、おっしゃりたいのでしょうか？」

「全然わかってないじゃないか！俺に拷問の趣味は無い！」

誰かに同席してもらいたい、切実に！誰でも良いから話の通じる人に！

と、ここで護堂は少し奇妙な事に気付いた。たとえ魔術師といえども、自分がカンピオーネである事を知るものは少ないはずだ。実際、数日前にローマで会った大魔術師たちも、国内であれだけ暴れ回って狼藉の限りを尽くしたというのに、エリカとの決闘で権能を目にするまでは疑ってかかっていた。

不毛な話の流れを変えるために水を向けてみる事にした。

「君はどうして、俺がカンピオーネだと断言できるんだ？」

「それが私の力です。私の目は、この世の神秘を読み解く霊眼

なのです。……以前、ヴォバン侯やサルバトーレ卿、そして草薙さまの御従兄にあたる西条さまにもお会いしたことがございます。カンピオーネ——羅刹王の化身たる方々を見誤ったりはいいたしません」と言いつつ、数ヵ月後“アニー・チャールトンがジョン・ブルートー・スミスというカンピオーネである”ということを見抜けなかったりするのだが……。JPSと見抜けなくてもカンピオーネであるということくらい見抜こうぜ。トカゲが教主だという事は見抜いたんだから。

それは兎も角、ヴォバンの事は護堂も話に聞いている。カンピオーネの中でも有数の危険人物だと。

と言つてもカンピオーネ自体八人しか居ない。一人は隠居状態だが、残りは全員傍迷惑さを振り撒いている。

サルバトーレとの事は記憶にも新しい。陽気なラテン気質の兄ちゃん、ヘラヘラ笑いながら万象総てを切り裂く魔剣で斬りかかってくるようなナイスガイだ。

最後に従兄である西条祐一は護堂——と言うよりは身内に対しては気遣いもあるし普通なのだが、『他人のためにタダで働くのは嫌だ！』と豪語する人物でもある。軽く躁鬱の気があるようで、基本的に明るい性質なのだが気難しく感じる部分もあり、扱いの難しい男ではある。初対面の人には厳しいだろう。

なるほど、こんな奴らに会ったんじゃあ、カンピオーネに偏見を持つのも無理も無い。

実のところ偏見でもなんでもないのだが……。

「そ、それでか。大丈夫、そいつらはカンピオーネ有数の危険人物だから。そういう奴はカンピオーネの中でも少数派のはずだぞ。一緒にしないで欲しいんだけど」

護堂は『俺はそいつらみたいな奴じゃない。いたって平凡な人間だ』と滲ませて言い放つ。

しかし、良識ある読者諸兄はご存知だろう。八人中三人は少数派とは言えないし、そもそもカンピオーネという輩はすべからず傍迷

惑な存在であるという事を……。しかも、殆どのヤツに悪気は無いのである。

ヴォバン侯爵は戯れに嵐を呼んで一つの町を吹き飛ばし、生あるもの全てを塩の塊にするような奴で、羅濠教主は己の姿を見た者の目を潰し、声を聞いた者の耳を削ぎ落とす。

黒王子アレクは人に安楽椅子探偵というシャーロック・ホームズみたいな事を要求するくせに、自分はしっかり足で情報と証拠品を（時に他人から強引に！しかも返さない！！）稼いでくるのである。奴の安楽椅子はキャスター付きだ、間違いない。

ジョン・ブルートー・スミスは秘匿すべき魔術（及び権能と異形の存在）を、ロサンジェルズという大都市で、特に隠蔽する事も無く、というかむしろ大々的に披露している。唐突に落雷が巨大な建造物を破壊したかと思えば巨人が現れ、地震がきたかと思えば毒を吐き出す怪鳥が現れ、光が消えたかと思うと黒豹が現れ走り去るのである。何より恐ろしいのは、既に住人が慣れきっていることである。

西条祐一は紛争地帯に戦乱を呼び込む男で、サルバトーレ・ドニは剣で語る事しか出来ない———というかする気の無いダメ人間。

そして最後に、草薙護堂は事ある毎に何所かを破壊するのである。それも多くの———というか、ほとんどの場合観光地の名跡を……。それがどういう事かわかっているのだろうか？修復の為に大金が投じられ（国家予算なので税金が重く押し掛かる）、その間観光客は呼べないから収益は大幅にダウンである（ご当地の方に死ねと言いたいのか）。そして反省はするも、悪びれない。気の毒に思いながらも、弁償はしない。

カンピオーネとは概ねそんな奴らである。

なお、この評言は正確では無い、実際にはこれよりも酷い奴らなのである。

「ご謙遜を。あなたさまがイタリアの各地で下されたお怒りの激しさは私も承知しております。あれほどの破壊の数々、まさに魔王の

所業です。恐ろしい方……」

「……い、いや、別に腹いせに壊したわけじゃないんだけど。そう
だ、それより万里谷さん、その話し方はやめてくれないか？俺と同
じ一年生なんだから。タメ口でいいよ、俺もそうするからさ」

話を変えても、いや、より深みに嵌った気がする。ので、さらに
話を変える。言葉使いが変われば雰囲気も変わるかもしれない。

「申し訳ございません、私の口の利きように至らぬところがあつた
のですね。失礼をいたしました。……ところで、タメ口とは何の事
でしょう？」

しかし、このお嬢様の辞書に“タメ口”は載っていないようだ。
スラングだしね。

護堂は住む世界の格差を痛感した。

しかし、彼女の家より歴史も格式もある四家のお嬢様がた（つい
でにこのお嬢様の妹さま）の辞書にはちゃんと載っているので、育
ち云々より性格だろう。

まあ、住む世界なんてどうでも良いことである。だって地球は丸
いんだから……。

「もっとフランクに行こうぜ、ってことだよ。敬語とか肩が凝るだ
ろ？聞いているほうも落ち着かないしさ。俺は君の事万里谷って呼ぶ
から、そっちも呼び捨てにしてくれ。なんだったらあだ名でもいい」
「そんな！？……困ります。身分だって違いますし、男性を呼び捨
てにだなんてしたことありませんし——」

恥じらいながら祐理が言う。この辺りはお嬢様っぽい。

余談だが、恵那も誓もあれで目上（年齢という意味ではない。年
齢と立場が逆転しているのは間々あることである）と男性を呼び捨
てにした事が無い。——冬姫はお嬢様としてはどうなんだろう？

だんだん同じ国の住人とは思えなくなってきた。でも大丈夫、一
万円札の人は『天は人の上にも下にも人を創らないよ』って言うて
たし……。

ついでに言えば、ごくごく平凡な（怪しい付き合いのある）一般

市民（カンピオーネは裏世界の王様）と外食チェーン店会長の孫娘だと、間違いなく祐理の方が上流階級である。護堂に裏世界の特権を使う気は今のところない。

「……まあ、あんまり無理しなくてもいいけど、せめて、もう少し気楽に話してくれ。あと、様とか付けて呼ぶのもなしで頼む」

「はあ……。努力いたします、その、草薙——さん」

こちらの反応をうかがう祐理に護堂はうなずいた。

同い年の娘に『さん』付けされるのもくすぐったいが、『様』よりは100倍マシだ。なにより学校で彼女に『様』付けされた日には、自分は（主に社会的に）抹殺されるかもしれない。そう、クラスメイトの三バカあたりに……。いや、奴らなら直接手段に訴えるか？

「では、草薙……さんをお願いします。あなたがローマから持ち帰ったという神具を、お見せいただけませんか？」

脳内で迫り来る三バカを撃退していると、真面目な表情に戻った祐理が訴えた。

特に異論があった訳ではない、と言うかそのために来たのである。メダル——ゴルゴネイオンを取り出し、渡す。

何故メダルの事を知っているかなど聞かない。望むと望まざるに関わらず、自分の影響力は承知させられている、常時でなくとも監視ぐらいは付いているだろう。でなくては自分がイタリアから神器を持って帰ったかなんてどう調べるといふのだ？

監視を付けたくなる気持ちはわかる。どこを壊されるかわかったもんじやないのだから……。何しろ自分でもわからない。

考えつつボケっとしていると、祐理の鑑定は終わったようだ。

「恐らくですが、古い、そう、ひどく古い神格にまつわる聖印です。蛇神、オロチの印……。いえ、もっと根源的な、母なる大地と巡る螺旋の刻印——」

目を細め、謹厳な雰囲気ですべて祐理が言う。

「これは只の直感なのですが、このメダルは北アフリカで出土した

物かもしれません。エジプト、アルジェリア……その辺りのことが何となく思い浮かびます」

彼女は自身の力を『この世の神秘を読み解く霊眼』と言った。知識による鑑定ではなく、霊視による預言だったらしい。僅かながら漏れ聞くところによれば護堂の従兄もこの能力があるとかないとか……。

しかし、出土地がアフリカとは意外だった。ギリシャとばかり思っていたからだ。

「草薙さん、ひとつ質問をさせて下さい」

ぐるぐると考え込む護堂に、祐理が訪ねてきた。答え？勿論聞いてない。質問するぞと言う宣言である。

「これは明らかに『まつろわぬ神』の神具です。カンピオーネであるあなたが、それに気付かないはずありませんよね？」

「ん、まあ、そうだよなア……。やっぱり神様がらみのヤバイ物だよなあ……」

石で叩き割ろうとしても、糸鋸で切ろうとしても、チェーンソーで真つ二つにしようとしてもどうにもならなかったシロモノだ。不可思議な力が宿っているのは間違いない。

「あなたは、この東京で禍つ神呼び寄せるおつもりなのですか！？地元住人の安全を、なんだとお思いですか！」

頷いたら、雷が落ちた。美人が怒るととっても迫力があるものである。

だが、護堂にも言い分がある。下手な三文芝居で押し付けられたのも事実だが、現地の皆さんにはカンピオーネが現在絶賛サボリ中バカンスなため居ないのである。なら自分が引き受ける方が犠牲も少ないだろう。

「ほら、一応俺は神様とも戦えるしさ！それにこれを欲しがるのつて、あっちの方の女神様らしいから、大丈夫じゃないかな？あの連中、たぶん日本の位置も国名も知らないはずだぞ」

「じゃないかな？……で、要らぬ危険を冒さないで下さいませ。草

薙さんの調査書を読んだときから気になっていました。あなたは周囲への配慮が足りなすぎです」

もともと日本（正史編纂委員会）からすれば、掘り起こして持つて来たのは欧州の魔術師なのだから、厄介事も現地で引き受けて欲しいところである。どちらにも道理はあるのだ。

実際、護堂の配慮の足りなさは憂慮すべき事柄だ。……主に正史編纂委員会が。

悩み、苦勞するのはいつだって下っ端なのだ！

「大いなる力には、大いなる責任も伴うと申します。だというのに、草薙さんはあまりに無責任ではありませんか。——四年前に私は御従兄の西条さまに救われました。あの方は今も私財を投じて紛争地域に平和を促すべく、戦っていらつしやるとのこと。それなのに、あなたはこんな曰くありげな神具を、愛人の女性にせがまれるまま故国に持ち帰るだなんて——」

いま、従兄について変な事を聞いた気がするが、それ以上におかしな事を聞いた。

愛人——あいじん現在日本国においては、愛する人と捉えられることはま
ずない。一般的には二号さんとかお妾さんの別称である。これはバ
ブル期の『愛人契約』とか言うものの名残らしい。これが廃れると、
次に『援助交際』とか言う言葉が作られた。

愛人——アイレン中国語においてその言葉は、文字通り愛する人と捉えら
れる。恋人ととる事もあれば『夫』『妻』ととる事もある。欧州で
も恋人を日本語に直訳すると愛人になりかねない。ましてや、草薙
護堂の愛人と目されている少女は香港留学の経験もあるのだ。

護堂は基本的に甲斐性のある男が何人囲おうと良いと思っている
だが、自分にはその甲斐性というものがないとも思っている。本命
も居ないのに愛人なんて……ということである。

要するにふたりとも見事に勘違いしているのだが、正すべき正史
編纂委員会が面白おかしくするためにあえてそのままにして置いた
可能性もある。

この後、その愛人——エリカ・ブランデッリがでてくるまで、不毛な言い争いが続くのだが、都合によりカットする。

あと、万里谷祐理は勘違いしている。多分ノブレスオブリージユのことだろうが、あれは大いなる力に義務が宿るのではなく、高い地位に相応しい義務と権利なのだ。カンピオーネは“代表戦士”“覇者”であって“国王”でも“領主”でもない。魔術師どもが勝手に崇めているだけで、正式な地位もノブレスオブリージユも存在しない。

王者の仁徳？……ハッ！領土もなく、民も居らず、法も無い。故に余所の臣民のことなど考える必要は無いのだ。

そして、カンピオーネという輩は基本そんな事を気にするような連中ではない。流石に全員ではないが、考えている人も単なる誇大妄想のようなもので、都合の良い所だけ見て都合の悪いところは華麗にスルーである。

どちらがよりマシかは議論の余地もあるだろう。ぶっちゃけ、どっちもどっちだが……。

長く美しい赤みがかった金髪、身にまとう華麗な雰囲気、整った顔立ち。

衆目を集めることが当然と言わんばかりの不遜さと、気高いまでの誇り高さ。両者が絶妙のバランスで釣り合う覇気に満ちた表情が、生まれ持った美貌と合わさり一層輝かせている。だが『綺麗な薔薇には棘がある』の言葉どおり、それだけの娘ではない。勇猛と狡知、武断と権謀術数をも兼ね備えた才色兼備の令嬢（ミラノ在住）。

エリカ・ブランデッリとはそんな少女だ。

そんな彼女が日本の神社の境内に出現する。実にミスマッチだ。「ちょうど、俺と万里谷は、おまえから渡されたゴルゴネイオンの

話をしてたんだ。……もしかして、日本に来たのはアレがらみの理由じゃないだろうな？」

実際、直前に話していたのは愛人云々の誤解を如何に解くかである。

しかし護堂もカンピオーネの端くれ、（カットしたが）直前までじやれていたエリカの所業とともども棚の上に放り上げた。

「鋭い。A評価をあげてもいいわね。——実は、わたしたちよりも先に来たのを追いかけて、日本まで飛んできたのよ」

エリカも心得たもので、あっさりと話題を変えた。

「……来たって、何が？」

訊くべきではない。訊いたらまずい。でも、訊いちゃう。

護堂だって何が来たかくらい察しはつく。一縷の望みを掛けたが、現実は無情である。

見れば祐理の顔色が蒼白になっている。どうやら、不吉の予兆を霊視してしまったらしい。いや、別にそんなものなくても話の流れから自ずと導かれる。

まさか、神器を横取りしようとは何処かの魔術師が来たわけではあるまい。

「もちろん『まつろわぬ神』が。護堂がローマで会った女神様と特徴が一致するわね」

「やっぱりかよ！ああ、やっぱりこうなった。東京都民にどう言い訳すればいいんだ！？」

「ローマでも言ったけど、気にしない気にしない。王の気まぐれで街ひとつ滅ぶ事なんて、ヨーロッパじゃ日常茶飯事なんだから。ほら、これで東京も世界標準ね」

「あの時も言ったけど、いい加減な嘘をつくな！」

あまりにもあんまりなエリカの言葉に、祐理が口をパクパクさせている。東京が空前絶後？の災厄に見舞われるのは半分以上この女のせいだ！

なお、護堂はエリカの言葉を嘘と断じたが、大袈裟ではあっても

嘘ではない。

何故ならあそこにはヴォバンが居るからだ！！

奴ならやる。というか、侯爵の名はそうにして篡奪されたのだ。

「何でローマから追いかけてこれるんだよ？俺は自分の出身地なんて話してないぞ！？」

そこは神様の不思議パワーである。正しく人智を超えた輩に何を言っているのやら。

結局神殺しであろうと神ならぬ身の人間に、神々の限界を窺い知ることなど不可能なのである。少なくとも護堂はそう感じた。が、彼が楽天的すぎただけということも無きにしも非ず。

「その点に関しては、わたしたちが甘かったみたい。海を越えた程度じゃ、誤魔化せなかったのね。……まあ、来てしまったものは仕方ないし、撃退の方法を考えましょう」

「他人事みたいに言うな。神様を連れ込んだ罪はおまえが主犯、俺は共犯なんだからなッ」

「そ、それで降臨した『まつろわぬ神』は今どこに？名前——神の御名はなんとおっしゃるのですか！？」

エリカは護堂の質問に対し『わかってるわよ』と言いたげに手を振ったあと、祐理に振り向き、

「すこし前から話を聞いてただけど、あなたは靈視術の使い手みたいね。ちょうどいいから、どこの神様が来たのか託宣してちょうだい」

投げた。

質問を質問で返すのはいけないが、質問を命令で返すのは良いのだろうか？

エリカと祐理は初対面である。

禍を持ち込んだ原因の一部は間違はなくこの女である。

だと言うのに、威丈高に命令した！

言葉こそお願いの形をとっていても、態度・口調が完全に命令で

ある。

そして、これが『エリカ・ブランデッリ』と言う女なのだ。相棒がこんな奴なので護堂は誠心誠意、平身低頭お願いした。

祐理はぶつくさ言いながらも、東京がまつろわぬ神の襲来でめちやくちやになるよりはと思ったのか、霊視してくれた。まあ、単にお願いを断れなかっただけかもしれないが……。

『なんでも見える便利な力ではない』と言いつつ60%オーバー的中率を誇るらしい預言の巫女は、この時もその力を発揮し、見事その御名を暴いた。

神の御名はアテナ——日本でも名前くらいは大体の人が『知っている』と言わしめるほどのビッグネームである。

この後、祐理はアテナ迎撃に赴く護堂からゴルゴネイオンを取り上げた。

『アテナが探している品をわざわざ持参して、どうするおつもりですか！それは私がお預かりします。——もう、本当に仕方のない人ですね！』

という事らしい。

“交渉とかにも使えるんじゃないかな？”とも考えた護堂だが、祐理のあまりの迫力に思わず渡してしまったのである。エリカも何も言わなかったので、『まあ、いいか』となったのである。

以上、七雄神社境内での出来事である。

最初から最後まで立ち話。茶菓子はおろか、茶すら出てきていない。

マジである。この話を書くために一巻読み返したら、全部鳥居の辺りでの出来事なのである。ぶっちゃけ部屋に移動したと思っていた。

いただく、いただかないは個々人の自由だが、茶ぐらい出せよ。都合も聞かずに人を呼びつけておいて、家にも上げず、茶も出さず、説教し、しかし客人が持参した貴重な品物はなんだかんだと言

って取り上げる、纏めるところである。

本当にこの娘はカンピオーネ^{II} 貴人或いは魔王だと思っているの
だろうか？あまりにも礼儀に適っていない。

いや、彼女も緊張してたんだと思う。そうであって欲しいと切に
望む。

一話 七雄神社にて（後書き）

カンピオーネ！の言いたいところの半分くらいを吐き出した第一話。元の構想とはかけ離れましたが満足です。

でも、中身は原作と変ってないなあ。とお思いの方、暫く待っていただきたい。神様も強化していきますので、後の方になるにつれて変っていくはずです。

主人公であるオリピオーネは暫く出てきません。でも、アテナとは戦う予定。3話が4話で出てきそう。

当SSは『鋼』及びアテナの強化を応援します。

二話 千葉での戦い（護堂編）

その少女は人ならぬ美しさだった。

画家や彫刻家が見れば『表現する事が出来ぬ』と絶望のあまり憤死する……かどつかは知らないが、とにかく誰が見ても言葉に出来ないくらい美しいと言っだろう。

それも当然である。彼女は絶世の美女が多いとされるギリシャ神話の女神たちの中でもトップ3に入る美貌なのだから。——個人的にこのエピソードは色々と思うところがあるのだが……。

アテナ——知恵、芸術、工芸、戦略を司るオリュンポス十二神の一柱である。

このアテナはローマの地で顕現したためミネルヴァの権能も保持している。即ち、詩文、医学、商業、製織、魔術である。梟を聖鳥とするため、一部夜を象徴する部分もあるが、権能として保有する程でもない。

聖木のオリーブは平和を象徴し、戦争の正義の守護者として知られる。『守る為には力が必要だ』という事だろう。『平和を望むならば戦いに備えよ』《Si Vis Pacem Para Bellum》というラテン語の諺もあるし……。

また、彼女は戦乱の軍神・アレスをボコボコにするだけの武力を誇り、ギガントマキアでも自ら武器を取って戦った戦女神である（この時討ち取ったパラスという巨人の皮で盾を作ったとか……）

単なる『鋼の英雄』の介添人』ではないのだ。

なお、万里谷祐理は『その位と齡を剥奪された女神……故に小さく……故にまつろわず』と霊視したが、彼女は実のところ『オリュポスのアテナ』としてはほぼ完成している。無いのはゴルゴンの盾のみで、ようするに“ペルセウスによるメドゥーサ討伐”前のアテナである。

彼女の見た目はローティーン、下手をすればプレティーンにも見

えるが、これでも彼女は成人している。実年齢とかではなく、そもそも成人の概念が今と昔では違うと言う事である。

彼女は処女神で、そしてその権能は割りと男性的である。なぜなら、ゼウスを超え得る神であり、且つ男ではないと言う役割が与えられたからだ。男を好きになれなくせに、男を守護し、常に父の味方であると言う難儀な設定をしているのだ。まあ、征服した方とされた方の力関係の結果でもある。まだ彼女はマシな方だと言うものだ……。

主権の褫奪

おそらく、古の大地母神から天と地の聖婚によつて分離した際に、“蛇”“冥府”“四季”“母性”を剥奪されたのだろう。一部名残があるが“死”と“夜”の権能も剥奪されている。

小さく幼いのは確かに神話に大地母神としての位を剥奪されたからだが、まつろわぬ神になったのはそのせいではない。——ゴルゴネイオン出土に釣られたのかも知れないが……。

自らに關与する神具を回収するのは“まつろわぬ神”の宿命である。

神話よりの強制であり、より強力に、より自由になるための習性なのである。とりあえずこの話では！

そんな彼女が千葉の海辺に來臨しようとしていた。

さて、どこでどうやって手に入れてくるのかわからないが、アテナの服装は実に当世風だ。イタリアで会った時もそうだった様に思える。

薄手のセーターとミニのスカート、黒いニーソックスなどを着込み、頭には青いニット帽を乗せている。これが顕現したときから着ている古代ギリシャの神の装束だと言うなら、話は別だが、その場合はいろいろな常識が完膚なきまでに破壊される事になる。

「久しいな、神殺しよ。妾はあなたと再会できて喜ばしく思う」

銀の髪と黒の瞳を持つ美貌の幼神が、古風な言い回しで告げたその言葉は、聞くものをうつとりさせるほど可憐な旋律だったが、告げられた護堂にそれを楽しむ余裕は無い。

「俺は喜ばしくない。あんたたちは平和に暮らしている人間を巻き込んで、いらん騒ぎを引き起こすだけだからな。はつきり言つて、迷惑だ」

「エピメテウスの申し子にしては、良識ある発言だ。あなたは珍しい神殺しだな」

そうのだまう女神は、あまり好戦的に見えなかったが、安心はできない。神々の思考や行動は人間の基準では予測できないからだ。アテナは悪神ではない。むしろ善神だ。世が世なら国家を挙げて彼女を奉り、庇護を求めてもよいほどの……。

彼女にとって人間は庇護する対象である。守護もしよう、慈しみもしよう、しかし加減はできない。

また、同時に『人間が道を外さないように規律も必要』『10の内9を救うために1を犠牲にする』という思考も持っている。

悪気はなく、むしろ好意で必要以上に強大な力を振り回すからこそ、まつろわぬ神は善神であつても迷惑で厄介な存在なのである。

「まずは名乗ろうか。妾はアテナの名を所有する神である。以後、見知りおくがよい。東方の神殺しよ、あなたの名を聞きたい。これより古の《蛇》を賭けて対決する我らなれば、互いの名を知らずに済ませる訳にもいくまい」

「俺の方には、あんたと戦う理由は一つも無いぞ」

「あなたは古き帝都よりゴルゴネイオンを持ち去った。《蛇》を妾より遠ざける者は、何者であれ妾の敵だ。もつとも、あなたが妾に《蛇》を返すと言うならば話は別だが……」

そんな訳が無い、と思っているような口ぶりだった。

勿論、護堂にゴルゴネイオン返却の意思は無い。ついでに手元にも無い。

まあ、ただでさえ強力なアテナをこれ以上強壮にさせても人間様

にとってメリットは何も無いのである。満足してどこかに引籠もるとか言うのなら渡してもいいかな〜とと思っているが。

「さあ、聞かせてもらおうか、あなたの名を」

「……草薙護堂だ。それと、そっちに居るのはエリカ・ブランデッリ。あんまり人間を無視するな。神様だろうが何だろうが、すごく失礼だぞ」

エリカをちらりと見ながら、護堂は名乗った。

ちなみに、これは一応決闘の名乗りである。アテナはそう宣言したはずだが、護堂は聞き飛ばしたのだろうか？

確かに、アテナに限らず神々というのは、神殺しでもなければ人間の個体など気にしない。

それを失礼と取るならそれは仕方がないが、神と神殺しの決闘にサラリと単なる人間を巻き込む護堂は非道である。アテナは一騎討ちの心算かもしれないぞ。

「草薙護堂。耳慣れぬ、異邦の男らしき名だな。覚えておこう」

アテナはエリカの名を聞き流した。

護堂は少々ムツとしたが、もう一度言う、これは決闘の名乗りである。聞き届けてしまえば、戦う時には古の作法に則って殺さねばならない。無関心から来る無視ではあるが、これもある意味情けであり、優しさである。

「さて草薙護堂よ、重ねて問おう。ゴルゴネイオンは何処にある？」

「あのな……俺が大人しく教えると思うのか？」

「思わぬよ。が、まずは訊いておきたい。闘神としての妾の心は草薙護堂を敵だと認め、戦えと叫んでおる。しかし、智慧の女神たる心は警告を発しておる」

深淵にも似たアテナの黒い瞳が、興味深そうに見開かれていた。

「あなたは奇妙な神殺しだ。我が同胞から奪い取った力は、まだ少ないはず。しかし、アテナをアテナたらしめる機知が、あなたを危険だと告げている。迂闊に手を出せば、手痛い反撃を受けそう……畏にも似た脅威を感じておるのだよ。故に、改めて問う。その返

答によって対応を決めよう。妾はアテナ、闘争と智慧の女神である。和するも良し、争うも良し。さあ、あなたの答えは如何に？」

「できれば和を取りたいんだけどな、俺は……。断るよ、逆に提案するけど、ゴルゴネイオンのことは諦めて、このまま帰ってもらえないか。無益な戦いでお互いに傷つけ合うよりもその方が賢いと思うんだけどな」

神具は渡せない、しかし戦いは避けたい。護堂は意外に理性的な女神の姿勢に、“何とか交渉で妥協点を見出せないか？”と話を持ちかけた。

しかし、これでは交渉でもなんでもない、単なる恫喝である。そもそも神殺しの魔王カンピオーネが自分の神具を持っていたから、こんな極東まで来たのだ。

アテナは承知していた、神殺しと見える事を、神殺しと相争うだろうという事を。

草薙護堂は気付かない、護堂にとっては無益な戦いでも、アテナにとっては古の自分に還るための聖戦だと！

つまり、

『お前らが勝手に持って行った自分の神具を返してくるなら戦わなくても良いよ』

と、アテナが交渉してきたので、

『返せません、でも帰れ！』

と、護堂が返したのだ。

この男にとってはこれが交渉なのだろう、ひどい話である。

妥協点というなら“ゴルゴネイオンを返す”の一言に尽きる。それとも他に何か代わりになる物があるのだろうか？

そして、ゴルゴネイオンを返せば“神の誓い”に則り、護堂と和睦し、日本から立ち去っただろう。神は基本的に、一度約束した事を反故にする事はないのだ——それこそ裏切りの神とかでない限りは。

結局、戦うしかなかった。

「あなたは神殺しにしては善良な男だ。闘士としては度し難く、王としては愚かしいほどに。しかし、それは逆に未来の英雄たる者の器と言えるやもしれぬ。——確かに、我ら神々とあなたたち神殺しの闘争は、互いのみならず民草まで際限なく傷つけよう！だが、あなたのその言い分は妾も受け入れる事はできぬ！」

この上は刃にて決着を付けるべし、そう宣言したアテナは、当世風の衣装から古代ギリシヤ風の貫頭衣に改まった。その上から胸甲を纏い、兜を被り、槍と盾を持った。簡素ではあるが、古代ギリシヤ風の軍装である。（当然、某八十八星座の聖衣を纏った集団のボスとは違い武器に忌避感はない。ちなみにそのボスも設定上は13歳である）

「神様っていうのは、なんでこう好戦的なやつらばかりなんだ！？」
あんな交渉で追払えるかもしれないと思っていたらしい護堂は、自分の事を心の棚に上げて罵った。

とは言え、神様に襲われてボケつとしている訳にもいかない。

この女神に使えるそうな化身はなんだ？

雄牛——見た目よりは力がありそうだが、どうもパワーファイターでは無いらしい。或いは剛力の権能があるとしても使っていないのか？少なくとも現在は使用不可。

白馬——今のところ人々を苦しめているわけではなさそうだ。使用不可。

駱駝——あの槍でブスリ刺されれば使えるだろう。しかし好んでやりたくない。保留。

猪——こんな所でか？この辺一帯が更地になるぞ！いや、白馬も似たようなものだが……。 “保留”。

鳳——通用するか？時間内に倒しきれるか？攻めきれずに時間切れになったら動けなくなるから、真っ先に使うべき化身ではない。

保留。

戦士——アテナ用の剣を研いでいない。使用不可。

なんというか、碌でもない能力ばかりである。

比較的使いやすい『雄牛』が使えないだけでこの有様。結局のところ『駱駝』か『鳳』しかない。変な意地を張らず、エリカに教授して貰っておくべきだったか？

いや、今更だ。腹を括るしかない。

「よい顔になったぞ、草薙護堂！——さあ、アテナの槍を受けるがよい！」

言葉と共に繰り出される槍は、もの凄く速い。

一発喰らって『駱駝』になろうと思っていたが、なんかそのまま別の世界に旅立てそうな攻撃だったので、後先考えず『鳳』を使う事にした。

——世界が遅くなる、否、護堂が速くなりすぎているのだ。閃光のようなアテナの槍がとつてもスローだ。

「む、それがあなたの権能か？その速度、身のこなし、まさしく神鳥のようだ！」

近くにいるはずのアテナの賞賛も、どこか遠くから聞こえるかのようだ。

この化身の特徴は速度と時間感覚の加速、そして身の軽さの上昇である。しかし、自分でも速すぎて上手く身体を動かせないのが難点だ。

攻撃を避けるのには便利だが、こちらの攻撃も当て難いのである。

しかも、時間と共に心臓が痛くなり、時間切れになると全身が麻痺する。

“この化身になった以上時間をかけるべきではない”そう判断し、護堂はアテナに果敢に攻めかかる。

一瞬で距離を詰め、右フック。外れた。30cm以上も離れてやる。

返すアテナの攻撃を避ける。

と、ここでアテナの動きが変わった。

妙にカクカクしたビデオのコマ送りにも似た突きの挙動、これは『鳳』の神速を破る闘技！先日サルバトーレ・ドニと戦った際に見せられた奥義であつた。しかもドニのそれより技術自体は数段上である。さすが闘神。

まさかアテナまでこの技が使えるとは思っていなかった護堂は、何とか避けようとしたものの、意外に伸びた槍の穂先に心臓を抉られたのだつた。

二話 千葉での戦い（護堂編）（後書き）

元大地母神で、ヘパイストスにぶっかけられ、ポセイドンと敵対した。アイギスを持ち、アルキュオネウスをヘラクレスとともに引きずり出し打殺したアテナ。

—— なにか思い浮かびませんか？

アテナたん強化フラグ

ここまで、勢いだけで書きました。

プロットは全て頭の中、いつ矛盾が出るかわかったもんじゃありません。

投稿準備でクールダウン。

何分はじめてなので、見直しはしましたが、いろいろ不具合（誤字とか、ルビが振れてないとか）あると思います。その時はこっそり教えて下さい。

どうやら、アルファベットにルビは打てず、アルファベットのルビも打てないようだ。ぐはッ

三話 アテナ再臨（前書き）

なぜ、タイトルをあんなにしたのだろう？昨夜の自分がわからない。

因みに、カンピオーネが暴虐の限りを尽くすのではなく、カンピオーネ！キャラクターの傍若無人ぶりに慄いていたらあんな感じになりました。

でも、良い案は浮かばないので暫くほっときます。

三話 アテナ再臨

「我は主の御名を告げ、世界の中心にて御身を讃え、帰依し奉る！」
あつという間に終わつた護堂とアテナの戦いにエリカは舌を打つた。

援護のために絶望の呪詛を唱えたのに、完成する頃にはやられていたのだから、文句の一つも言いたいだろう。

やはり無理やりにでも 教授 しておくべきだった。護堂が嫌がるのとアテナの運転でそれどころではなかったとは言え、神と戦うには準備をしすぎるということはない。

まあ、護堂はしぶといから死にはしないだろう。

「女神アテナ、草薙護堂の騎士たるエリカ・ブランドゥリが請います。疾くこの場を去り給え。この願いを聞き届け給われぬのであれば、我が剣を以て主を守護いたしましょう」

原作では不意打ちだった。

とは言え、一介の魔術師風情が勝てるほどまっろわぬ神は甘くない。実力よりも運とめぐり合わせと不屈の闘志が勝利を呼ぶのだ。しかもこのアテナは強化版。不意打ちなど無く正面から護堂を突き殺した。

いかに神々が人間を舐めてかかる、いや、殆ど認識できないとはいえ、無謀である。

「ほう。プロメテウスの継嗣にしてヘルメスの門下たる者よ、そなたは主のために身を捨てるのか？」

アテナは勇士を好む。それが本当に正しいかどうかはともかく、正義と信じて戦うそのあり方を好ましく感じるのだ。……それが女であればなおのこと。

故に、はじめてアテナはエリカを見た。まるでペットの猫を見るような目だった。

「必要とあらば。わたしは騎士。主と誇りのために死すのであれば、

それも本望。アテナを最古に連なる女神を敵に回すのですから、その程度の覚悟は決めております」

エリカが主と定めた護堂は、欠点が実に多い。

エセ平和主義でお人よし。権能の使い勝手も悪ければ、女のあしらいも悪い。

特に女に気を持たせて放置は非道に過ぎるし、そもそも女など自分ひとりだけを見て満足していれば良いのだ。

今回前者の悪癖は裏目に出なかったようだが、こんな美少女とのキスを拒んで敗死するというのは戦いを舐めているとしか思えない。今度から強引にでも 教授 しよう、そのための大義名分はできた。——と勝手に結論付けたエリカは、さてどうやってこの場を切り抜けようかと考えをめぐらせた。

護堂は死んでも生き返る、『雄羊』の化身の力で……。しかし、再生中に止めを刺されても生き返れるかは不明だし、試したいとも思わない。

まずは、アテナを護堂から引き離す必要がある。

「本当に世話の焼ける人なんだから。このわたしに、ここまでさせるなんて——」

愚痴りながらもエリカは、言霊を矢のように撃ち込んだ。

並の人間なら即死、かなり上位の魔術師でも衰弱は免れない。

しかしカンピオーネなら？そしてまつろわぬ神ならば如何に？

まあ、効く訳が無いのである。こんな攻撃で何とかなるようなら世にはカンピオーネが溢れている。

やはり危険であつても白兵戦しかない。

エリカはクオレ・ディ・レオーネを剣から長槍に変え、

「鋼の獅子よ、汝に嘆きと怒りの言霊を託す。神の子と聖霊の慟哭を宿し、聖なる末期の血を浴びて、ロンギヌスの聖槍を顕しめよ——」

絶望の言霊を籠めた。

ロンギヌス——直訳すると兵士の槍……という意味らしい。人名

という説もある。カエサル暗殺の首謀者に、ガイウス・カッシウス・ロンギヌスという人もいたので、そういう家名の人もいるだろう。どちらにせよこの槍自体は“ローマ帝国の支給品である”、という事だけは確かなはずだ。まあ、どっちでも良い。重要なのは神の子の血を受けているかどうかなのだから。

当然だが、エリカの愛剣クオレ・デイ・レオーネは神の子の血なと浴びていない。ならば、この言霊こそ神の子の血である。故に、この呪詛の槍は神に対しても効果がある！

まあ、どれだけ武器が優秀でも当たらなければ意味は無い。槍に對して剣で挑むのは不利、と槍に変えたところで技量が圧倒的に負けている。

両手で放った突きが片手の、それも軽く手首を捻っただけの槍に絡め取られ、空に放り上げられた。

「あの槍は我が身にとっても危険な物だ。或いは、妾を殺める事すら可能かもしれない。惜しいかな、その程度の技ではアテナたる 閼神に打ち込む事はできぬ。とはいえ、その覚悟、忠義は見事。ふふ、神殺しなどに忠義立てせねば、我が愛子として格別の加護を授けてやりたいところなのだ」

飼い猫が狩りの成果を見せに来たのを見るような——まあ、ネズミやゴキブリを見せに来られても困るだけだが——慈しむ庇護者のまなざし。

「人の子よ、ヘルメスの門徒よ。まもなくアポロンの時は終わり、アルテミスが母レトを伴いやって来る。太母ポイペも、恥らうアステリアも、女だけになれば出てこよう。アテナたる妾が《蛇》を取り戻し、女王として再臨するに当たっては、この上ない立会人であると言えよう」

邪魔をするな、邪魔立てするなら始末する。そんな意図がありありと窺える。

護堂は3時間ほどは目を覚ますまい。

「獅子よ、汝に使命を授ける。引き裂け、穿て、噛み砕け！打倒せよ、殲滅せよ、勝利せよ！我は汝にこの戦場を委ねる」

飛ばされ、転がっていた槍に偽りの息吹を吹き込み、命令を下す。鋼の獅子となったクオレ・デイ・レオーネは猛然と襲い掛かる。アテナも慌てず応戦する、が、次の瞬間には驚嘆の表情を浮かべた。

突いても意味無しと、払い、切り裂いた鋼の獅子がどんどん分裂していくのだ。

「クオレ・デイ・レオーネ！汝、聖霊と聖者の加護を賜りし者よ。不滅の身を以て、使命を果たせ！」

都合7体、その段階で仕上げを施した。

すると、その内の一体が護堂を搔つ攫い、エリ力を乗せると一目散に逃げ出した。

残り6体は捨て駒である。時間を稼いでいる間に逃げる、逃げる。時間稼ぎが効いたのか、興味がなくなったのか、アテナは結局追ってこなかった。

夜——アテナが言うところのレトの時間。まあ、他にも夜の神は（ギリシャ神話だけでも）数多くいるが、一家全員が天空神なので引用したのだろう。

立会人は別にヘカテやセレネでも構わない。太陽よりは、大いなる夜闇と大地の女神こそが相応しい。古の大地母神・アテナは冥府と、そして夜の女王でもあるのだから。

そんな愛する時間に、愛する闇に……包まれているわけではなかった。

ここはすでに東京——勿論アテナは地名など知る気もない——大体の場所が煌々とした人造の光で照らされている。

ポイペはまだしも、アステリアの光は儚く届かない。

アテナは夜の街を進む、すれ違う人々を呆けさせ、狂気に貶めながら。

彼女にとって、そんな人間たちのことなど瑣末事である。

思うのは先程の一戦、時間にすれば僅かに数秒。だが、久しぶりに自らの武勇を賜るに足る戦士との戦は、思いのほか気を昂ぶらせた。

本気は出さなかった、否、出せなかった。剛力の権能を揮えば敵をより強力に成さしめる——アテナの叡智はそんな警告を発していた。

加減をした方が有利に戦える、そんな相手と見えるとは、やはり神殺しとの戦は面白い。

心の臓を抉ったとて油断はできない。奴らは神をも殺める戦の申し子、エレボス、否、タルタロスに落としたとて這い上がってくるやもしれぬ。

ならば、再び戦うのだろうか？それもまた良し。今度こそ自分に対する軍備を整えてくるだろう。あの時感じた真の脅威を発揮してくるだろう。

ならば自分は《蛇》を取り戻し、女王として迎え撃とう……。

取り留めなく考えることで、鬱陶しい光を無視していたのだが、思考が途切れるとやはり我慢ならない。

人は神を讃える事を忘れてしまった。陽を讃えて生を謳歌し、夜に包まれて休む。それが正しいあり方だと言うのに！

やはり、傲慢な輩には神の掣肘が必要なのだろう。制裁が必要なのだろう。

「アテナの名において命ずる。闇よ、プロメテウスの火をかき消せ。今は女神たちの時間、汚らわしき男の残滓を追ひ散らせ。レトよ、強くあれ！アルテミスよ、母を助けよ！この大地より、ポイペとアステリアの恵み以外を一掃せよ！」

彼女は軍神——いまだ、『闇』や『夜』は取り戻していない。

しかし、今は夜。古の自分に近しい女神たちを助けることぐらい

はできるのだ。

アテナの放つ言霊は靦面に効果を顕し、電灯から、車などのエンジンに至るまで、ひとつ又ひとつと文明の火が消えていくのであった。

そんな無茶楽しいビックリをしながらの行軍も懐かしの《蛇》を間近にすれば、終わりを告げる。闇に浮き立つ心は《蛇》へと逸る気持ちに変わり、しかし、その心を抑えた。新たな戦に逸る軍神の心は、冥府と大地の女王に相応しくない。

《蛇》を取り戻す事と神殺しとの戦は、何故か彼女の中で同じ事となり、そして決定事項だった。

単に、より強壮となり戦いの野に赴く気概か、或いは迫り来る脅威を母の叡智が教えてくれたのか。

「——見知らぬ神に使える巫女よ。そなたの持つ蛇の印を渡してもらいたい。……妾はアテナ。ゼウスの娘にして、そこを超え行く者そなたの手より《蛇》を強奪する者でもある。異邦の神に属する者への非礼を、まずは詫びておこうか。」

と、言いながら、やっぱり人間を見ていないアテナは巫女——祐理の荷物であるゴルゴネイオンにその手を差し向ける。

「古の《蛇》——ようやく見つけた。これで妾は王位を取り戻す。巫女よ、後代まで語り継ぐといい。三位一体の女王が甦り、再臨した一幕を」

やはり、観客がひとりもないのは寂しいものらしい。女神たち？ 比喻ですよ、あれは。顕現していればともかく、姿が無いのはねえ……。

「これこそ古の《蛇》。ついに妾は過去を取り戻した」

暗闇の中で祐理は女神の愉悦をはっきり感じ取った。

そして、突然現れたもうひとつの気配も……

「おめでとつございます、麗しき女神よ。俺からもお祝い申し上げます」

「ほう……。この小さな島国に、まさか神殺しがふたりもいるとは……。ふふ、女王と再臨した妾と戦うは、草薙護堂の役目と思っていたが……。感じていた神殺しとの戦は、あなたとのことだったのかな？——まさか、本当に祝辞を述べに来たわけではなからう」

降って湧いた仇敵の気配に、しかしアテナは悠然と答えるのだった。

「もちろん、俺が来たのは『蛇退治』のためですよ。ええ、古の英雄たちに倣おうかと思ひまして……。なにより、この国は『鋼』の楽園^{パラダイス}でして、『龍蛇』の類がいると困った事になるんです」

笑顔で答える、『死ね』と。

慇懃無礼な態度ではあったものの、咎めるものは——当のアテナですら——いなかった。

「よかるう。魔王の挑戦を受けて応えぬは女王の流儀に非ず。しかし、まずは名乗りを交わそう。我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女。されど、かつては命育む地の太母なり！闇を束ねし冥府の主なり！天の叡智を知る女王なり！神殺しよ、あなたに古きアテナと戦う榮譽を授けよう！」

名乗りと共にアテナの姿が変わっていった。可憐な少女から端麗な乙女へと。

年のころは17、8歳、“母性”を取り戻してなおこの年齢と言う事は、昔はそのあたりで子供を産み育むのが一般だったのだろう。或いはこの年齢にして成熟しきっているのかも？

「西条祐一、トレジャーハンターです。主に幽世と電子世界を活動範囲としています。あと、ゴーストスイーパーみたいな事もやりますよ」

争いの火種が燦つているところにガソリンを撒きに行くのが趣味のナイスガイです。

まあ、別に描写されることはないが……。

そんな危険人物と自然災害の結晶が日本の首都で相見えたのであった。

三話 アテナ再臨（後書き）

たかまれ、俺の廚ニパワー！

変な言葉がポンポン出てくる。主にJPSに対して。

彼女の権能はどうやって決まったのだろうと考えていたら、非常に残念な答えが思い浮かんでしまったのでした。合掌

四話 アテナとの戦い、そして決着（祐一編）（前書き）

このSSはメタが多分に含まれております。

だって、書きやすいんだもん。

最初は普通に書きたかったのですが、一話の段階で夢と消えました。

四話 アテナとの戦い、そして決着（祐一編）

西条祐一は転生者である。転生前の名前は相沢輝彦である。当然ネタである。

西条祐一は神殺しである。転生をする時チート能力が欲しいと当然の要求をしたら、カンピオーネの世界に放り込まれた。能力は自分で獲ってこいということだった。

とは言え、全く何の力も無い一般人が神殺しなんてできるはずが無い。

なので、《まつろわぬ神に遭遇しやすい》《死にそうにはなっても死にはしない》《戦いがドラマチックになる》という三つの能力が与えられた……と思う。確証は無い。

また、スペックは高い。非常に高い。だが、教主には負ける。ガチで負ける。才能も功夫も足元にも及ばない。ただし、権能を使わなければ……である。

剣術においてはサルバトーレにも敵わない。というか、才能の段階でいうなら、恵那はおるかエリカにも勝てない気がする。しかし、崩す方法はあったりする。

魔術においてはヒロインズよりは上かな？ 師匠、神祖だし。呪力も普通のカンピオーネより高い。外付けバッテリーとそういう権能があるからだ。

そんな彼がアテナと対峙している。《戦いがドラマチックになる》という能力に引く張られたのか原作より強化されている。

純粋な『鋼』ではないだろうが、そこはかとなく『鋼』のアロマが漂っている。

勿論、大地母神の力も持っている。自らの過去を征服し、軍神は更なる高みに至ったのだ。
メドゥーサ

古きアテナと名乗ったが、実際にはアッパーヴァージョンである。温故知新である。

それでも祐一には余裕があった。むしろ、ただの軍神の時より有利だとすら思っている。

なぜなら、

「曇っているな、刃すら研がれていないように見える。しかし、見過ごせぬ。智慧の女神たる妾はその鋼を知っている。それは間違はなく救世の神刀！大地に連なる母たちの命を喰らい糧とする、魔王殲滅の刃！何故、魔王たるあなたがそれを携えているのだ！？」
と言っ事である。

漆黒に染まった騎士剣は、実のところアーサー王の魔剣だったりする。

神祖グイネヴィアが6年前にかの軍神を招来した際、その依り代に何本かあった『救世の神刀』の骸の一振りを使ったのだ。

神威招来——魔女術の奥義とも言える魔術である。

本来はかつての眷属と呼ぶ術らしいが、生と不死の境界、或いは不死の領域より神を呼び込むことすらできるらしい。

祐一も4年前に使った事があり、まつろわぬジークフリードを呼び出した。

話が逸れたが、元に戻そう。

アーサー王は最後の王では無い。それでも神刀の骸は聖杯の呪力と新たな主を得た事でEX-カリバーンと姿を変えたのだ。

あるいはそれもアーサーの権能かもしれない。奴にはぶっ壊れた剣を修復してもらう、という逸話もあるからだ。甦ったエクスカリバーはしっかり鞘まで付いていた。

結局、アーサーを幽世に連れ込む事で聖杯と分断して事なきを得たのだが……。

そして、彼の王を倒した際に残された“朽ちた剣”を回収し、自分の権能で研ぎなおしたのである。

鞘？一応有るけどFateみたいな能力は無いよ。ただ血が出なくなるだけで、斬られたら普通に痛い。真つ二つにされると死んじやうんじやないかな？

不老？もともと『中世の英雄は年を取らない』と言うお約束があるらしいよ。英雄は戦えなくなったら終わりなのだ。

不死？主人公が死んだら物語が終わっちゃうじゃない。最後まで死なない、死なない。まあ、話の都合で要らなくなったらポイ、だが……。

つまり、両方とも謂わば主人公特権であり、選定の剣を抜いたそのときから定められた権能なのだ！

以上が、祐一をして救世の神刀を携えている理由である。流石の智慧の女神様でもここまでは解かるめえ。

ちなみに、権能名《王威の魔剣》はこの神刀とは全く関係ない。誤解が誤解を産み、訂正もしないので、そのまま正史編纂委員会が決めてしまったのだ。グリニッジの《Knights of the Round》は議長さんのお茶目なのだが、実はこっちの方が近い、が、根本的に違う。輝かしい英雄の能力ではなく、暗く陰惨な魔性の権能である。

「アテナの機知はその刃が完全ではないことを告げている。しかし、同時に大地の女王たる妾にとっては致命的な力となることも……。さては妾がゴルゴネイオンを取り戻し、女王として再臨するのを待っておったな、神殺し。——西条祐一、魔王の忌み名にたがわぬ男よ！」

なじるような言葉とは裏腹に、女神の美貌には笑みがこぼれ、これから行つ闘争に期待を昂ぶらせているようだ。

そう、彼女は戦女神。敵の弱点を突く武器を用意するは卑怯にあらず、戦況が有利になるよう導くは戦の常道。それでこそ、勇士。それでこそ、神殺し！

しかし、そのような小細工など、踏み越えて行つてこそ、勝利を

従僕とする戦いの神なのだ。

アテナは虚空から槍を取り出し両手で構える。武装はそれだけである。護堂との戦いの際に見せた胸甲も盾も使わないようだ。

「されど、妾はアテナ！三位一体を取り戻せし闘神！よかるう、その小癩な鋼ごと、あなたを粉碎してくれよう！——土は崩れよ、地は割けよ、翼は天に満ち、闇は我が槍に集いて刃たれ！」

女神の祈りは、ただそれだけで強力な魔術となる。人間には、或いはカンピオーネにすら真似できない真の権能なのだ。

辺り一面のアスファルトが吹き飛び、穴と言う穴から大蛇が湧き出てきたり、雲が広がったかと思えば数百を超える馬鹿でかい梟の群れが襲ってきたりと、非常に気持ち悪い光景が目の前で展開されていた。

「気持ち悪い。俺、爬虫類とか嫌いなんだよな」

顔を顰めてはいるが結構余裕そうな祐一。

だが、祐理はいきなりの出来事に気絶もできずに喘いでいる。そろそろ限界っぽい。死の息吹も何だかんだでダダ漏れだし……。

「巫女さん、生きてる？死んだら多分、蛇かフクロウの餌だけど……」

ちなみにここは蛇たちのだ真ん中である。お空には鳥。人間を食べるかどうかは知らないが、想像だけでもしたくはない。

そういう今も、絶賛襲われ中！神刀の剣気が縦横無尽に大地の精気をかつ喰らっている。……蛇はわかるが、梟は何で喰われてるんだろ？やっぱり今のアテナの眷属だからか？

「なんとか……、生きて……います。……でも、はやく……草薙さんを……呼ばないと……」

朦朧とした意識の中で、自分の役割だけがぐるぐると巡っているのだろ。しかし、

「ん、それはちょっと待ってくれるかな。神様の中には、カンピオーネが複数いるといきなり強くなる奴もいるから。たぶんアテナはやらないと思うけど、ゼウス辺りから力を引っ張られるとヤバイ

から」
アイギス

破れざる神の護りなんてどう切り抜ければよいと言うのか。現物を見れば対処法も解かるかも知れないが、既に原作以上の力を有している女神に、これ以上力を与える口実を作る気はなかった。この世界は実に自分に厳しい、いきなり只の眷属がまつるわぬ神になるくらいには……。

『あなたの戦いつて、いつも何かが起こって楽しいわ！これからもその調子で、あたしを楽しませてね』

とはパンドラママンのありがた〜いお言葉。

そのお蔭で権能の数は順調に増えているが……、そろそろ頭打ちだろう、原作始まったし。

自分もそのハプニングを楽しんでいる節があるのを心の棚に上げ、愚痴る、愚痴る。やはり、カンピオーネはこうでなくっちゃ！

どうでもいいが、万里谷さん家の祐理さんが死にかけているぞ！

「キーパーソンだからな」。死なれても困るし、助けておくか……」
口訣を口の中で唱え、呪力を供給する。これでまた、暫くは持つはずだ。

対象の疲労や呪力を回復させる代わりに倍の呪力を消費する、なんと算術的で効率の悪い呪術であった。

正直なところ、彼女のことは幽世に放り込みたかったが、あそこは只の人には危険極まりない場所である。かと言って、アテナ 共々幽世に行つて蛇や梟を一匹でも見逃したらえらい事になる。

アテナが眷族を呼ぶ前に連れて行けばこうはならなかったものの、こういう抜けているところも転生時に与えられた運命^{呪い}である。……

たぶん、きつと、おそらく、そうであつて欲しい。

そんな事を考えている間に、大地と冥府の女王の眷属はあらかた始末がついたようだ。

「このような眷属どもでは、あなたの権能すら使わせる事ができぬのか……。善き哉！やはり、妾が手ずから死を授けよう、光栄に思うがよい！」

それとも、単にアテナが焦れただけか。

眷族は消え、アテナが夜闇を凝縮したような漆黒の鎌を携えてやってきた。

悠然と傲然と、女王の威厳をもって。

あと10m、5m、今！

スツと軽く振るわれた大鎌は、しかし、たおやかな織手に似合わない剛力の恩恵で、速さと威力を備えた素晴らしい一撃であった。

まともに喰らえば面白おかしく首が飛ぶ！掠っただけでも死の息吹に蹂躪される！

とはいえ、これもエネルギーの刃。ビームサイズと原理は違えど大差はない。

刃は《斬？》に、鎌の下の槍は見えざる護りに任せ、黒い剣気を纏わせた神刀でアテナの肢体を斬り払う。人型である以上、攻撃の時こそ、防御が疎かになるものだ。

槍の長さを持つ鎌と剣とではリーチが違うが、そもそも刃は入っていない。精気を奪う呪力の剣気こそが必殺の刃なのだ。そして、それは祐一の意味を反映し、伸びる、曲がる、飛んで行く！

斬った。手応えあり。だが同時にこちらも左肩を砕かれた。

高速移動をONにして、後方へ逃げる。……いや30m転進する。

祐理は置き去りだが、気にするまい。

ヒロイン特権で死にはしないだろう。そもそも、只の人間など神の眼中にはないのだ。

ぱたぱたと慌てて逃げているし、これで祐理は大丈夫だろう。…

…あ、こけた。

「あなたの権能は実に多彩だ。神刀は違うにしても、鎌の呪力を奪った権能に柄の殴打を弾いた権能。これは雷か？……まだ、腕が痺れておる。しかし、そのような事は瑣末事よな。——智慧の女神たる妾に、あなたの権能がいかなる神より篡奪せしものかも見抜けぬおかしな事だ……あなたを見透かそうと思うと思考に霧が現れる。これもあなたの権能か？」

当然そうである。

人間相手にならともかく、神様相手に通用するなんてのは権能く
らいなものだろう。

アヴァロンの霧——霊眼殺しである。ぶっちゃけ、万里谷祐理霊視術対策だ
！アーサーを言霊の剣で斬ろうとしても無駄だぞ、叢雲でコピーし
ようとしても無駄だ。霧は全てを閉ざすのだ！霧の向こうにいける
のは死者のみだ！生きてる内は通さんぞ！！

女神は神刀に精気を奪われ、電撃を浴びてなお、闘志を失わずそ
こにある。

手応えはあったが、この程度ではまだまだらしい。いかにも神様
らしい生命力だった。

神々の身体はデタラメだが、カンピオーネの身体も負けていない。
なんと、傷を癒す呪術で骨折が治るのだ！

HPを回復させると肉体的損傷もある程度（切断とかはさすがに
無理）治る、という非常にいい加減な造りをしているのである。

確かに、カンピオーネの呪力は他者の呪術を弾くが、自分の術ま
で弾くわけではない。外側から効きにくいなら、内側から通せばよ
いわけだ。傷を癒し、再び戦闘に備える。

アテナとの戦いは呪力を溜め込むチャンスではあったが、祐一は、
ここでハツと気が付いた。

戦いに気が昂ぶって忘れていたが、

『この女神様はここで殺してはいけない。後がややこしくなる』
という事を、である。

メタではあるが、アテナの秘術が最後の王に対する切り札になり
えるかもしれない以上、ここではまだ生かしておく必要がある。キ
ャッチ&リリースである。

正直な話、自分では最後の王に勝てそうにない。データの無い神

様は倒せない（by SW）のである。

ならばどうするか……原作同様フレアを落とし、お茶を濁すか？
そのための神器は存在する。アングルモア大王や偽ミノスを倒したルーの剣である。

——正史編纂委員会は伊都之尾羽張神を降ろし勝利したと思っ
ている。間違いではないが、あの神剣は防御よりの能力をしていた。
勝利の切り札になったのは、やはり闇を払い、鋼を溶かす天空の劫
火だったのだ——

よし、採用。

これで死んだら？仕方ない、忘れよう。大丈夫、何とかなるさ！
自身を強引に納得させた。

神刀を突き立て、口訣を唱え、剣と弓を召喚する。
呼び出した剣を佩き、弓を構え、矢を作り出して番えた。

剣に籠められた太陽の力を矢に纏わせる——力は魔弾にして3発
分——護堂の白馬より多少威力は落ちるだろうが、精気を吸収した
分でチャラ……そう信じたい。

「弓比べか？よいだろう、アテナの嚆矢は死への誘い。あなたの、
その忌々しい焰が闇を払うか、妾の死が霧を裂くか、勝負だ！」

「勝負する気は無いぞ！《追跡者》^{チェイサー}第一の刺客、その身に受ける！
言うが速いか、狙いも定めず撃ち放つ。

《追跡者》の一つ目の能力、触れた物、人に青銅聖闘士、白銀聖
闘士並みのスピードで動ける能力を与える力である。対象を設定す
れば、目標に向かって追尾するホーミング機能付き。さらに、相手
が高速移動の能力を持っていれば、たとえ僅かでも、その速度を上
回る速度で追跡するのだ。欠点は……秘密。

まあ、そんな能力なので敵対象をアテナと設定していれば、彼女
に向かってマッハで飛んで行く。弓自体の狙いをつける必要は無い。
同時に放ってきたアテナの矢を弓で弾く。

さすがは戦女神、武芸百般は伊達ではない。狙いもつけず、抜き
撃ちで祐一の眉間めがけて正確に飛んで来た。

しかし、接近戦と違い、妙な追撃は無いし、追尾機能があるわけでもない。ならば神速すら察知する聴勁とマッハ1〜3、或いは攻撃速度よりも速く動ける能力がある以上、当たるはずは無いのだ。

——剛力の権能は無いので手が痺れたが……。

見れば、アテナがいた辺りを闇の障壁と焰の矢が鬨ぎあっている。まあ、このままなら彼女は防ぎきるだろうし、そうでなくては困る。

無事な右手で神刀を引っこ抜き、振り上げて……

タイミングは？3、2、1、GO！

振り下ろした。

焰の矢に匹敵するスピードで黒き剣閃が突き抜け……アテナの闇を喰い散らかした。

祐一さんは『美人って言うのは、驚愕の顔も絵になるから得だな』なんて思いながら太陽の焰に包まれる女神様を眺めていましたとき。

それから、お湯を注いだカップラーメンが出来上がるころ、ようやくルーの焰が燃え尽きたので、力を消耗して省エネモードになったアテナ様が這い出てきた。

なお、ここは恩賜庭園ではなく浜松町辺りの一般道である。

勿論、十分回りには気を使った。

この辺一帯の建物もちょっとした輝や穴で済んでいる。倒壊するよりマシだろう。

そして最後の焰は、エネルギーなので手軽に扱える。範囲を狭め、車道から出さないようにもした……が、アスファルトが5〜600mにわたって捲れ上がり、20mくらいはドロドロに溶けている。自分のせいだけではないし、別に責任を取る気も無い。

神と神殺しが戦ってこの程度の被害なので「まあ、いいか。上出来、

上出来」と納得した。

別に直すのは祐一ではない。捲れあがったアスファルトは直せるが、溶けたやつまでは無理、材料が無ければ術は効果を顕さないのだ。

「で、どうするんだ？祐一さん」

護堂がたずねる。

アテナが燃えているころ、祐理が呼び出したらしい護堂とエリカ・ブランデッリらしきイタリア人女性が合流した。

矢を放つ直前に呼び出されたらしい。

とりあえず、「遅い！！38分の遅刻だ！」と言って、神刀で頭を殴っておいた。

『パコン』と良い音がしたので「護堂の頭は何も入ってないようだ」と頷いた。

本当に何も入っていないのは勿論、神刀エクスカリパーの方である。

この魔剣は何と！神様の不思議パワーでも砕けない硬度と靱性、そして、プラスチックバット並みの軽さと打撃力を誇るのだ！——でも間接攻撃は強いんだよ？ゴブリンパンチとか……

ついでに言うと、アテナと祐一が最初に言葉を交わして10分位しか経っていなかった……。

そりゃそうだ、刃を交えたのは一度だけ、弓もすぐ撃った。後は話していただけだ。

例外は最初の眷属を相手にしていた時だが、それも別に5分と経っていない。

神々と神殺しの耐久力がデタラメに高いとはいえ、攻撃力も比例して高いので、勝負は一瞬でつくことが多い。千日手の態になると耐久力に劣る自分が不利だと、祐一は理解している。

神速使いとはチャンチャンバラバラの鬨ぎ合いになるが、速度が速くなっているので時間自体はあまりかからない。

結局のところ、20分以内に勝敗は決まる、少なくとも自分はそ

うだった。

「西条さま、おそれながら速やかに止めを刺すべきかと思いますが……」

「……私も同感です。アテナを放置しては、いずれ禍根となるかもしれません。然るべき手を打つべきではないでしょうか」

『祐一が戦ったのだから、神殺しの栄誉は祐一のもの』と思っ
ているエリカと、『なんでもいいからはやく終わらせて欲しい』と思
っている祐理の言葉である。

「——そうするがいい。妾を屠れば、あなたは新たな権能を篡奪で
きる、より強い神殺しとなれるのだ」

二ケに見放されたのは辛いのか、敗北にふてくされたような態度
のアテナ様である。

もつとも、キャッチ&リリースと決めていた祐一は、

「最後の一矢、クライマックスシーンで倒しきれなかった以上は篡
奪できないだろう。パンドラが納得しないだろうからな。それに、
お前たちは俺に無抵抗な女を斬れ、と言うのか？」

と、もつとも聞こえるであろうセリフを痛ましげな、苦渋の決
断であるかのような顔で告げる。

大仰な、芝居がかった所作だった。

女の子ふたりは呆れている。こんな時にこんな事を言い出すのは
どのバカだ、と。魔王様相手だからいけないが……。

経験上、こういう事をやる人間だと知っている護堂は苦笑いだ。

彼は自分の父、草薙弦蔵の薫陶を受けたのだと思っている——半分
以上事実だ。

「とりあえず貸しーにしとく、そのうち返してくれ。あと、戦う前
にも言っただけどこの国は『鋼』のパラダイスだから、うちの師匠を
刺激しないうちに帰ってくれ」

刺激されるのはあの爺ではなく、日光の猿だが。

「……………よかるう。敗者は勝者の言い分に従うのみ。次
に見える時まで壮健であれ。我らの逆縁であれば、いずれ必ず再会

するであろっ」

長い沈黙の後の返事。そして立ち上がり、

「妾に土をつけた男の名、この胸に刻みつけておく。——いずれこの返礼はするぞ、西条祐一。あなたを冥府に送るのはこのアテナだ！」

と宣言した後、踵を返してゆっくりトコトコとあるいていった。

その割にはすごい勢いで遠ざかったが、神様なのでそんなものだろう。

以上がまつろわぬアテナとの戦いの一部始終——正史編纂委員会録・下っ端たちは見た——である。

あとのことはあまり変わらない、

良い所だけ持っていかれた護堂がエリカにからかわれていた。そして数日後、彼は地獄スープを鍋一杯食べさせられるのだ。

四話 アテナとの戦い、そして決着（祐一編）（後書き）

最後の王って都会の水道水よねー。^{超偏見}

という訳で、私の『救世の神剣』のイメージは彼の剣です。

間違っていたら恥ずかしいので研ぎなおした権能に制限をかけました。

エクスカリパーは単なる媒介です。

また、剣気は大地母神、悪とされている神、神殺しには特攻ですが、善とされている神は『鋼』や軍神などを含め、一切効きません。彼らは悪行を行いません。行ったとすればそれは神罰なのです。傍迷惑ではありませんが……。

因みにルーの剣は装弾数五発です。一発装填するのに通常、よく陽の当たる場所で三昼天日干ししなくてはなりません。

テンションが上がると三時間の睡眠で快適に起きれますが、変なテンションが落ち着くと、文章を書くのは難しいな〜って思います。

特に戦闘シーン、長く書けない。

っていうか説明臭い。

仕方が無いから、殆どすれ違いざまに斬りあい決着、みたいな形に。

とは言え、ようやく主人公さんが出せました。

最初は転生者にする気は全くありませんでしたが、だとするとアテナを見逃す理由が何一つ無いという事態に。

なので、彼は急遽転生者になりました。

名前は西条輝彦＋相沢ネ右一です。意味はありません。ネ右一から祐一にしようと思ったものの、名字を忘れていたので、名前を忘れていた西条さんの名字をちょっぴりました。

次はヴォバン編ですね。

転章 ヴォバンさん

サーシャ・デヤンスタール、通称ヴォバン侯爵。ヴォバンは犬の名前らしい。

欧州の魔術界で恐怖と共に語られる魔王である。こいつの名前を聞いてピンと来ないやつは長生きできまい。

別に高貴の生まれではない、むしろ孤児だ。侯爵はその昔、人様からぶん取った爵位だという。数年で飽きて放り出したらしいが、そもそも政治なんてできるような人間ではなさそうだ。領民と領主様はご愁傷様である。

彼がどのようにして神殺しなんていう偉業を成し遂げたのかは知られていない。300年も前だし、記録なんて残っていない。

そもそも、今でも神殺し誕生なんて察知できるものでもないしね。まうろわぬ神なんていう化物がいる場所で、偶然居合わせるしかないというのだから、相当胆力がないと無理だろう。遠隔視では肝心な所が見れないかもしれない。戦いの余波で術が破壊される可能性が高いからだ。

サーシャ・デヤンスタールは魔術を修めたことは無く、また武術を修めたわけでもない。つまり、権能が無ければただの爺である。どこかに呪力無効ポイントは無いものか。——よし、造ろう。

冗談はさておき、どっかの高層ホテルのスイートルームで、リリアナ・クラニチャールはそんな爺様と再開を果たしていた。できれば会いたくなかったに違いない。

「——君がクラニチャールの孫娘か。4年前にも会っていたはずだが、君の顔には見覚えがないな。……ああ、物覚えの悪い老いぼれだと思わないでくれ。君たちの年代は成長が早すぎるのだよ。私で

なくとも、似たようなものだろうさ」

この男は300年位生きている。脳みそはたして何%使われているのだろうか？

人間の脳は思い出せなくても、人生の全ての事柄を記憶していると聞く。忘れる……というのは、単に“思い出せない”という状態なのだろう。でないと、一回忘れた事を思い出す、ということが不可能になってしまう。実際に、忘れていた事を何かの拍子にふと思い出す、という事を経験した人も多いはずである。

そして、人間の脳の容量は、約140年分だそうさ。……倍……か、既にボケていても不思議では無いな、うん。

一体カンピオーネの寿命はどれ程なのだろうか？いつボケるのだろうか？

天寿全うする神殺しは珍しいらしいが、逆に言えば僅かながらも居る、という事である。これが人生50年、80年生きれば天寿全うだろうという意味なのか、文字通り老衰で死んだのか、わからない。

ヴォバンは魔術を使えない。武術も気功も使えない。

使えない以上、300年生きたのは純粋にカンピオーネの能力と言える。殺されなければどこまでも生きていそうさ。

はたしてカンピオーネというのはなんなのか？DNA自体が変わっていきそうである。

DNA鑑定で「貴様は誰だ！」と言われる護堂を幻視してしまった。

「無理もございません。あのとわたしはまだ小さく、侯とお会いした時間も10分とありませんでした。どうか、お気になさらぬよう――」

勝手に呼び出されて、命がけの儀式をやらされて、『覚えてない』と言われる。それでも『気にしないで下さい』と言わざるを得ない力関係、悲しいものである。なお、彼女に関して言えば悪いのは祖父である。

このSSでは儀式を行ったのはオリピオーネという事になっているので、彼女は別に参加していないが、生贄同然に差し出されたトラウマはきつと残っているだろう。

「それは結構。さて、知っているととは思いますが、私は気短な性分ですね。さつそく本題に入らせてもらおう。君をわざわざミラノから呼び寄せた理由についてだ。——4年前の儀式を忘れてはおるまい？『まつろわぬ神』を招来する大呪の議……あれだ。あれをもう一度試みてみようと思っているのだよ。——あのときは、サルバトーレともうひとり、西条祐一にしてやられた。まさか儀式そのものを横取りしてくるとは。ヴォバンの名も地に落ちたものだ、あんな若造どもにいいようにされたとは！」

儀式そのものに乗っ取られたため、30人の巫女のうち20人が発狂するということとはなくなったのだが、リリアナにはわからない。全滅の可能性もあった、いや、そもそも自分たちだけで『まつろわぬ神の招来』なんてことをできたかすら疑問に思っている。

「あと三月もすれば、『まつろわぬ神』を呼び出すに足る星の配列、地脈の流れが4年ぶりに整うらしい。私はその種の知識には疎いのだが、詳しいものに確かめさせた。——そうなのだろう、カスパール？」

カスパールさんがぎこちなく頷いている。

あと、この術に必要なのは、神祖、狂気に近い強さで神の降臨を願う祭司、物語の3つ。神祖は先祖返りと人数で何とかなるっぽい。祭司は洗脳だ！物語？ちよつと大きい本屋なら選り取りみどりだろう。無ければ図書館に行け！

地脈や星の配列は多分関係ない。4年周期だとすると、6年前のアーサー招来はなんなのかな？

場所に関係するなら、フットワーク軽いんだし、できそうなところに、いや、そもそも儀式なんてせずに神の現れそうなところに行けば良いのだ。——現地の皆さんが凄く迷惑を被るが、カンピオーネは気にしない、躊躇わない。

或いは、呪力を溜めだした神器を集めるとか……。

わざわざ難しい方にチャレンジする（のは魔女、巫女だが）事は無いと思う。失敗の可能性の方が高いのだから。

「しかしながら、侯爵。あの儀式は本来神祖の術と、西条さまは仰せでした。魔女、巫女を幾人集めても無駄だとも……」

そして、『だから自分に任せろ、自分は神祖の弟子だ』と言ってきた祐一に儀式を任せ、サルバトーレにまつろわぬジークフリードを掻っ攫われたのだ。

「なに、何事もチャレンジだ。やりもしないで諦めるのは、愚者のすることだと思わないかね、クラニチャール？」

『センサー、成功しても“甚大な被害を与える”という成果しかない上に、失敗したらどこかに旅立つちゃうんですが。そんな事をやるのは愚者じゃないんですか？』などとは言えないリリアナだった。

彼らカンピオーネは『自分以外は全て道具だ』という、どっかの魔族みたいな思考の持ち主だからだ。もし言ったら殺されてゾンビだ。

「それについては解決策を見つけてある。神祖には及ばずとも優秀な巫女はいるものだ。有象無象ではなく、それらを選びすぐって揃えれば、必ずや神祖の域に届くだろう。——クラニチャール、4年前の儀式で私が集めた巫女の中で最もすぐれた巫力を見せたのは誰か、覚えているかな？」

『あとは実験だ』みたいな事を言っているが、それならはじめから神祖を召し出した方が建設的ではなからうか？——不確定情報だが、ロスの邪術師集団《蠅の王》は神祖アーシエラをボスとしていると聞く。

「たしか東洋人だったか？あの娘の名と素性を、覚えていないかね？」

「名はマリヤ。日本人、それも東京の出身だと申しております。——僭越ながら、わたしにお命じいただければ、彼女を探し出し、

御前に連れ出して見せますが」

一瞬躊躇したが、隠しても仕方が無いので正直に答える。その上
でなるべく被害を抑えようと決意し、進言した。が、

「もつと良いアイデアがあるぞ。私がこの足で、日本に往こうと思
うのだよ。ふむ、考えてみれば久しぶりだな、海を越えるのは」

この魔人を国外に出さないようにする、という目論見は潰えたよ
うだ。

「カンピオーネたる侯が、御自ら？」

「私にも、異国の空気を吸いたくなるときぐらいある。よいではな
いか？ 古い先短い老人が、つかのまのバカンスを楽しみたいと言っ
ているだけだぞ」

食い下がっていても駄目だった。

日本の、東京都民の被害はこれで確定、である。

「だが、共の者はいた方が確かに便利だな。君にその役を命じよう。
異論は？」

異論はある。勿論ある。でも出せない。出したら以下略。

しかし、東京に行くならロスに行け。

確かにアーシエラが神祖だと言う事は知られていないが、《蠅の
王》はカンピオーネ、ジョン・ブルートー・スミスと長年にわたる
抗争を行っている。ある程度実力は証明されているのだ。

日本の巫女一人より、『蠅の王』を連行した方が儀式の成功度も
高いし、何より失敗してもロスを脅かす結社が崩壊するだけだ。リ
リアナの騎士道精神的にも、『罪の無い女の子を攫う』より『ロス
を脅かす妖人どもを排除する』方が満足できるだろう。

そして、ヴォバンにしてみたところで、大事なのは『神の招来』な
のだ。標的が万里谷祐理から『蠅の王』に変わったところで文句は
無いはずである。

『《蠅の王》』というカンピオーネと抗争できるだけの能力を持った
結社がロサンジェルスに存在します。日本の小娘一人より、この組
織を召しだされては？——不確定ではありますが、総帥は神祖との

情報もあります。正しければ、より確実にまつろわぬ神を招来できるかと……』

とでも進言すれば、

『なるほど、それは良いアイデアだ。そうしよう』

と、なった可能性は高い。

カンピオーネは自分の意見を曲げないが、『目的に、より確実に近づく』のならば、過程などどうでもいいことだろう。

しかし、リリアナはこのことに気付かなかったので、原作通りにヴォバンの東京行きが決まったのである。

転章 ヴォバンさん（後書き）

「まさか《蠅の王》の総帥アーシェラは正真正銘の神祖だったのか……？」

は六巻のセリフですが、信じられていたかはともかく、噂くらいは伝わっていたと予想。

また、一巻で既にジョン・ブルートー・スミスと《蠅の王》の抗争の話はできていたので、曲がりなりにもカンピオーネと渡り合える組織だと言うことはリリアナも知っていると思います。

五話 嵐の前の伝言（前書き）

常に、サブタイトルは適当！

かつこいいタイトルとか付けてみたいけど……ムリ！

五話 嵐の前の伝言

草薙護堂氏は、最近新しい日課ができたようです。

ええ、毎日（本当はウィークデイのみ）朝早くに恋人宅へ出向き、手と手を取り合って登校するのです。休みの時は、そのままそこでゆっくりするのかもしれませんが。

帰宅時も大抵一緒に、ともすれば朝帰り、何てこともあるかもしれませんが。

事実、この日課が始まる前から、彼女との交際は明らかで、恋人の住む外国へ半月に一回は行っていました。

ええ、証言は取れています。私たちの誘いを断っていたのはそのためだったでしょう。

とにかく、（親の）仕事の関係（という設定）ではあっても、この日本に來た以上は愛を阻むものは何もない、と言う風情でした。妹さまにお話を伺っても、

「最近、朝帰りとかするようになったんです。前まではそんな事なかったのに……。それに、その人だけじゃなくて、今まで接点もなかったはずの万里谷先輩まで……。——やっぱり、野球止めてからやらしい事で欲求を解消するようになったんだ……」

と、沈痛な表情で証言して下さいました。

（この証言から『万里谷さんは草薙護堂の幼馴染説』は消えた）

彼女もお兄様に『いかがわしい恋人』ができた事を憂慮しているようです。

私も、二股はどうなんだろう、と思います。

『エリカ様』と『万里谷さん』の『金髪』と『黒髪』の美少女を同時にだなんて……。

美少女は分かち合い、愛でるものだと思います。

同士諸君！

このような暴虐を許してもいいのか！？

（否！否！！否！！！！）

可愛く、ツンデレな妹までいるのに！！

（殺せ！殺せ！！殺せ！！）

万里谷さんは巫女さんなのにッ！！！！！！

（断罪を！断罪を！！断罪を！！）

「なあ、名波。言いたいことはなんなんだ？あと、俺とエリカは恋人でもなんでもないぞ。もちろん万里谷も……」

「黙れッ、草薙イ！貴様の言う事など何一つ信用できんわッ！！毎日、イチヤイチャ、イチヤイチャと。——それに静花ちゃんにも証言してもらったんだ。おまえは、毎日エリカさんのマンション行っている、間違いない。くッ、家族も公認だなんて……」

「ちよっ、おま、静花になに吹き込んだんだ！？なんか変なこと言ってくるから、おかしいとは思ったんだ！！」

「吹き込んだとは失礼な！オレは本当の事しか言っていない。『転校生のエリカ・ブランデッリさんが、いきなりお兄さんの婚約者宣言したんだけど、間違いないの？なんか最近変わったこととか、ない？』と聞いたただけだ。それに、おまえ、やってる事はどう見ても恋人なのに『恋人じゃない』だと？……じゃあ、アレか、遊びか？セフレか？——しかも、聞くところによれば、今までも言い寄る女子を喰っては捨て、喰っては捨てたらしいな。言い訳は無駄だぞ！お兄さんが証言してくれた、20人以上に及ぶ名前とともになッ！！！！」

「っていうことがあったんだけど、言い訳とかあるか？」

時は夕食、メニューは手巻き寿司。

一家団欒のときだが、全員揃っているわけではない。

まず、祖父・自分・妹の三人。父は離婚していない。母はあまり帰ってこない。

今はそれに加えて、従兄。彼は6年前に進学のために上京してから祖父宅に居候している。仕事も東京（ただし出張多し、殆ど日本には居なかった）なので自分の実家にはあまり帰らない。

そして、二人の客人。

エリカ・ブランデッリと万里谷祐理だ。

エリカが（強引に）家に行きたいと言うので、静花の誤解を解くため、万里谷に応援を頼んだのだが、なにかより深みに嵌った気がするので、話（標的）を変えるために切り出したのだ。

「無いな。俺は本当の事しか言っていない。その上で、彼がそう判断したのなら、それは仕方が無いことだと思っよう？」

「っっていうか、なに言っただよ！どう説明すれば、俺がそんな女の敵みたいになるんだ！？」

しれっ、と言い放った従兄に護堂は詰め寄るのだが、

「いいのか？本当にいいのか？そんなに聞きたいなら教えてやるぞ。おまえも知らない、おまえ自身の真実を！」

と、非常に真剣な顔で言われて、のけぞった。

しかし、自分も知らない真実——夢遊病や精神分裂症でもない限り、それは捏造と呼ばれる——ということに気付いたので、

「捏造じゃないか！」

と叫ばずにはいらなかった。

因みに、彼が言っただのは

『あゝ、あいつはギャルゲの主人公みたいなやつだからね。ほら、クラスで目立たない割にはスペック高いし、いつの間にか女の子と仲良くなってるんだよね、しかも複数。そういえば、中学の時もフラグ建てまくってたね、うん。たとえば（以下複数の人名の為略）とか。今時の中学生って進んでるらしいし？俺の時でも（そういうやつに）心当たりあるから、そうやってってもおかしくはないんじゃない？』

である。

最後について、祐一は実際には何もなかったと知ってはいたが、断定はしていないから嘘ではない。

その後、

「ふふ、護堂の武勇伝を聞いてみたくはあるけれど……。でも、浮気はダメよ？過去のことはいいけど、今はわたしがいるのだから。

……どうしても言うなら、ひとりくらいなら許してあげるわ。エリカ・ブランデッリは寛容の美德にも恵まれているのだから。でも、ちゃんとわたしに言ってね？思いつきり拗ねてあげるから」

と、助けているのか、貶めているのか。寛容なのか、違うのか。いろいろとわからない、しかし確実に惚気っぽいセリフをエリカが吐いたため、標的は決して変わることはなかったのだった。

万里谷さん家の祐理さんはあまり喋らなかったが、静花ちゃんとエリカさんに、なじられ、詰め寄られ、という、とてもアットホーム（昼ドラ風）な夕食は、和やかに過ぎていくのだった。

その数日後の22時頃、一本の電話があった。サルバトーレ・ドニである。

「なあ、サルバトーレ・ドニ、俺とあんたは友達でも何でもなし。おまけに俺は、あんたに電話番号を教えた覚えはないぞ」

はじめは草薙家の電話にかかってきたのだが、今は携帯である。護堂がモジュラージャックを引き抜いてまで着信拒否したのにかかってきたので、諦めたのだ。

『うん、君は電話番号もメールアドレスも交換してくれない水くさいヤツだ。でも、祐一に言ったら快く教えてくれたよ。あと、僕との関係を『何でもなし』なんて表現しちゃいけないな。……前にも

言っただけ、僕たち親友じゃないか？」

「本気でそう思っているなら、友達の意味を辞書で100回調べてから電話してこい」

後で、そう決意しながら返事する護堂だった。

『おいおい、友の意味を知らないのは君の方だ。日本人のくせに恥ずかしいヤツだな』

「……そこでどうして国籍が問題になる？」

『なるとも。僕の記憶がたしかなら『強敵と書いて友と訓む』——これは日本の格言だったはずだ！昔読んだ日本の文献に、しっかりと書いてあった！』

「え、いや……そうだった、かな？」

どこで聞いたかは忘れたが、この言葉は護堂も聞いたことがあった。

『祐一も認めたからね。間違いないよ。……『友情、努力、勝利。』

——アホか！』って言うてた』

その一言で思い出した。その文献はきつと漫画だ。

「それは漫画の話だ！普通は一方的に喧嘩を売られて友情を感じる事は無い！」

当然の返しにもサルバトーレは気にしない。

『ははは、いいじゃないか、護堂。あのときの君は、本当にすばらかった。僕の挑戦に、燃え上がるような闘志と共に全力を振り絞って答えてくれた——そして、僕も全力で返した』

「……格下の俺を相手に全力でケンカするあんたは、本当に大人気なかったよ」

その後運命だなんだと言い募るバカに、もう切るぞと告げた時、ようやくサルバトーレは本題を切り出した。

——デヤンスタール・ヴォバンの名前を知っているかい？——
最古参の魔王が東京に来ている、ケンカを吹っかけてこい。
纏めるところである。

「そつえば、万里谷に聞いたんだけど、祐一さんと一緒に、その

爺さんとケンカしたんだって？」

『万里谷？——ああ、今狙われてる子だね。うん、そうだよ。正確にはケンカしたのは祐一の方で、僕はジークフリードと戦ってたんだけど。……いやあ、あのときも楽しかった。伝説に名を背負う英雄！僕もアーサー王や円卓の騎士たちとかには憧れたものだからね。それが高じて、今こうなっているんだけど……』

「あんたに英雄伝説を語った人にいろいろ言いたいけど……万里谷が狙われてるってどういうことだ？」

『生贄にするらしいよ。詳しくは知らないけど、神様を呼び出す儀式があつて、そのために必要なんだって——ユリ・マリヤ、日本人うん、今手元に資料があるから間違いない』

「なんで神様なんか呼ぶんだよ！あんな傍迷惑な存在を生贄まで使つて呼ぶなんて馬鹿げてる！」

『なんでって、戦うために決まってるじゃないか！4年前にも同じことをしようとしてたんだから、今更だろう？』

バカだなあ、そんな事をのたまう。

たしかにその通りだ。

しかし、万里谷をそんなことのために、そんなヤツに、引き渡す事はできない。

護堂はそう決意し、

「なあ、4年前はどうやったんだ。何か他に方法があるんだろう？」

『もちろん、教えてもあげてもいい。ほら、僕にさっきのおねだりをしてごらん？』

「祐一さんに聞く。じゃあな！」

頼る相手がこいつでなくとも良いことに気付いて、電話を切った。

五話 嵐の前の伝言（後書き）

ヴォバン編の導入部。

このあと、八巻のエピソードを経て、4年前のジークフリード招聘の舞台裏をでっち上げてみたいと思います。

上手くいくかはわかりませんが、オリ話も入れてみたいです。

上の演説と会話は電波です。

もともと名波のセリフではなかったなので、おかしくなっていると思いますが、変えるとよりおかしくなりそうなのでそのままです。

六話 過去話（サルバトーレ編）

「ここは神の威光を以て知ろしめす、救いの館ですか？」

修道院に入るなり、男はそんな事を言った。

黒髪の東洋人っぽい顔の少年だった。

いや、東洋人は年齢よりも幼く見える場合があるから、青年かもしれない。

ともあれ、国外の人物ならそんな風に言うのも仕方がないのかもしれない。

ネイティブにとっては変な言い方でも、外では大真面目に教えられている事もあるからだ。その割には流暢な発音だったが。

「ここは教会ではありませんが、神の教えを実践する場ではありません。異国の方、どうか耐えましたか？」

壮年の修道士はゆっくり、にこやかに応対した。言葉に不慣れかもしれないと思ったのだろう。いきなりの闖入者にも気を悪くした様子はない。顔に出していないだけかもしれないが……。

「ですが、しばらくお待ちいただきたい。今は来客中なのです。でも、もうすぐ終わりますよ」

「残念ながら、こちらの用件は火急なのです。そう、この生ゴミを引き取って頂きたい。神の愛が限りの無いものなのであれば、行き倒れの面倒も見てくれるはず」

修道士の言葉を気にした様子もなく、男は言った。

よく見れば、彼は金髪の青年を引きずっている。

年の頃は20前後、なかなかハンサムだ。

しかし、着ている物はあちこちほつれ、彼自身もおそろしく憔悴している。なるほど、行き倒れていても不思議ではない。

「あの男は……なんて偶然だ」

修道士も『人の命が関わるならば、たしかに一大事』と思ったのか、単に知り合いだったのか、ぼそっとつぶやいて、彼らに近づい

ていった。

「彼、金髪の青年のほうですが、こちらの関係者なのですか？修道士の方には見えませんが」

「いいえ。ですが、今の話と関係のある者です。例のともない阿呆ですよ。何しろヤツは近隣の人里を次々と歩きまわって、見かけた女性全て――少女から老婆まで見境なく木の枝で斬りかかったのです。170人目でとうとう剣を避けられ、それが聖ラファエロだった……という見つけ方をした、ど阿呆ですから！……まあ、打ち込みは全部寸止めで、怪我人を出さなかったことだけは賞賛に値しますが……」

リリアナの問いに答えた修道士の言葉は、たしかに直前の話題――聖ラファエロの居場所を探り当てた人物についての事だった。なるほど、本当にアホである。

「そう言えば……如何でもいいんだが、おまえ、記憶はしっかりしているか？」

修道士の用意してくれたワインと硬いパンをがつつと飲み食いする金髪の青年に、連れの男は本当にどうでも良さ気に告げた。

彼もテーブルに着きワインを飲んでいる。

パンは手に取ったものの、硬さを確かめて戻した。彼にはパンをワインにつけて食べるという選択肢は無いのだろう。

「ん？……記憶ねえ。有るような、無いような……」

「試しに自分の名前と素性を言ってみろ」

とぼけた返答に、やはりやる気なさげに返す。

「えーっと……うん、覚えてないね！でも、大丈夫。今やるべきことは、しっかりとわかるから。僕は……」

言葉の続きは聞こえなかった。

ただ、『ガタツ』という音と『ガーン』という音がほぼ同時に

聞こえ、すこし遅れて、『バタツ』という音と『ドスン』という音が聞こえたのみだった。

ほんの一瞬、瞬きほどの間に行われた惨劇だったのだ。

正面に座っていたはずの加害者は、今は被害者の居た真後ろ辺りに立っている。その手には金属バットが握られていた。

「いきなりなにするんだ、痛いじゃないか……！」

「安心しろ。おまえの頭はこれ以上悪くはならないし、頭が割れたくらいで死にはしない。……で、どうだ。何か思い出したか？」

頭をフルスイングされてなお『痛い』で済ませる被害者に、曲がった金属バットでトントンと肩を叩きながら加害者は言った。その目は明らかに『思い出せないならもう一発』と告げていた。

「え？あゝ、うん。思い出した。僕はサルバトーレ・ドニ、シエナの騎士だ」

「よし、それで？——俺に拾われる前のことは覚えているか？」

「そうだね。変な場所で、すばらしい剣士と戦ってたね。いやあ、楽しかった。あれほど心踊る戦いは生まれて初めてだったよ！あれっ、でもその前はトルコにいたような……？」

ドニ青年の答えを聞いた連れの青年は「うん」とひとつ頷いて、続けた。

「まあ、操られていた時の事を思い出せ、というのも酷だから、その辺は俺が説明しよう。ただし、推測だからな。間違っても知らん。——おまえはそのトルコで聖ゲオルギウスの槍を発見し、操られてアストラル界へ行き、そこで銀腕王又アザと戦った。で、ゲオルギウスの魂だけやられて、後はおまえの記憶の通りだろう。……又アザの剣を奪ったとはいえ、剣技だけで神殺しを成し遂げるとはな、ほんとビックリだったよ」

あはははは、と笑うふたりの言葉に、本当に吃驚したのは周りの人間である。

「なっ、神殺し——カンピオーネになられたのですか!？」

リリアナが代表したかのように問いかけるが、先程の会話が真実

なら答えは出ている。それでも聞いてしまつのが人情と言うものである。

「ん？——ああ、そうだよ。で、俺は偶然その場に居合わせて、アストラル界から連れて帰つたのさ」

青年は何でもないかのように答えるが、さりとした人間のアストラル界に偶然居合わせるはずも無い。そして、あのスピード。おそらくは、この男も……

「そういえば、あのときそこにいた女性に、すごく軽いノリで忠告されたね。記憶に混乱があるかもしれない、そうになったら頭を叩いて貰えつて。……でも、あなたが僕の兄弟つてというのはどういうことなんだろう？」

「カンピオーネというのはな、パンドラという女に権能を与えられるんだ。で、養子に迎え入れられる。エビメテウス愚者の落とし子とはよく言つたものだ。たしかに愚者とパンドラ夫妻の養子になるわけだからな——そういう訳で、おまえは俺の義弟おじつとという事になる」

やはり……神殺しの魔王・カンピオーネ！

しかし、カンピオーネが、本当にエビメテウスに関係しているとも思わなかった。あれは単に『神すら殺める、理屈の通じない愚か者』という意味でしかなかったのだから——或いは知っていた人間が広めたのか……。

どちらにせよ、こうして（リリアナが、だが）質問をして、認識された以上は名乗らなければなるまい。

「カンピオーネたる御身らにご挨拶が遅れましたこと、深くお詫びいたします、サルバトーレ卿、そして異国の魔王さま。わたしはエリカ・ブランデッリと申します。宜しければ御身のお名前を頂戴したく存じます」

「わ、わたしはリリアナ・クラニチャールと申します。イタリアより神殺しが誕生したことよろこばしく思います。——おふたりとも、いずれ我が《青銅黒十字》の総帥よりご挨拶もあるでしょうが、今は私よりの礼をお受けください」

溢れる動揺を押さえ込み、貴婦人としての矜持を籠めてエリカが一礼し、リリアナは一泊遅れて騎士の礼を行った。彼女は、突発的な事柄にすこし弱いのだ。戦いに関してはそうでもないのだが……。

そんなエリカたちの挨拶に対し、

「ユーイチ・サイジョー、ジャパン」

と、さっきまでの流暢なイタリア語は何だったのか、ものすごく平坦な、片言の英語で異国の魔王・西条祐一は返事をしたのだった。さて、一方修道士はというと……魔王カンピオーネの昼餐に、パンとワインしか出していない事に気付いて泡を喰っていた。

その後出て来た料理を、今度は祐一も食べながら、魔王たちの会話は続く。

下手に口を挟んで機嫌を損ねるわけにもいかない。まだまだ頼みごとをするには時間がかかりそうだった。

「——で、だねえ、僕はふたつやらなければならぬ事があるんだ。兄というなら手伝ってくれないか？ユーイチ」

「言ってみる。聞くだけ聞いてやる」

「うん、まずは剣を手に入れることだ。僕は剣士なのに今は剣がない。これは由々しき事態だと思わないかい？」

「ああ、まったく思わない」

言葉通り、聞く気はあったようだが、叶えてやる気はなかったようだ。祐一はにべもなく切って捨てた。が、サルバトーレは気にしなかった。

「だから、剣が必要なんだ。このままじゃあ、僕は船も釣竿もない漁師と一緒にじゃないか！」

「漁師さんに謝るといいよ」

「それにユーイチ、君は僕と僕が倒した神様から剣をパクっていた！ふふふ、僕の目は節穴じゃあないよ。ボロボロになってたし、返せとは言わないが、代わりの物を提供してくれたっていいじゃない

か！」

何を言ってもガン無視である。サルバトーレは、自分の意見が通るまで押すつもりだろう。まるでおもちゃを欲しがる子供のようだった。それにしても、ヌアザの魔剣を回収していたとは、祐一のほうも抜け目がない。

「チツ、しょうがねーな。……で、どんなのが欲しいんだ？」

「別に贅沢を言うつもりはないよ。剣士の究極は、どんな剣だって天下無双の宝剣のように扱う事、だからね。極端なことを言うならこのナイフをアーサー王のエクスカリバー並みに使いこなさないといけない。——でも、僕はまだそこまでの剣士じゃあない。だからこそ、ちゃんとした剣が欲しいのさ！」

魔法の剣じゃなくてもね、そう付け加えられた言葉がまるで、聖ラファエロの双剣を狙う自分を責めているかのように聞こえた。

が、剣に命を預ける以上、より良いものを選びたいのが人間というもの。技術の研磨も勿論重要だが、武器の目利きも重要だと自分を納得させる。

いや、そもそもアーサーだって、エクスカリバーという魔法の剣を持っているではないか。最高の技量と最高の武器が合わさってこそ、真なる剣の境地に辿り着けるのではないか？

なお、ちゃんとした剣が欲しいと付け加えたのは祐一が金属バットを差し出そうとしたからである。

と、そこで修道士が

「それでしたら、我が修道院の剣を一振り、差し上げましょう」

と申し出たので、サルバトーレはありがたく頂戴していた。おそらく、エリカカリリアナに与えられる予定だった剣だろう。

続けられた会話の次の話題こそ、エリカたちが今まで我慢して待っていた話題だった。

「もうひとつは師匠のところへ行く事だ。僕は神様との戦いで、あの感覚を感じた。言葉にするのは難しいけど、この感覚をモノにできれば、僕は剣士としてもっと高みに昇れる、そんな気がするんだ。」

そのためには僕が知る最高の剣士と立ち会う必要がある。でも、僕は今お金を持っていないんだ。……まあ、君でもいいと、僕の感は告げているんだけど。どうだい、ひとつやってみないか？」

「やつても構わないが、ここでは遠慮する。さすがに食事を奢ってもらったところを廃墟にしたいくないからな」

「ははは、どこか外でやればいいじゃないか」

常識的とするか、実のところ食事が出されてなければ廃墟にしても構わなかったとるか、微妙な発言だったが、サルバトーレに至ってはそんな配慮などもなく、どこ吹く風であった。

「他にも理由はあつてね。それにおまえの師匠にも会ってみたい気はするんだ。——しかしな、兄弟。ひとつ、大きな問題がある。……俺は無一文だ。別にイタリアに来る気はなかったんだよ。しかもアストラル界を通ってきたから、密入国、不法滞在者だ。当然、リラもユーロも持っていない」

しかし、それでも彼は泰然としている。『カンピオーネたる自分を罰する事ができるなら、やってみろ』そんな風情であった。

しかし、ここだ。

先程は逃したが、このタイミングこそエリカが求めていた瞬間！
「ならば、是非わたしたちにお命じください。聖ラファエロの下まで共をせよ、と。すぐに車を手配させていただきます」

今度こそ、間髪入れずに提案を出す。聖ラファエロのところへ行くことができるなら、車代など安いものだ。

「え、そう？じゃあ、お願いするでしょうか」

サルバトーレの答えにエリカは淑やかに頷き、会心の笑みを浮かべたのだった。

その後、サルバトーレは剣を受け取り、4人でエリカたちが呼ん

だハイヤーに乗り込んで、聖ラファエロの下へと向かった。

まあ、移動シーンなんていうのは語るべきこともないのでざっくり飛ばすことにして、

そんな訳で今は中世の砦と城砦跡地に来ているのだった。

いや、エリカとリリアナのふたりは『その辺りの地下』に、である。

サルバトーレが、彼女たちを落つことしたのだ。

如何に邪魔だったとはいえ、もう少し穏便な方法はなかったのだろうか？

もつとも、これが剣の儀式と『ダヴィデの言霊』を得る切欠となつたのだから、彼女達も幸運である。

ヒロインは都合により殺されもするが、基本的に運が良いのである。

「ひどいな、ここまで連れて来てくれた、しかも、あんな子供相手にここまでするか」

祐一は、そんな事を頭でリフレインさせながらも、一応、ツッコんでおいた。誰も聞いていないが……。

視線の先では聖ラファエロとサルバトーレが切り結んでいる。

ともあれ、しばらくすれば決着はつくだろう。

サルバトーレは記憶を取り戻していても、いや、だからこそ権能を使わない。

ならば、勝者は聖ラファエロに決まっている。

とはいえ、せつかく生で見れるのだから楽しんでおこつ。

「決まってる。神様が、同じカンピオーネだよ」

「なるほど。じゃあやっぱり、ユーイチと戦えばいいと思ったのは間違いじゃなかったってことか！——さあ、ユーイチ、戦おう！ここのなら、遠慮はいらないだろう？」

師弟の試合と会話が終わればどうせ戦わなくてはならない、と思っていた祐一は既に臨戦態勢だった。実のところ、確認しておきたいこともあったのだ。

ひとつ、《切り裂く銀の腕》を《斬？》で斬れるのか？

あのエネルギーを《神気発衝》で操ることはできなさそうだが、吸収は可能なのだろうか？それとも無視されて斬り飛ばされるのか？そしてもうひとつ、先日奪った6個目の権能はどういうものなのか？である。こっちは発現する可能性は低そうだが……。

「武器は真剣。魔術、権能ありの何でもあり……でいいか？」

「もちろん！そうでなくっちゃあ、意味がない」

「相手が死んだら当然終わっちゃうけど、俺は実のところそこまでしようとは思ってない。だから、死亡や降参以外にも終わらせるルールが欲しいね。ファーストブラッドとまでは言わないが、せつかく達人の中の達人がいらっしやるのだから、審判をお願いしよう。

代わりに、俺は一部の権能、召喚系の力を封印する。ってところかな？魔術や権能はありだけど、純粹に個人技の勝負って感じで。おまえはまだ権能がひとつしかないんだから、受けておいた方がお得だぞ？」

ルールを決めておく、ここでどちらかが死ぬまでやっても意味はない。

また、自分の力を制限もする。ルールを破れば反則負け、という事にしておけばやらないだろうと思う。カンピオーネは勝ちに執着するものだから……死にかけたら知らないが。

「わかった。ちょっとつまらない気もするけど、変な邪魔が入るよりはマシかな？——師匠もいいかな？」

「答えは聞いちゃいないんだろう？……ああ、わかったよ。せつかくのカンピオーネ同士の試合だ、あたしも楽しませてもらうよ！」

ラファエロさんが——ヤケクソ気味ではあるものの、やっぱり戦士の性かちよつと浮かれているようにも見える——請け負ってくれたので、呼び出した刀を肩に担いで合図を待つ。

「始め！」

合図とともに“神速”を使う。

これはある権能と、韋駄天の術 と呼ばれる操体法の極意の組み合わせだ。

奥義は、端的言うところ『意識の加速』である。『一流の野球選手が極限まで集中すると、160km/hのボールの縫い目まで数えられる』という、あれだ。この状態になると景色から色が抜け落ち、回りの動きが非常にゆっくりしたものになる。さらに身体リミッターの精神的限界を解除するため、通常よりも早く動く事もできる。

猿飛びの術 などを併用すれば、かなりの高速戦闘が可能になる。まして、マッハを超える移動術があれば、主人公格ではない青銅聖闘士以上の活躍ができるだろう。そして、これを祐一は『自分の“神速”』と呼んでいるのだ。だが、アレクの《神速》ほど便利なものでは決していない。

なお、この技法は 縮地 と呼ばれるが、それはそれで別の技能にある。そちらは速く動いているように見せかける技術である。限界まで無駄を省き、敵の意識の死角を突くという感じで使用する。とにかく、祐一はサルバトーレがどういう事をしたかわかっていたので、超スピードでの決戦を挑んだのである。

正直、技量では聖ラファエロはおろか、現在のサルバトーレほどの剣腕もないのだから、無想剣 まで導いてやろうとするとこれしかないのだ。いや、別に導く必要はないけれど……。

キーンと金属音がする。サルバトーレが何とか防いだようだ。追撃が来る前に離脱する。開始時と同じように10mほどの感覚を空ける。

2〜3mならともかく、この距離を一瞬で0にする能力は、少なくとも今のサルバトーレには無いはずだ。

「見えたか？……多分だけど、これが今のおまえに一番必要なもの

「じゃあないか？」

「あー、たしかに。一瞬だったけど、こうビビッと来たよ！あれがいつでもできるようになればいいんだけどなあ……」

「まあ、できるんじゃないか？少なくとも、命がかかっていれば、な！」

もう一度同じようにして攻撃、もちろん殺す気満々である。死ぬとは思っていないくても、心構えは一撃必殺である。というかカンピオーネはそういう状況でないとあまり成長しない。

先程は袈裟懸けに仕掛けたので、今度は胴払い。

当然防がれる。今度はそのまま咽喉をめがけて突きを入れる——避けた。もう一度踏み込んで唐竹割り。

「ぐつ。だけど、まだまだ！」

避けきれずに軽く胸を斬られたサルバトーレが、何とか反撃しようとして剣を動かす。

が、当然喰らってやる義理はないのでまた間合いを空ける。

「うーん。どうも上手いかないな。……まだまだ道のりは遠そうだ。でも、やられっぱなしで終わるわけにはいかないな！」

右腕を銀色に輝かせての宣言。《切り裂く銀の腕》の斬撃が来る！しかし、目的のひとつ、万象切り裂くという“エネルギー”の刃を《斬？》が斬り抜けるかどうかを試すチャンスでもある。効果範囲は武器を含めた自分の周りだ。自分が斬られる必要は無い。斬り抜ければ刀は無傷、できなければ刀身はスッパリと切り裂かれるだろう。

三度“神速”を発動させ、今度は動かすタイミングを計る。

ゆっくりとサルバトーレの腕が振り下ろされる——その直前、身をそらして光の軌道から身体を逃し、しかし刀身は置いておく。

はたして、刀身は……無事だ。

権能対決は《斬？》が勝ったようだ。落ち着いてみれば、たしかに呪力を吸収した感もある。

「もうひとつ確認を入れておくか」

最後にもう一度打ち合う。

今度はサルバトーレの剣をかわし、左手でその輝く右手を掴んだ。別段、腕の輝きは衰えなかったが、剣に伝わる銀の光が消える。おそらく、刀身を呪力で包むタイプの付与魔術だ。エンチャント刀身自体はともかく、ビームサーベルな『切り裂く光』は無効化できるだろう。得られた答えに満足し、そのまま頸へ刀を滑り込ませて、

「勝負あり！」

終了の合図を聞いて手を離した。

「負けちゃったなア。一番悔しいのは殆ど何もできなかったことだけど」

「そりゃ、何かさせたらヤバイからだよ。っていうかおまえ、その無想剣　つてのが完成するとだな、今の動きを見切つて反撃までできるようになるらしいぞ。俺は『自分が斬られてまで誰かを強くする』なんて趣味はないから、取っ掛かりくらいまではともかく完成形までは導いてあげません、断じてなッ！」

こいつは別に祐一の弟子ではないのだ。いや、たとえ弟子であっても斬りたいなんて思うのはマゾじゃないだろうか？

「え。兄だと言うなら、そこまで導いてくれたつていいんじゃないかな？ということでもう一本！」

「却下。たしかにまだ余裕はあるけど、これ以上はなんかヤバイよ。うな気がする。その代わりと言つてはなんだが、ふたつばかり情報をやろう」

祐一は、ゴホンと咳払いをひとつしてから続ける。

「一つ目はおまえの権能についてだが、おまえは自分の権能がどうしてあんな感じになったか、心当たりはあるか？」

「うん？……まあ、僕は剣士だからね。たぶん、剣が欲しいと思つたからじゃないかな？」

「うん。それもあるんじゃないかなとは思つが……おまえ、修道院で話してた時に『どんな剣でもエクスカリバー並みに』って言つ

てたろう？——多分それだ。おまえが握った獲物は、それこそ金属バットでもその辺の木の枝でも『総てを切り裂く魔剣』に変わる、と思う。剣士としての技量ではないけど、たしかにどんな剣でもエクスカリバー並みの宝剣になるな。おめでとう、おまえの理想はある意味かなった」

祐一は、まず『どんな神様を倒したか』があり、『どんな願望があるか』と『どんな性格か』がきて、結果『どういう権能になるか』が決定されると思っている。

サンプルは少ないが、アレクは多分『冒険家』であり、世界各地を廻りたい“速く、もつと速く”からきて、それが叶えられると今度は設置型トラップみたいな権能になり、4年前には迷宮を作る『RPGの魔王』みたいな権能を手に入れた。冒険する方からさせる方になっている。

まあ、多分そうだろう。そういうことにしておこう。

原作知識では、この後、いや或いは既に手に入れているかもしれないが、ワンダリングモンスターと、やっぱり設置型トラップのよきな権能を手に入れるのだから。

こうしてエリカとリリアナが戻ってくるまで、複数人での会話はなんか書けねーな、と言う事で置き去りにされていた聖ラファエロと一緒に待っているのだった。

え？もうひとつの情報？

はっはっは、ヴォバンが神を招来するから、あの銀髪の子をつけるといいよって言ったのだ。因みに『そのときは連絡してくれ』と言っておいた。『その儀式は確実では無いから、自分がより確実に降臨させる儀式を行う』とも言ったので、多分連絡してくるだろう。そして、それは現実になる。

ノートウングを手に入れる事と、もうひとつの目的を果たすための布石だった。

「……というのが顛末よ」

護堂は祐一に『ヴォバンについて教えてくれ』と頼んだが、『自分で調べた方が力になるよ』と返されたため、事情通っぽいエリカに頼んでみたのだが、

「それはド二とのことで、ヴォバンとかいう爺さんは関係ないだろ！……しかも、自分の機転が功を奏したみたいになんか言っていない。おまけに肝心の戦いのところはおまえの想像だろうが！」

「仕方がないじゃない、魔女の目は音まで伝えてくれないのよ。でも、たぶん合っているわ。それにこれは侯爵への前哨戦よ。このあと、リリイが侯爵の儀式のために召しだされるのだけど……そのとき祐理も居たのよね？」

エリカが祐理に話を振る。事が彼女にも関わる事だったので、事情を説明してエリカのマンションまで来てもらい、相談に参加してもらっているのだった。

「はい。たしかに私はあの儀式のために連れて行かれました。……

侯爵と西条さまの戦いもすべてではありませんが、見ております」

「わたしもリリイから聞いた話になるから、つき合わせて考えましょう。祐理の霊視なら何かわかるかもしれないわよ？」

「じゃあ、はじめっからそうしていればよかったじゃないのか？」

話の都合である。過去話をここに入れたかっただけなのである。

という訳で、後半へ続く！

六話 過去話（サルバトーレ編）（後書き）

権能はどうやって設定されるのかを捏造。

アニーさんの権能は

《超変身》（Metamorphosis）

1、多分変身願望。別に文字通りの意味ではなく、今の自分を変えたいとかそんな感じ。少年、少女にありがちなやつ。

2、テスカトリポカを倒す。

3、文字通り変身する能力を得る。後に精神分裂症を患う。
で、

アルテミスの矢

1、2 X才のアニーさん、まともな恋をしていない（と28歳の時
激白）ので焦る。

2、あなたのハートを狙い撃ちよ」

3、アルテミス（突然死の神）を倒す。

4、一発必中の魔弾（普通の人は即死）を手に入れる。

きつと、キューピット辺りから篡奪していれば幸せになれたかもしや、あの人のことだから多分、思い人と他人をくっつけて終わるような権能になりそうだ。

他のキャラも思いついたのですが、また今度。

ニーベルンゲンの歌は作者不詳（剣の名前はバルムンク）

ニーベルンゲンの指輪はワグナー（剣の名前はノートウング）

原作はワグナーと言っていたのでノートウングで……

グラム＝バルムンク＝ノートウングなのですが、ハイスクールD

×Dのジークフリードさんは全部持っています。

カリバーンとエクスカリバーが同時に存在する世界なのであってもおかしくないのですが……

カレドブルツフも別口でありそうだと。

残りのティルヴィングとダインスレイフは両方とも“持ち主を破滅させる”魔剣。

方や三回抜くと破滅し、方や一度抜くと永遠に戦い続けるハメになる……

ダインスレイフは『傷を決して癒さぬ』と言う能力があったと思っただのですが、10巻では木場君、ゼノヴィアさん共に完全回復。伝説通りの力はなさそうだと……

七話 過去話（ヴォバン編）

『明後日の0時に神様を呼ぶ儀式をするんだって』

サルバトーレからの電話である。『ヴォバンがいつ 神威招来の儀を行うか、調べておけ』と言っておいたのだ。祐一は、“ヤツも確実に神様と戦いたいだろうから、より確実に呼べる自分をハブるということは無いだろう”と思っていたし、実際に連絡してきた。『よし、すぐに行くから、待ってる』

『なるべくはやく頼むよ。グズグズしていると間に合わないからね』祐一は、「わかってるよ」と返事して、すぐに準備に取り掛かった。

今は夏休み、この案件に2、3日かかったとしても、出席日数を気にする事はない。

「うわ、もう来たんだ！速くないかい？たしか日本はここから12時間くらいかった気がするんだけど……」

「ははは、バカだなあ。……アストラル界を抜けるこの俺に、移動時間など関係ないわ！」

おまえと会った場所がどこか、もう忘れたのか？と言いたげだが、サルバトーレにアストラル界の知識はあんまりない。まさか、日本―イタリア間を10分足らずで行き来できるとは思ってもいなかったのだ。

「そういうものか。まあ、遅いよりは速い方がいいね。……で、どうするんだい？」

「取り合えず現地に行くぞ。どこだ？」

「近くだよ、ここから3時間くらいの所でやるらしいよ。でも、ここくらいしか泊まる場所がないんだよねえ」

「むっ、そうか。じゃあ作戦を説明する」

「ごによごによとお約束のやり取りを行い。さあ、出発と思ったが、儀式は明後日なので取り合えず宿を取る事にした。」

その後、

「しかし、頼んでおいてなんだが……よく調べがついたな」

「ああ、それはね。リリアナ・クラニチャールに頼んだのさ！君はヴオバンの爺さんに無理難題を頼まれる。ユーイチならそれを確実にできるらしいから、儀式の場所と日程がわかったら連絡して欲しい、ってね」

「なるほど、おまえにしては考えたな。……それにしてもおまえ、よく名前を覚えられたな」

「覚えるとも。僕に神様を提供してくれるかもしれない子だからね！」

97

「ふむ。じゃあ、もうひとり居た金髪の娘の名前は覚えているか？」
「え？居たっけ、そんな子？……ああ、思い出した！エンリカ・ビリデッリっていう子だろ！」

「うーん、惜しい、でも外れ」
という一幕もあったが、どうでも良い事である。

儀式の3時間ほど前に現地に着くよう時間を調整し、いざ出発！である。

やっぱり、移動シーンなんてのは特別な事もないし、スキップ、スキップ。

ちよつと遠くからわざわざ呼んだタクシーの兄ちゃんに、料金と多目のチップを渡して帰らせる。帰りは術を使えばよいのだ。……行きは仕方が無い。道なんてわからないんだもの。

そこから徒歩で20分。強く漂う呪力の流れに導かれ、ふたりは儀式場が見える、近くの崖の上に来ていた。

「もう、準備は終わったみたいだね」

「そりゃあ、準備くらい前もってやるだろう。いざと言う時に間に合いませんでしたと言われたら、おまえ、どうするよ？」

「そりゃそうか。……女の子たちも、もういるね。みんな不安そう
だ。まるで、生贄みたいだね！」

「みたいもなにも、そのままだと思っぞ。実際、単なる人間が神様
なんて招来したら、死なないにしても心があっちに逝っちゃうよ」
？――降臨術 神懸かり でも結構きついのに……」

などと話していたら、主催者であるヴォバン侯爵がやってきた。

ここからでは聞き取れないが、言っている事はわかる。

言うまでもなく、神の招来についてであろう。

「よし、じゃあ行くか！……手はず通りやれよ？俺としては、呼び
出した『まつろわぬ神』と戦うのは、あの爺さんでもいいが、協力
者としておまえに譲ってやろうと言うんだから、失敗は許さんぞ？」

「わかってるよ。僕としてもここは外す事ができないね！じゃあ、
あの辺りに隠れてるから。……あの爺さんの足止め、よろしく！」

儀式場の近くの茂みを指し、サルバトーレは晒った。戦いの喜び
を湛えた暗い笑みだった。

「お待ちください侯爵！……おそらくその儀式は失敗します！」

そう叫びながら祐一は、おもむろに登場して見せた。

舞空術　まで使って、何もない頭上から飛び降りて見せたのだ
った。

「ほう？面白いことを言うな、小僧？……たしかに難しい術だと聞
くが、これだけの巫女たちを集めたのだ、よもや失敗はするまい」
「いいえ。これは本来、神祖どもの使う術。人間の巫女を何人集め

たとて、成功は致しますまい。……いえ、よしんば成功したところで、巫女たちは只では済みますまい。才能と未来ある若者を使い潰す所業、どうかお改めください」

来る鬭争に向け、既に戦闘スイッチが入っているっぽいヴォバン侯爵は、もう既に神は招来できるものと思っているが、祐一は沈痛な表情で彼を諫める。

しかし、

「ははは、良い度胸だ、小僧。このヴォバンに諫言するか。——よいではないか。私には幾つの特権がある。狩りの獲物を選ぶ権利もそのひとつだ。その為にどれ程の犠牲を出そうが……な」

そんな諫言でやめるようなヤツはカンピオーネではないし、祐一も当然思っていない。

「見たところ貴様も『王』のようだ。このヴォバンの所領に無断で入り込んだ無礼は、まあ、許そう。しかし儀式の邪魔立ては許さん。大人しく見ているというのなら、私の狩りの見学くらいはさせてやるう」

「今一度申し上げますが、儀式は失敗いたします。成功率は高く見積もっても20%もありますまい。そも、数を集めることに意味はございません。寧ろ、格の低いものは邪魔になるだけなのです。——故に侯爵、私が『まつろわぬ神』を招聘して見せましょう。侯爵が仰せの通り私は『神殺し』です。魔術における師は神祖、そして私自身が降臨術師です。この道については、専門分野と言えましょう。巫女たちを犠牲にすることなく、なお、高い成功率をお約束いたします」

慇懃に芝居がかった様子で祐一はヴォバン侯爵を説得する。

ヴォバンはしばし考えたが、やがて面白そうに笑みを浮かべて

「ふむ。……私としても『まつろわぬ神』と戦えればそれでよい。

貴様が呼び出せばそれでよし、できなければ……小僧、貴様がこのヴォバンの獲物となるが、良いかな？ああ、答えは聞いていない。貴様も『王』であるならば、その大言の責任は取らなくてはな……」

宣言した。

儀式が成功すれば勿論、失敗しても獲物ができるのだ。巫女たちにやらせて失敗されるよりはよほど良いと思ったようだ。

「心得て御座います」

祐一も笑みを浮かべて承諾した。

もつとも、彼は成功しても侯爵と戦うことになる。サルバトーレに横取りさせるためだ。もし失敗すれば、サルバトーレとふたりで侯爵をボコろう、という心算だった。

「しかし、いったい何が目的なのだ？……この中に家族が関係者が居るのかね？」

「いえ。ただ才能を愛するが故に、で御座います。……確かに私の所属する正史編纂委員会の関係者も、何故か居るようですが。まあ、彼らの『王』としては救わねばなりますまい」

ふと思い立ったようなヴォバンの質問に、誠実そうな演技で尤もらしく祐一は答える。

本当のところ、彼は彼女たちなどどうでも良かったが、自分の権能の条件を満たす為にこの儀式に参加しておきたかったのだ。今回の獲物^神はサルバトーレに譲る。自ら戦えない、そして近くで観戦もできない以上は『ジークフリード』との縁を築いておかなくてはならない……そう、彼を霧の向こうに導く為には！

「……私は願ひ奉る。竜を殺めし英雄よ、我が導きに応じ、不死の世界より返り来たれ。——」

邪魔になるからと巫女たちを退避させ、神威招来の儀式を行う。神の影ではなく、本当の『まつろわぬ神』を呼び出すためのものだ。難易度も跳ね上がっている。

しかし、失敗するとは思わない。向こうで本当に狂ったように祈りを上げる神官も、今だけは頼もしい。ヴォバンはすこし離れたと

ここで見ている。儀式の邪魔だから、とご退場願ったのだ。

呪文の詠唱が進むに連れて、描かれた魔法陣に大地と星々の精気^{呪力}が流れ込む。

「——いざ、参られよ！『勝利と喜び』の名を持つ、鋼の勇士ジークフリードよ！！」

最後の1フレーズと共に光が弾け……そこには人影が立っていた。上質で動きやすそうな服に一目でわかるほどすばらしい魔剣……彼こそがジークフリード、『まつろわぬジークフリード』であった。『よし。いいぞ、サルバトーレ！』

祐一は叫びながら高速移動の能力を使って飛びのく。ヴォバンを引き離す為に戦う以上は、戦闘区域には入らないようにしたのだ。

もっとも、彼は祐一が言うよりも速く行動していた。

さすが戦いの申し子、機を見るに敏である。

「なっ、どういう事だ、これは！」

ヴォバンはいきなりの事に戸惑ったように怒鳴った。

彼は別に武術を修めた訳ではない。ただ本能のままに戦う『闘士』なのだ。

実戦で戦えばどうなるかはわからないが、サルバトーレほどの敏捷さはなかった。

「残念ですがこういう事ですよ、侯爵。貴方は騙されたのだ！……いや、俺としてはあの英雄様と戦うのは誰でも良かった。貴方でも彼でも、そして俺自身でもね」

「ほう？ではなぜ、彼が戦っているのかね？」

余裕を取り戻したのか、ヴォバンが落ち着いた声音で質問してくる。

だが、心の内は穏やかではあるまい。儀式は成功。さあ、狩りの時間だ！つという時に獲物を搔つ攫われたのだから。

「誰でも良かったと申し上げた。……まあ、協力者だし、邪魔をさせないよう貴方を足止めしといてやるうって言うのもあるんですよ。……どうせ、戦うつもりでしょう？」

多少砕けた物言いになっているが、慇懃無礼に祐一は言う。浮かべた笑みも皮肉気だ。

「ハハハハッ……ここまで虚仮にされたのはここ暫くないな、あの羅濠め以来だ！——ジークフリードはあの若造が先に手をつけてしまった。まとめて粉碎してくれても良いのだが……小僧、私と戦うといったな？良かろう。その増長、後悔するがいい！」

——オオオオオオオオオオオオ——ンンンン——

バカでかい狼が景気良く出てきたので、祐一は再び高速移動の能力を使い、距離を開ける。

「あんたは狼と死人の軍団を従えているらしいが、俺もその手の力を持っている！さあ、戦争を始めようじゃないか！！《追跡者^{チェイサー}》第三の刺客よ、霧の向こうより来たるがいい」

言霊と共に霧が立ち込める。

霧から湧き出てくるようにユラユラとした人影が……いや、明らかに人では無い者の方が多い。

それは祐一の持つ“3つの権能の力”が呼び寄せた異形の軍団だった。

勿論人間のような姿のものもいる。だが、一言で言えば様々モンスターの群れに人間が混じっている、と表現した方が適切だ。

共通している事といえば、一様に生気がなく亡霊のようだ、ということか。幽霊をそのまま実体化させたような、鬼気箘る風情であった。

「それが貴様の権能か。ならば我が従僕たちも加えてやろう！——さあ、私を楽しませろ！」

と言っても、大分離れているので、如何に耳が良くとも正確には聞き取れない。ヴォバンの権能であろう嵐も出てきているし。

「別に聞こえずとも支障があるわけでもなし。さて、まずは銃撃戦だ！」

砲火一閃、暴風にも負けない轟音が鳴り響く。

ヴォバンの従僕にも銃兵は居たが、たしかそれらの銃器は使用不

ことで回収可能にしたのだった。

「じゃあ、こつちもとつと終わらせないとなあ！」

ヴォルテージが一気に上がる。

神の招来は思った以上に祐一の呪力を持っていったが、そもそも彼の権能は大量の呪力を必要とするものが少ない。

例外もあるが、そもそもあれは戦闘そのものに使えるわけではない。黄泉軍よみつきぐさの召喚も、一度召喚してしまえば消えたものを再び呼び出さない限りは消耗しない。

加えて、伊都之尾羽張の軀である神剣・天之尾羽張に蓄えた呪力も十分にある。

何よりも気力が充実していた。

『負ける気がしない』そんな感覚が彼を満たしていた。

「理解したぞ！これがオーディンから篡奪した権能だ！」

全身を包む全能感、何度となく感じてきた権能掌握の瞬間である。

「やつぱりこの感覚は最高だ！今の俺は何だってできる！」

自身の軍に呪力を《新たな権能》を送り込む。

すると、何ということでしょう！

生気に欠ける亡霊の群れから、光り輝ける軍勢になったではありませんか！

姿かたちこそ代わりませんが、どこことなく存在感がなかった兵隊の顔からは精気に満ち溢れ、古ぼけた感がある装備品は新品のような、いえ、使い込まれてなお輝く一級品になったのです。

そして何より変化があつたのは祐一君本人でしょう。

彼の左眼は紅く輝き、残り1/8を切っていった呪力は満タン、いいえ、神威招来 の儀式前と比べてなお3倍はあろうかと言う勢いです。

後に《レフトアイオブグロリー叡智の左眼》と名付けられる権能の発露でした。

「突撃せよ！粉碎せよ！！蹂躪せよ！！……あのジジイの肉片一つ残すな！」

亡霊騎士団からアインヘリヤルと生まれ変わった軍団に、ノリノ

リで号令をかける。

いきなり勢いを増した軍勢は、亡者の群れを粉碎し、ヴォバンを飲み込もうとするのだった。

まあ、結果から言えば無理だったんだけどね。

狼の群れが消えたかと思うといきなり老人の身体が膨張し、巨大な人狼となり、そのうえヴォバンの権能であろう大火が当たり一面を焼き払ったのだ。

アインヘリヤルと共に突撃していた祐一は、《斬？》で熱エネルギーを吸収して防御したものの、軍勢の殆どが焼かれて消えた。

「うーん。やっぱ、無理だったか」

「当然だな、小僧。貴様の従僕は私のものより質が良くなったようだが、その程度で届くほど耄碌はしておらんよ」

祐一の独り言に律儀に答えるヴォバン侯爵。

しかし、軍は敗れたものの相手の従僕もいなくなっているし、左眼の魔力は健在、いや、さらに強くなっている。おそらく、炎の権能の分をカウントしたのだろう。どうやら、その場で使われた権能の数、或いは漂う神格の数だけ呪力は上がっていきらしい。

まあ、大量にあって困るわけではないが、ここまでの呪力を使いこなす当てもないので、現在は無意味である。今後この能力を使う前に考えておく事にする。

ともあれ、権能を掌握する前のプランに差し戻せば良いだけなので、問題はない。

「じゃあ、爺さん。今からその鼻面に一発デカイの打ち込んでやるから、覚悟しな！」

「またもや大きく出たものだ！……やれるものならやってみるがい、ぎやくん、ぶっ！」

言葉は言い切れなかった。

宣言通りでかい狼の鼻面に拳を叩き込み、吹っ飛ばしたのだ。

当然、それは“神速”で放たれた。

祐一が高速移動するのはヴォバンも見ているはずなのに、意識の外にあったのだろうか、悠然と喋っていたらいきなり目の間に現れてドカンである。

或いはこれまでから祐一の攻撃力は低いと見て取ったのか。

しかし、彼も神殺しである。最初の権能はメインの能力が戦闘向きでなくとも、必殺威力の形態が必ずある。彼の場合、周囲に流れるエネルギーを圧縮して放つ一撃である。

この権能自体はエネルギー発生出力を持たないが、外部からエネルギーを集めれば集めるだけ天井知らずに攻撃力が上がるのである。対抗属性でなければ複数のエネルギーも同時に扱えるのが利点。

また、何かに纏わり付かせる事も、放出する事も可能である。

攻撃範囲を広げれば勿論その分だけ威力は下がるが、拳ひとつ分の範囲に、景気よく吹き荒れていた暴風の力を30分以上も集め固めた一撃である。あの巨大さと言えど、ひとたまりもないだろう。とはいえ、この程度で死んでいては、如何に復活の権能を持っていたても、三世紀に渡り君臨するなどということはできない。

小さくならない事を思えば、まだまだ戦えそうだ。

案の定、ムクリと起き上がるうとしている。

「しかし、そうは問屋が卸さない。ここで死ね、ヴォバン！」

槍を召喚し、神懸りを行う。師であるスサノオの権能ちからを振るうためだ。

嵐は既に吹き荒れている。雷雲は既に天を覆っている。彼の求める力はすぐに手に入るだろう。

「小僧！貴様は人が話している間も待てないのか！？……様式美を解さぬ輩め！！」

ようやく上体を起こし、怒りの形相？（狼の顔色など解からない）で叫ぶヴォバン、しかし祐一は涼しい顔だ。

そう、戦いの最中で長々と喋っている方がバカなのだ。どうして言い終るまで待ってやらねばならないのか？

雷を落とす。同時に何条も……

ヴォバンに……ではなく、天に掲げた己の槍に！

都合10発、ヴォバンが完全に起き上がるまでにこれを叩き込む！
護堂の山羊は1条でヴォバンを焼き殺した。今回の狼王はでかいから、念のため10倍である。ついでに全身から発電した《追跡者》
第二の刺客も纏わり付かせる。
ザ・チエイサーズ

「喰らえ、嵐神らんしんの怒槌いかづちをおおッ！！」

と言っているが、別にツールは関係なかったりする。——雷神と呼ばれるけど、彼は正確には天候神だよ？農耕神でもある——
単に叫びたかっただけなのだ。

そんな一撃を、律儀に喋り終わってから立ち上がろうとする老力ンピオーネに叩き込む！

体勢が悪かった侯爵は——マツハで推進している上、例え避けられても追跡するが——避ける事も、呪力でそらす事もできずに直撃を受けるのだった。

「侯爵は爆散した。オーストリアの平和は護られたのだった……つて訳にはいかないか、やつぱり」

「当たり前だ、私を誰だと思っている？——いちいち癪に障る下郎め、喰い殺してやるぞ！！」

灰から生まれ変わったヴォバン侯爵が憤怒の表情で祐一を睨ねめ付ける。

原作で護堂と戦った時は、それでもここまで激怒していただろうか、いや、していない。

やはり、祐一の戦い方はお気に召さなかったらしい。
でも、しかたがない。戦い方が違うのだ。

ヴォバンが格闘技か何かの達人であれば、まだ勝負になっただろう。しかし、彼にその心得はない。溢れる闘争心とスペックの高さが武器だ。

羅濠教主は彼と対戦しても王者として様式美を守ったことだろう。でも、祐一は違う。

戦いの最中、ましてや接近戦の最中に長々と喋り始めた格闘技ド素人を待つてやるほど戦いを舐めてはいない。相手に何もさせずに勝つというのがセオリー、と思っているからだ。まあ、その割には最初の集団戦のような事を始め、テンション次第でいろいろとやるのだが……。

と、そこに

「あれ、まだ終わってなかったの？」

脳天気な声を上げてサルバトーレが出て来た。

ようやく追いついたのか、それとも終わるまで待つていたのか？ともあれ、これで2対1。祐一に正々堂々と言う意思是、少なくともこの老人に対してはなかった。

何しろ300年もの間神殺しなんて稼業をやってきているのだ。

何してくるかわかったもんじゃない。

とは言え、もう目的も達成したし、帰りたいのも事実。戦っている時（や、演技している時）は気分も高揚するが、一度冷めると面倒になる性格なのである。

「これで2対1。とはいえ、どうします、まだ続けますか？相当消耗しているようですが」

「当然だ……と言いたいところだが、たしかに消耗しているな。最初からならともかく、今の状態で神殺しをふたりも相手にできるとは思っておらぬよ……ちつ、仕方がない。今日のところは勝ちを譲ってやろう、卑怯者め！」

実に忌々しそうな声だった。彼も神殺し、負けを認めるのが死ぬほど嫌いな人種なのである。

「次に相見えるときは、今日の様な油断はせぬ。貴様を全力を持つて狩り捕ってくれる。——小僧、名前を聞いておこう、今より貴様は我が敵のひとりだ！」

「西条祐一と申します、侯よ。まあ、別に覚えなくても構いません

が……」

「そういう訳にはいかな。『王』は並び立たぬ、どちらかが死ぬまで戦うのだ。或いは無視するか、不戦の盟約を結ぶのだが、貴様を相手にそれは無い！」

吐き捨てて、老王は闇に溶け込むように歩いていき、その内見えなくなった。

「僕は見事に無視されたわけだけど……まあ、比較的近いし、戦う機会もあるかな？」

サルバトーレはどこまでも脳天気だった。

このあと、祐一はサルバトーレからジークフリードの剣を回収し（報酬である）、日本へ帰るのだった。

そしてサルバトーレは、忘れ去られていた魔女や巫女と一緒にバス（彼女たちが連れて来られてきた車両くらいあるだろう）に乗って町へと帰還したのだった。

「おおよそはこのようなものでしょうか。所々抜けてはいますが、侯爵の権能は広く伝わっているものもありますので……」

自信無さ気に祐理が話を締めくくる。

「え〜と。やっぱり決闘の部分はサイレントなんだ」

「はい。巻き込んでしまつてはせっかく助けたのに無駄になる……そう仰られましたので、離れた場所から 千里眼 を使える方々が見せてくれました」

「リリイもそうね。彼女は 魔女の目 を使えたから、ここに居ればもう少し臨場感があつたはずよ」

「まあ、無いもの強請りしても無駄かあ。それでも収穫はあつたな。後はこういう神様から奪った権能なのか解かればいいんだけどな

……万里谷、何か解かったか？」

「はい。お話している間に幾つか霊視いたしました……まず、《死者の従僕》ですが、これはエジプトの神格・ウシル、日本ではオシリスとも呼ばれる神です——」

さらに、アポロンの事まで霊視するが、言葉に言い表せず撃沈。その日はお開きになった。

万里谷祐理が攫われる2日前の出来事だった。

七話 過去話（ヴォバン編）（後書き）

ヴォバン、どうやって横取りされたんだろう、普通儀式くらい見に来るでしょう？

儀式は山間のイメージ？少なくとも都心のと真ん中ではやるまい。

なお、サルバトーレと祐一は同年代（むしろ祐一の方がひとつ上）なのですが、西洋人から見て日本人は若く見える上、多少童顔っぽい（というか子供っぽい）ので、ヴォバンは祐一を小僧と呼んでいるのです。

21歳ですが、17、8歳位に見えたのでしよう。

ジークフリード（ワーグナー版）の鋼の護りはドラゴン関係ねー

！という事をダイジェスト版を見て知りました。

でも、関係ないよね？この話には全く関係しないし、出てくるのはあくまで、ごちゃ混ぜされたジークフリードだもの。

そう言えば《鋼の加護》は背中が弱点なのだろうか？そんな描写は一切無いどころか、全身を打たれても大丈夫そんなイメージが……アキレスなんかを倒しても得られそうなこの権能、果たして弱点は引き継ぐのだろうか？斉天大聖様あたりのものなら継ぎ目はなさそうだけど……

ワードで一文字空けてみる。コピペすると潰れる。ちくしょう。

あいも変わらず盛り上がらない。妄想が言葉にならず、もどかしい。

この爺様とは噛み合わないのでアレなのですが、羅濠教主と戦うその日までに戦闘描写のスキルを上げないと……せつかく 聴勁と 無想剣 のメカニズムをでっち上げたのに、説明できないなんてことに……

八話 護堂と侯爵（前書き）

このSSは基本的に全編通してご都合主義となっております。

ご都合主義から脱却できるほどの技量が欲しいです。

……特に前話は酷かったと自分でも思う。

八話 護堂と侯爵

サルバトーレ・ドニが護堂の電話をかけるすこし前、彼は西条祐一に電話をかけていた。

『やあ、祐一。護堂の電話番号を教えてくれないか？』

そのいきなりの連絡に

「理由を述べよ、出来るだけ簡潔に」

祐一も素っ気無く答える。

両者とも、その対応に遠慮は無かった。

『ヴォバンの爺さんが日本に行こうとしている。護堂と戦わせたい』

「え、マジで？何しに来てるんだ？」

『ほら、4年前に祐一がやった儀式があるじゃないか。もう一度やるらしいよ。それで、日本のユリ・マリヤを連れて行くんだって』

「ああ、あれか。……わかった、どうせ無視しても調べるだろうかから教えておこう」

素で問い返してしまったが、その一言で疑問は氷解する。そう言えはこの時期だった。

本来なら電話番号は部下に調べさせていたはずだが、まあ、祐一に聞く方が早いだろう。

『助かるよ。……ああ、邪魔しないでやってくれよ？護堂には強くなつて貰わないといけないからね。君が助太刀したんじゃあ、意味が無い』

「まあ、ヤバくなったら、割つてはいるけど……そう言うからには勝算あり、と見ているのか？」

祐一自身も負けはしないとは思っているが、サルバトーレが何を以て勝てると思っているのか気になったので聞いてみる。

『まあね。君もわかっているだろうけど、あの爺さまは人を見下す悪癖がある。そう例え僕たちであってもだ。4年前だって、戦っても勝てるけど、時間切れだから見逃してやる、みたいな感じだったじ

やないか。あれから僕も戦ったんだけど……戦っている、と言うよりは何かスポーツを楽しんでいるみたいな感じだった。これは戦士としては致命的だよ。その点護堂なら持ちうる力全てを出し切って勝ちに行くだろうから、力の差はあってもいい勝負になると思う』

どんな状況からでも勝利をもぎ取るのがカンピオーネである。同じ神殺し同士であっても勝負の行方はわからない。より勝利に關して貪欲な方が勝つのだ。

退屈凌ぎのゲーム感覚で戦うヴォバンに、勝利の女神は微笑むまい。護堂は友人のために必死になれる男なのだから……

たしかに、と祐一は納得した。

「よし。ではその方向でいこう。俺もあいつには強くなってほしいからな。……アテナとっちゃったし」

ボソツと付け加えられた言葉を聞きとがめたサルバトーレが、『護堂じゃなくて、祐一に取られたんだったら僕がやればよかった』と残念がっていた。

さて、旧華族・万里谷家長女、祐理はやっぱり捕らわれていた。昨日、狼に関する魔導書を鑑定した際に、ヴォバン侯爵を幻視してしまった。

失神から回復した後、甘粕に相談したのだが、『じゃあ、王様に頼みましょう』という事になり草薙家を訪れたのだが、運悪く西条祐一は留守だった。

『王様はもうひとり居るじゃないですか』と甘粕は軽く言ったが、祐理には護堂のみを頼むという選択肢は無かった。さすがに『僅か三ヶ月程度のキャリアしかない護堂に、齡300年の老カンピオーネの相手をさせるわけにはいかない』と思ったのだ。

そして、今日捕らえられた。

何か手がかりになるかと思い、もう一度あの魔術書を靈視しよう

と図書館へ行った時の事だった。

これが運命か……と思ったかどうかは定かではないが、とにかく祐理は諦観に捕らわれてしまった。

しかし、草薙護堂は来た。

彼は友を見捨てるような男では無い。何せ小学生の時に『友達が困っているから』という理由で石川県まで（無断で）行っちゃうような非常識人^{困ったちゃん}なのだ。

「随分と若いな。そういえば、私が『王』となつたのも君ぐらいの年頃であつた。……名乗り給え、少年。我が名は名乗らずとも知つていようが、私は君を知らぬ」

「草薙護堂だ。俺の友達を返してもらいに来た。あと、あんたのことはたしかに知ってるけど、人に名前を尋ねるときはまず自分から名乗るのが礼儀じゃあないか？」

『相手のペースに吞まれてはいけない。自分のペースに巻き込むのだ』

従兄である祐一の教えである。

護堂は野球をやっているとき、キャッチャーだった。祐一は何を誤解していたのか知らないが、キャッチャーとはヤジを飛ばすものだと思つていたらしい。その為の教えだった。

その意味では役に立たなかったが、たしかに勝負事の時に相手に吞まれることは敗北に繋がる。逆に吞み込めれば有利なことこの上ない。

他にも『油断は誘え、しかし決してするな』とか『9回ツーアウト9点差でも逆転されることもある。逆に言えば逆転できるかもしれない。慢心する者や諦めた者に勝利の女神は微笑まんだ』とか、それはどこのスポコン漫画だ、と言いたくなるような野球論を展開していた。普通に格闘系が混じっているし……。

ともあれ、この程度ではさしたる効果は見込めないとは思いつつも、護堂は牽制球を出した。

「ふむ、それは失礼。成り立てとは言え、たしかに君も『王』であつた。……デヤンスタール・ヴォバンだ。以後見知りおけ」

やはり、余裕たっぷりで返してくる。

「草薙さん、どうして！？ いけません、私などのためにこんなところに来ては！」

「来ちゃいけないってことはないだろ？ さあ、帰るぞ、万里谷。自分で歩けるか？ 乱暴とかはされてないだろうな？」

ある意味ヴォバンを無視して護堂は告げる。

「そのような愚行はせぬし、連れて帰られる訳にもいかんな。……少年、その娘は君の何なのだね？ 家族か妻か、それとも愛人か？ すまぬが、私が貰って行く。まあ許せ」

「ふざけんなッ！ 神様を呼びたいなら、ひとりでやれ！ あんたも王様なんだからそれくらいやって見せろ！」

なんだかんだ言つても、サルバトーレが語つたヴォバンの目的。

一部とは言え、4年前の儀式の顛末と、その儀式をただの人間がやる危険性。

そして、塩柱になつた司書さんたち。

持ち前の義侠心に任せ、護堂は怒鳴り散らした。

が、ヴォバンは退屈そうだった。どうやら、ペースは奪われてしまったようだ。

「少年よ、これは『王』同士の会合だぞ。君の所領へ無断で入り込んだ非礼は詫びよう。だが、私の目的を言葉だけで止められるとは思つてくれるな。『王』に何か願うのであれば、然るべき代償を用意すべきだ。そうではないかね？」

この老人に話をする気はないようだ。

もっとも、今回は護堂も似たようなものだ。先だつてこの老人の気性は聞いているし、友人を差し出すつもりもない。

「代償だつて？ じゃあ、あんたは何をくれるんだ？ 人の家に無断で入り込んで、人殺しをした上に誘拐までやろうつて言うんだ。あんたの言うとおりなら、これは『王』の会合なんだろう？ 自分だけ代

償を払わないでいいって訳にはいかないな」

先程すこし爆発したせいか、幾分落ち着きを取り戻して語堂は言った。

自分で『王同士の会合』とか言いながら、人を見下して自分の言い分しか通さない。なるほど、情報通り、わがままで。知的な外見をしているからと言って、話を通じるわけじゃあない。

「ほう。このヴォバンに代償を払え、と。大きく出たな、少年。やはりこの国の『王』は、礼儀を知らぬらしい。君もあの男も……」

「当然だな。礼儀を弁えないヤツに払う礼儀はないし、俺に代償を払えって言うなら……まずあんたが払うべきだ」

俺は受け取らないけどな、と続ける語堂に、

「それは宣戦布告かね？君のような小僧がひとりで？いや、あの男が帰ってきているのだろう、それが君の強気の理由かな？——ああ、いいだろう！思えばヤツを狩り出すのも楽しそうだ」

ヴォバンはひとり納得し、薄く笑うのだった。

「よかろう、受けてやる。——『王』に成り上がって一年も経たぬ貴様など、私の獲物にはなるまいが、せいぜい楽しませてくれ給えよ」

ヴォバンは祐理を立たせて突き飛ばし、宣言する。

「30分やる。その娘を連れて、どこにでも往くがいい。どこに逃げても狩り立てるまでだ。あの男、西条祐一を呼んでも構わんど。あの卑怯者めに、本当の王者たるの力を見せてくれる！……さあ、今から30分だ。早くしないと逃げられないぞ？」

勝利条件はヴォバンを倒すことのみ。なぜなら、逃げる時間は30分あるが、いつまで逃げ切れれば勝ちなのか決められていないからだ。ならば、少しでも被害が少なく、且つ態勢を整えることの出来る場所で迎え撃つ！

護堂は決意を新たにし、頷いた。

「なるほど。ではひとまずここから離れて対策を考えましょう。この辺りで広い場所と言えば……日比谷公園にでも行きますか。連絡を飛ばせば30分で封鎖できるかもしれません」

「わかりました。じゃあそれで行きましょう」

外で待っていた甘粕に事情を説明し、戦場に出来そうな場所を探す。なお、作者は関西在住なので東京の地理などわからない。地図で探した。

車に乗り込み移動するその最中に、

「万里谷、あの『狼』の権能の神様の事だけど、何かわかったか？」
語堂は切り出した。自分が勝つためにはあの権能を何とかしないと駄目だ、と言う事がわかっていた。単なる勘だが……。

「すみません。喉元まで出かかっているのですが、上手く言葉にならないくて……」

「仕方が無いわね。……祐理、あなた 教授 は使える？」

煮え切らない祐理にエリカが提案する。

「あ、はい。他人様^{ひとなが}に知識や靈感を伝達する 啓示 の術があります。…… 直接お教えすればよかったのですね」

迂闊でした、と続ける祐理に護堂はイヤな予感が拭えない。

「それでは草薙さん。術をかけますので力を抜いて……」

「いや、万里谷。俺たちに普通の術は効かないんだ。その……特別な方法が必要って言うか……」

「特別な方法ですか？それは、一体どのような……」

「平たく言えばキスよ。経口摂取で魔術を伝えるの。でもあなたがする必要は無いわ。わたしに術をかけてくれれば、それを護堂に伝えてあげる」

口ごもる護堂にエリカが助け舟？を出す。あんまり、助かってないような気もするが。

「それは、エリカさんがキスをなさる、ということですか？そんなのは不潔です！自分の体質を盾に女性に口付けを迫るだなんて！」

潔癖なお嬢様がいきなりプリプリしだした。今時キスくらいで何を言っているのか知らないが、護堂としては自分だけではなく祐理の命もかかっているので、とにかくまくし立てた。

「万里谷。わかっていると思うけど、あの爺さんは強敵だ。俺も出来る限りの準備をしておきたい。この前みたいに準備不足でやられたら、万里谷も攫われる。後悔だけじゃすまないんだ」

「そうそう。あなたにやれって言っているわけじゃないんだから、すこし落ち着きなさい」

「ですが……！」

「祐理。あなたの価値観なんてどうでもいいの。……重要なのは護堂が侯爵に勝てるかどうかよ。せつかくやる気になった『我が主』の気分を害するようなことは、謹んで貰いたいわね」

なおも言い募ろうとする祐理を、エリカが切って捨てる。これは勅命だ。この娘は忘れているかもしれないが、護堂も『王』なのである。

それを抜きにしても、スロースターターもいいところの護堂がこれほどやる気になっているのは珍しい。水を差されなくなかった。

「護堂もようやくカンピオーネとしての心構えが出来てきたような？——それで、『貪る群狼』用の剣が欲しいのは何故？」

「祐一さんが言ってたんだ。『戦闘向きに見えなくても、一つ目の権能は危険だ。一番慣れてるつてもあるけど、これからそれで神殺しを続けるわけだから、当然神様にも通用する能力がある』って言ってたから……。勘だけど、あれを何とかすればいける気がするんだ」

エリカの疑問に、上手くは言葉に出来ないと、祐理と同じ様なセリフを吐く。

「頼む、万里谷。このままあの爺さんを放っておいたらとんでもない事になることくらい分かるだろう？」

「ならば、私のことなど放っておいてくれればよかったのです。私一人で解決するのです……」

「日本はそうかもしれない。でも、あの儀式をひとりでやれるか？ たぶんだけど、万里谷ひとりで済む問題とも思えない」

護堂は畳み掛ける。この話の護堂さんは謎強化されているので、勝利の為ならある程度の羞恥には耐えるのだ。

真摯なまなざしで祐理を見つめる護堂。祐理もなんだか自分が間違っているような気がしてきた。危険を顧みず自分を救いに来てくれた『王』である。協力するのが当然のような……？

ところで、気付いただろうか。護堂をアルファベットで書くとG O D O U。分けるとG O D・O U。

今の護堂さんは『神』が入っていた。相手の性格を見抜き断れないようにする訳ではないが、何となく雰囲気的に逆らい難い。まさしく『王』である。

言い争っていても仕方が無いので、早く進めたいと言う思惑が透けて見えるが、今の護堂は正に恋愛紙芝居の主人公のように理不尽なスペックを持っていた。

「でしたら、私がいたします。ええ、直接の方がより鮮明なはずですよ」

ついに祐理が陥落した！目がぐるぐると回っている、まるでギャグ漫画のようだった。

「無理はしなくていいのよ？魔術なんだし、伝言ゲームみたいにはならないと思うけど……」

「いいえ、自分の事です。私だけが守られているわけにはいきません！」

エリカが押されたように言うが、祐理は語気荒く言い切った。

「そうですね。仮にも媛と呼ばれるお方が、我が身可愛さに他人を身代わりにするなんてしちゃあいけません。ほら、自分のために戦いに赴く騎士に他人のキスを与えるなんて間抜けじゃあないですか」

今まで黙っていた甘粕も、日本の媛巫女が『王』と仲良くなるのは大歓迎なので、援護射撃をだした。もうひとりの『王』はいろいろ

ると頼み難いのだ。

この後発生する桃色な空間に、エリカは面白くない思いをしながら、時間は過ぎていくのだった

その後狼の追撃をのがれ、公園へ。クライマックスシーンである。

「待たせたな、小僧。私に押しつぶされる覚悟はできておるか？」

「それほど待つちゃいないさ！こつちも準備は万端だ！なあ、あんたはこの『狼』をどこの神様から奪ったものか、覚えているか！？」

既に一帯は嵐となっている。護堂は風に負けないよう、声を張り上げた。

「いきなり何だ？そのようなこと、貴様には関係あるまい？」

どいうからくりか、大声を出しているわけでもないのにはつきり届く侯爵の皮肉気な声。

しかし、関係はある。これからその神格を切り分けなければいけないのだから。

祐理から受け取った知識はふたつ。『アポロン』と『オシリス』である。

あの後さらに啓示があり、この二柱には共通点がある故に上手くいけば両方とも斬れるとかなんとか……。

それでも厄介なのは『狼』の方である。まずはこれを斬らねばならない。

護堂は『白馬』を使ってもこの老人には通用しないと思っていた。なるほど、太陽神アポロンの権能を持っていたのなら不思議ではない。ならば、『アポロン』を斬り、『白馬』をぶつければどうか？と考えたのだ。

「俺は知っている。あんたが殺したひねくれ者の神——夜のように歩き回り、人に仇なす狼の神を知っているぞ！」

言霊の剣を引き抜く。

光が煌めき、無数の剣となる。

「古くはポイボス——光を意味する称号で呼ばれた神だ。だが、同時に『夜に酷似した』なんて言葉を贈られた神でもあった。上辺と内面が大きく矛盾した、ひねくれ者の神を、かつてのあんたは殺したんだ」

ぶつちやけた話、ギリシャ神話は外から取り込んだエピソードが多い。そりゃあ、もう数え切れない。混じっていけばひねくれ者は1柱や2柱では済むまい。

だいたいゼウスからしてアメンなどと『神々の主だから』という理由で同一視され、混ざっているらしい。ヘラクレスなんかも典型例である。

何が混じっていてもおかしくない。それがギリシャ、ローマ神話と一神教である。

護堂はアポロンの謎解きを続ける。

苦難の誕生、大地と縁を持つ聖獣、ピュトン^蛇を倒し神託の神の地位を強奪。

なお、彼はデルポイの神託所の4代目なのだが、歴代は初代ガイア、2代目テミス、3代目ポイベである。

^{ポイボス}称号と神託所自体は祖母からの贈り物らしいが、自分たちの誕生に際して、母を追い掛け回してくれたこの蛇が憎かつたらしく、この番人であるこの蛇を生まれて三日目にアルテミスと協力して撃ち殺したらしい。

こうして、実際に神託していたピュトンを殺しちゃったので、アポロンは自らが神託者になったのだ。

が、ピュティアの神託は、巫女がピュトンの死体から湧き出るガスでトランス状態になり、支離滅裂に話す言葉を男性の神官が訳のわからない、謎めいた詩に直すと言う方法が取られたと言う。アポロンは正直関係ない。

どう考えても祖母から『光』を受け継いだエピソードに、『英雄は怪物^{へび}を倒すもの』という話を加えたとは思えない。

輝ける英雄神を作ろうとしてみちゃ混ぜにした結果、矛盾だらけのひねくれ者が誕生したと言う事か……いつの世にも廚二は居るものである。人のことは言えないが……。

対する侯爵も自身は巨大な人狼に変貌し、嵐の夜天に狼を飛ばしていた。

が、途中で元の姿にもどった。手遅れになる前に止めたのだろう。「権能を打ち破る言霊。貴様も『王』だな。小癪な手を持っておるわ」

傲然と立つ老侯爵に焦りは見えない。

数多くの権能を持つこの老人にとって、ひとつくらい封じられたところで何の痛痒もないはず。

しかし、できれば完全に切り裂きたい。だから、剣は捨てられない。

太陽神が僅かにでも残っていれば『白馬』は通用しないかもしれないのだ。

まだ、倒せるという手応えが護堂にはなかった。

「貴様はさきほどアポロンの謎解きをしたな。いかにも、私が最初に葬った神はアポロン。我が狼どもは彼の神より篡奪せし、聖獣の権能。さて、貴様の言霊——そのまま、他の神力に効くものか、それとも造り変える必要があるのか、或いは他の神力には通用せぬのか、試してみようではないか」

狼たちを引つ込め、代わりに出てくる死者の軍勢。図書館に入つた時にも襲い掛かれた『死せる従僕』たちであった。

彼らは整然と構えると、突撃してきた。

エリカが応戦するも、数の暴力は如何ともしがたい。早急に何とかしなくては敗北は必死である。

護堂は車中である神託を受けていた。

『共通点があれば、剣は造り変える事ができる』

概ねそんな内容だった。

言うのは簡単だが、やるのは難しいだろう。しかし、このままではやられてしまう。さりとて『白馬』を切り札と定めた以上、太陽を斬るまで剣は捨てられない。

「アポロンがそうであるように、オシリスもまた大地の生んだ神だ！」

この二柱の共通項とは何か？

「オシリスは冥府へと赴く前にイシスと交わり子をなす。それが後にアポロンとも同一視される太陽神ホルスだ」

……実は親子関係にある。

オシリスは『大地』『豊穰』を権能とする生産神で、同時に闇を眷属とする『冥府』の神でもある。そして、ラーの後を継ぎ神々^{エジプト}の王として正当に君臨している。そして、その子であるホルスは太陽神なのだ。

神々の王であるゼウスと闇と大地の女神レトの子が太陽神アポロンの出自である。

神々の王となったオシリスと自身も大地の女神であるイシスの子がホルスの出自である。

子の神格語りで親の神格が斬れるかは不明だが、とにかく類似項である。

「そうして、冥府の神となった後も我が子ホルスを後見し、ついにオシリスの王権を取り返すんだ」

後にはオシリスもラーと同一視され日の神になったりもしている。このことから後にはゼウス「アメン」アメン・ラー「オシリス」という理由で同一視されたから混沌極まりない。

さらにアポロン神殿に間借りしていたり、ソルつながりで同一視されてみたりと以外に関係は多いらしい。

「アポロンは大地から生まれた、しかし冥府の神にはならない。代わりに天に昇り、太陽の神になった。それでも死を振り撒く神なのはかつての痕跡なんだ。そして時代が下り、ラーと同一視されたオ

シリスは大地よりいずる太陽となる。アポロンとオシリスをつなぐのは父と子だけじゃない、共に大地と闇から生まれる光だったんだ！」

言霊を発し、剣を乱舞させる護堂。

死者を操り、突撃を中止させて己を守るヴォバン。

「見事だ、小僧。我が『狼』を斬り裂き、『死せる従僕』の軀に輝を入れるとは……」

「第一ラウンドは俺の勝ちってところか、爺さん？」

関連性が有ったとは言え、二柱の神格を同時に全て斬り裂く事はできなかったようだ。身体も軋みを上げているような気がする。

しかし、十分である。少なくともアポロンは完全に斬った。2、3日は使えまい。

オシリスもかなりダメージを受けているはず。最後の剣を振るった瞬間、多くの『死せる従僕』たちが塵となって崩れた。そう言えば、彼らが消えゆく時に何か言っていたような？

「では、第二ラウンドは取らせてもらおう。インターバルはないが、構わんだろう？」

ヴォバンが酷薄な笑みを浮かべてそう言った直後。

突風が吹いた。

護堂は吹っ飛んで転ばされた。

《疾風怒濤》という嵐の権能だろう。

「ハハハハハッ。……どうした、言霊の剣はもう品切れか？それともこの力を篡奪した神のことは知らないのかな？」

またも突風、再び転がされる。

見れば空には雷雲が轟いている。

『次はこれが来る！』そう直感した護堂は、ウルスラグナの聖句を以て、全身の呪力を活性化させた。あらゆる呪力を撥ね退ける、

カンピオーネの特性にかけたのだ。

これは成功し、護堂を狙った稲妻は脇へとそれた。

しかし、このままだとやられる。反撃しなければ……。

『白馬』を使うタイミングは上手く計らなくてはいけない。使った直後にやられて、『雄羊』を使えば、同時に使用できないという制限上、『白馬』の焰が消えてしまいかもしれない。

いや、消えなくても2時間以上眠り続けるからには、耐え切れなかったら終わりだ。

次々に、それこそ矢継ぎ早に襲ってくる稲妻をかわしながら、護堂はその瞬間を待ち侘びた。

と、そのとき、声が聞こえた気がした。

エリカたちのものではない。

明らかに人数がおかしい。男の声も混じっている。

それを理解した瞬間、護堂は自らがカンピオーネとして新たなステージに立った事を知った。

力を得るたびに感じるこの全能感は素晴らしく甘美で危険な感覚だ。或いはヴォバンもこの感覚を味わいたくて戦っているのかもしれない。

だが、自分はそうはならない。こんな怪しい力にのめり込んでたまるかと、逆に闘争心を燃え上がらせる。

しかし、切り札が一枚増えた。『白馬』と違い、今すぐに使える力が！

「——義なる者たちの守護者を、我は招き奉る。義なる者たちの守護者を、我は讃え、願ひ奉る。天を支え、大地を広げる者よ。勝利を与え、恩寵を与える者たちよ。義なる我に、正しき路と巧妙を示し給え！」

ウルスラグナ第9の化身『山羊』。その力は、民意を束ね、雷光を操る。

護堂は天より降る稲妻をその手に受け止めた。

「——我が雷を盗み取るとは不敬なヤツめ！……だが、よいぞ。ま

だまだ楽しませてくれるのだろう!？」

「あんたは随分と嫌われているようだぞ。あんたの『死せる従僕』のみんなも、この辺り一帯の人々からも……」

顔いっぱいに闘争の喜悦を浮かべるヴォバンに、護堂は静かに返した。

この力は自分ひとりのものではない。集められた意思と呪力が護堂を強くしていた。

「俺に力を!ヴォバンと戦うための力を貸してくれ!」

それからの護堂とヴォバンの攻防は一進一退だった。

ヴォバンは雷以外に風雨を操って攻撃を仕掛けるも、護堂は呪力を活性化させて防ぐ。

護堂が放つ雷撃も、ヴォバンは全て受け流す。

よく考えてみれば、当然だった。ふたりともカンピオーネの呪力で攻撃を流せるのだから……。

もっとも、必死になって攻防を続ける護堂に、ヴォバンは随分手加減をしているようだ。

或いはさらに強力な一手のための布石か。彼は雷雲をさらに呼び込んでいた。

「小僧、今こそ貴様に感謝しよう。よくここまで戦ってくれた。我が倦怠と無聊の日々を、よく慰めてくれた。あとわずかではあるが、この一時を堪能させてもうぞ」

勝利の宣言。

前情報によれば、さらに炎の権能を持つはず。なのに使わない。王者足るべく、相手と同じ力で正面から粉碎しようとしているのだろう。

しかし、それは隙のはずだ。

ふたりは打ち合いをやめた。

ヴォバンは呪力を高めている。最強の一撃を放つその瞬間のために。

護堂はここで切り札を使うことにした。今ならば呼び出せる！

「我がもとに來たれ、勝利のために。不死の太陽よ、我がために輝ける駿馬を遣わし給え。俊足にして靈妙なる馬よ、汝の主たる光輪を疾く運べ！」

ウルスラグナ第3の化身である『白馬』。東天より太陽の矢を放つための聖句である。

「なっ！？太陽だと！？」

最強の一撃のために集中していたヴォバンは、一瞬対応に遅れ、そのまま飲み込まれた。

10分ほど焼け焦がれた後、侯爵は灰の中から甦った。

「これから第三ラウンドか。休憩はよくとれたか？」

駄目だった。

そう言えば、ヤツは復活の権能も持ち合わせていた。

ヴォバンの呪力は相当減っているし、息も荒い。10分も焰に焼かれ、復活した代償は大きいようだった。

しかし、護堂も今ので『山羊』と『白馬』を使い切ってしまった。もう少し『山羊』でいるべきだったのかもしれない。

後使えそうなのは『猪』くらいなものか。或いは『鳳』で攻めるか。

第三者の聲がしたのはそのときだった。

「いやあ、キャリア一年足らずの子供相手に一回殺されたんです。

ここは大人の貫禄を持って帰るべきではありませんか？」

「貴様は。フンツ、従僕の影に隠れ、まともに相対する事もなく、人が話している時に攻撃を仕掛けるような卑怯者めがよくほざく。

……今まで隠れ潜んでおつたのに、出てきたということはこのヴォバンが弱るまで待っていたのか？」

「ん、耳の痛いお言葉。でも、大丈夫。俺は強い子だから。――

さて、そんなアホなやり取りはおいておきましょう。事実として、今ここにいるのは弱った貴方と護堂、そして無傷の俺。しかも貴方は『狼』は斬られ、『従僕』にはそっぽを向かれ……残るは、カンピオーネとの戦いに役立たない権能と『炎』のみのはず。ああ、『嵐』は健在ですか。しかし変わらない。俺はエネルギー系の攻撃には強い。『炎』の対策もきちんとしてきている。勝ち目はありませんよ」

祐一は右手に持つ剣ツルギを揺ら揺らさせながら、皮肉気に宣言する。正直、ヴォバン侯爵より悪役ぽかった。ただし、彼のようなスケール感はない……そう、えもいわれぬ三下感が漂っていた。グレードの低い男である。

「ほう？……では試してやろう！」

ヴォバンは残された呪力を高め、辺り一面を焼き払う『炎』を……出せなつた。

いや、出せた事は出せたが、それらの炎はまだ燃え残っていた『白馬』の焰と共に祐一の持つ剣に吸い込まれて消えた。

「この剣は火山の神を斬り、16もの神を生み出した神剣。熱にはちよつと強いですよ」

言葉通り、祐一の呪力がさらに増したようにも感じる。

アブソラオシオン

《斬？》と名付けられた権能と、それを与えた神の骸だった。三下の様でも、能力には関係しないのである。

ヴォバン侯爵は本当に忌々しそうだつた。4年前の比じゃないくらいに頭に来ていそうだつた。が、今回も王者として気を落ち着けたようだ。

「今回は引いておこう。その小僧が思わぬ強敵であつたことは、喜ばしいことだからな。久方ぶりの闘争を楽しめた。そうだな、4年前の貴様よりも、だ。今日のところはそれで満足しておいてやる……しかしな、下郎！貴様は絶対に許さん！！貴様がこそそと逃れ隠れようと、何処までも追い詰めてくれる！」

怒りもあらわに予告をだす。

「一年後だ。一年後の今日という日に私は貴様を狩りに行く。その日までこのヴォバンを本気で怒らせた事、後悔しながら待っているがいい！」

祐一は、何故一年後なのだろう？たしかに2、3日では厳しいかもしれないが、一月もたてば十分回復するのでは？と思わなくもなかったが、侯爵も時間を空けてヴォルテージを上げたいのだろう。楽しみの一時のための準備期間というやつか。

ここで挑発すれば不利を承知でかかって来るだろうが、そこまではしなかった。

ヴォバンは4年前と同じように、嵐の夜を突きつて何処かへ行ってしまった。

何処に行くのだろう、どうやって帰るのだろう？そんな疑問が渦巻いていた。

なお、リリアナ・クラニチャールは置いていかれた。忘れ去られていたとも言つ。

実のところ彼女は、護堂とヴォバンが雷対決をしていた時、エリカに懐柔^{脅迫}されて侯爵に反旗を翻そうとしたものの、結局その時が来ずに終わってしまったのだ。

そして、如何に祖父が侯爵の信奉者といえど、一度決意した事だし侯爵に付く気がなくなってしまった。

なのでこうして、サルバトーレ・ドニに報告がてら庇護を頼みに来たのである。

「ははは、そうかそうか。護堂があ爺さまを懲らしめてくれたかそうか。こりやめでたいね、ほんとに。実に喜ばしい話じゃないか、すばらしい！……祐一は本格的に嫌われたみたいだけど、まあ今更だよね」

「実質的には痛みわけのようなものです。あのまま戦っていたら、

どうなっていたか……」

「それでも、さ。あの爺さまは本当に、ある意味神様以上に人を見ていない。そんなんじゃ、足元を掬われたって仕方がないと思うよ。——そうそう君の事もちゃんとしておかないとね。おじいさんと《青銅黒十字》には僕から連絡を入れておこう」

「ありがとうございます。サルバトーレ卿」

「護堂は今回新しい力を手に入れた。ウルスラグナの力はあとひとつか。でも、掌握しきるのにはもう少しかかるかな？2年か1年か半年じゃさすがに無理かな……いやあ、今からそのときが待ち遠しいよ！」

サルバトーレは、礼を言うリリアナに軽く手を振って答えると、ひとり呟くのだった。

八話 護堂と侯爵（後書き）

護堂の『戦士』は、カットしましたが、原作の言葉も入っております。

それだけではなんだかなと思ったので、ちよつと関係性を調べてみました。

……アポロン殺しの剣でオシリス斬れるんじゃないかね？
普通にそう思いましたね。

ミトラス、ペルセウスができるなら、アポロン、オシリスができて不思議じゃないはず。

軽く調べただけで、まあ出るわ、出るわ。

まず、オシリス（＝ゼウス）・アポロン（＝ホルス）で親子です。
（＝は同一視）

で、時代が下り、アポロン、オシリス（＝ディオニユソス）で何故か親子になっています。

多分ですが、前3世紀に数十年に渡りサラピス（＝オシリス）がアポロン神殿に間借りし、従属神のような扱いを受けた事に起因するのではないかと思います。

さらに、ローマに行くと、ソル オシリス アポロンになっています。

オシリスもラーと集合され、太陽の神格を手にしていたためか、ゼウスと集合された結果なのかはわかりませんが、とにかく太陽の一族になっております。

ヘロドトス曰く、ほぼ全てのギリシャの神は外国から来たものだ、
エジプト
そうです。

だから関連性が多いのは当然かもしれませんが、あまりにも混沌としすぎている。

どうやらギリシャ神話（とローマ神話）は単体で楽しんだほうがよさそうです。まあ、この混沌具合はこれで楽しいのですが。

軽く調べただけなので、間違っ
ていても軽く流して、こっ
そり教えてください。

九話 ペルセウス一戦目 卵城下の戦い（前書き）

アイデアが出てくる時は、時系列関係なく出てくるものです。

正直、ペルセウス編を考えている時に叢雲のアイデアが出なくてもいいじゃない？しかし、めもめも。

ペルセウスさんはたぶん時間かかりそうです。

と言うかミトラス関係は既に（多少でも把握する事を）諦めた！

九話 ペルセウス一戦目 卵城下の戦い

イタリアはナポリの地下遺跡の一角に、その影はあった。

20名程の男女である。先頭に立つ人物は“如何にも魔法使い”といった感じのローブを纏っている。

「うむ、こんなものか。この程度では本来何の足しにもならないが、俺が関与する事で何か変化があるかもしれないからな。ちよつとした事でもやっておかねば」

ローブを纏った影がひとりごちる。とそこへ別の影が訊ねてきた。「隊長、このようなことに意味があるのですか？何の足しにもならないと仰せでしたが……」

「足しにはならなくてもバタフライ効果があるかもしれない。まあ何にせよ、お前たちが知る必要は無い」

じゃあ聞かせるなよ、などというツツコミは禁句である。悪役とはそんなものなのだから……。

彼ら“魔術師”は“一般兵士”と違いこの『王』に仕えるということがどういふことか、はつきりと認識している。

彼が私財を投じて戦場を駆けるのは戦力^{呪力}を上げるためである。敵味方の区別なく、勇士を『喜びの野』へ招くのだ。彼の指揮下で戦う者、そしてそれらに敵する者全てである。

故に彼に仕えることは死後の安寧を捨てる事である。そして主が死を得るまで永劫に戦い続けるのだ。

事実、彼らのうち幾人かの女性は、正しく“生贄”として送られてきた魔女・巫女の類だった。ご機嫌伺いで贈られた貢物の一部である。

しかし、永劫を戦えるという理由で馳せ参じた戦闘狂も居なくは無。死してなお、武器を取って戦う事ができ、老いさばらえた身だったとしても若返るのだから。——先達の話では、何でも普段は生と不死の狭間の領域で整備と戦闘と宴を繰り返していて、その戦

闘のエネルギーが主の呪力となって償還されるのだとか……勿論、いざ呼び出しがかかれば現世に馳せ参じて戦いもするし、その場で祈りを捧げて呪力を送り続けもする――

それを知るが故に、その女性は沈黙した。『王』の機嫌を損ねれば罰が下り、そしてそれは自分にだけとは限らないからだ。……多分重ねて問えば、長々と話してくれるだろうが、それはそれで面倒でもある。

溜め息を心の中でのみ吐きつつ、目の前の神器『ヘライオン』を見つめた。

所も時も変わり、草薙護堂はサルデーニヤ島での夏休みバカンスを楽しんでいた。女4人に男2人の組み合わせである。

万里谷祐理と手を取り合い、いざ日本脱出！したは良いが、きつちりエリカに回り込まれていたのだ。

しかし、すかさず護堂は従兄に泣きを入れ、援軍に頼んだのだった。さすがのエリカもカンピオーネを前にしてはおとなしく……するはずもなく、遠慮なく護堂をからかっている。――まあ夜這いの心配だけは無いが……。

「やつとふたりきりになれたわね、護堂。待ちくたびれちゃったわ」と思ったら、朝駆けされたでござる。

朝起きて、洗面所で身支度し終わったらLet's kidnapp. だった。

ほうほうの態で逃げ帰れば、万里谷祐理に説教される。ルクレチア・ゾラにいろいろと吹き込まれたようである。

当のルクレチアは何食わぬ顔でからかってくる。

援軍に呼んだ従兄は時々援護してくれたが、基本は自分で何とかしろといった風情。なお、彼がからかわれる事は無い。何故なら、基本的に暴君で通っているような精神的子供を相手にするより、安

全で面白い反応を返す男がいるからだ。祐理は時々突っかかるが、基本的に相手にされていないようだ。

護堂はそんな楽しいバカンスを原作通りに過ごしていた。

事件はその夜から始まる……。

なお、お昼の会話に出て来た源氏物語はどうも外国文化で育った方にはいかがわしく見えるらしい。いつぞや読んだ本に、帰国子女（女性）に源氏物語の英訳を頼んだら、「私にポルノを翻訳しろというの！」と怒って帰ってしまった、とあった。——まあ、あの本は最初から艶本のような気もしなくはない。だって、平安貴族の娯楽本なのだから（偏見）。

このままでは持たぬ、とばかりに大脱走した護堂ではあったが、頼みの綱のジェンナーロ・ガンツに断られ、どうしようかとぶらついていたら、懐かしの（と言っても二ヶ月ぶり）女神さまに遭遇してしまった。

「ひさしぶりだな、草薙護堂よ。妾に再戦を挑みに来たのか？」

戦の女神はうつすらと微笑みながら告げる。

リターンマッチはいつでも受ける、と豪語するチャンピオンのような態度だった。

夏らしい、清楚な白のワンピースに赤い靴という何処かの異人さんに連れて行かれそうな服装とはもの凄くアンバランスである。

「……いや、そんな気はない。ここで会ったのは偶然だ。けど、何であんたがこんな所にいるんだよ？」

「それは愚かな問いだな。あなたの方が、妾の版図に飛び込んできたのだ。この地で相見えるのは必然であり、運命。そうではないか？」

「ああ、なるほど……って、俺はあんたに用は無い。あんたも用があるのは祐一さんの方じゃないのか？」

「それは違うな。よいか、先の戦いから、まだ月が二度ほど満ち欠けを繰り返したただけだぞ？ かような短き間に、神と神殺しの聖戦を重ねるはあまりに無粋。彼奴と再び戦をするには、然るべき時と場所を選ばねばならぬ。しかし、あなたは妾に敗北した身ゆえ、早く再戦がしたいのか、と思っただのだ」

そこでいったん話を区切り、うむ、と頷いてからアテナは話を続けた。

「しかし、あなたは相も変わらず度し難い。闘士であるからには争いは避けられぬもの。ここで会ったのも何かの縁、ひとつ妾が鍛えて進ぜよう」

「……鍛える？——どうやってだよ。俺はあんたと戦う気はないぞ！」

「妾にもない。……なに、実は近頃、やけに気の昂ぶることが多くてな、或いは戦いの時が近づいておるのかもしれないと感じたのだ。そこにあなたがやって来た……のだが、どうやら別口のようだ。ならば、その戦にあなたを連れて行き、見聞させれば、或いは千日の鍛錬にも勝る糧となるう。これを以て西条祐一への楔とする。ついて参れ、草薙護堂よ」

「なんで俺を連れて行くことが楔になるんだ！？」

「なに、あの男もあなたを鍛えておきたいと思っっているような気がしたので」

それは単に当てずっぽう、と言うよりはもはやゴリ押しである。

この後、アテナ様は一般人の船を一艘お盗みになり、2時間ゆくりと船旅を堪能なされたのである。

護堂は猛スピードで爆走する船の中で、何かに当たりませんように、と祈るだけだったそう。彼は基本的にトラブルに愛される男であった。

さらに時と場所が変わり、再びナポリ。

謎のエージェントCは地下遺跡内のヘライオンを監視していた。なんでも、近いうちに産まれるらしい。

何が？とは聞けなかったし、聞いてもどうすることもできない。彼女に許された行為は、聖遺物を監視し、何かあれば報告する……ただ、それだけだった。

とは言っても、一人でずっと張り付いているわけにもいかない。人間に出来る事ではないからだ。スリーマンセルで6交代、計18人がかりでの作戦だった。

あと少しで今日の作業が終わる——まだ少女ともいえる彼女の希望は、残念ながら打ち砕かれた。

2人の魔女——資料によればディアナ・ミリートとカレン・ヤンクロスキ——が入ってきた、これでは帰れない！後20分で交代なのに……。

しかし、事態が変わったのであれば仕方が無い。見れば、同僚は既に交代要員に「今は来るな、追って連絡する」と報告している。

今日の仕事が終わったらジェラートを食べよう、そう思いながら魔女の本分に立ち戻るのであった。

事態が本当に変わったのはその40分後、ならもつと遅く来い！と叫びそうになったエージェントCだが、バレル訳にはいかない。

もつとも、その心配はする必要なさそうだ。……何故なら、サルバトーレ・ドニが居るからだ。既にバレていそうである。

幸い、彼は見てみぬ振りをしてくれた。自分が所属する結社の印を見て機転を効かせてくれたのだろうか？

それはともかく、彼らの話を纏めると「ヘライオンが呪力を溜め込んで困る」「よし、じゃあ斬ろう！」「止めてくれ！」だった。大雑把極まりない。

当然といえば当然だが、結局話が纏まらず、翌日への持越しとなった。

これで開放される。エージェントCは安堵の溜め息を吐くのであった。

まあ、別に終わっていないんだけどね。報告義務があるから。

三人一組とはいえ、基本の監視は魔女、或いは巫女の役目だった。後の2人はバックアップ要員でしかない。つまり、主に説明するのも魔女である彼女の役目だったのだ。

「はい、そうです。サルバトーレ卿がヘライオンを斬ろうとしていました」

「ああ、そう。たぶん夜にもう一回来ると思う。でも、もう地下の監視は必要無い。全員撤収してくれ。ご苦労様」

「了解です、隊長。撤収作業始めます。今回の任務はこれで以上ですか？」

「いや、お前は残っていてくれ。詳しく話が聞きたい。……それから、その辺にドラゴンとまつろわぬ神が出てくるから気を付けるように」

「え、まつろわぬ神ですか!？」

これで終わりだとばかり思っていたエージェントCに、思わぬ爆弾が投げ渡された。自分だけ勤務超過、しかも「まつろわぬ神」！今日の運勢は最悪に違いない。

「ああ、ペルセウスが出てくるはずだ。勿論、戦う必要はない。が、リリアナ・クラニチャールを監視していればいずれぶつかる。彼女を見張っておいて、出て来た時にまた連絡をくれ」

「はい……。——聞きたいんですけど、これって危険手当とかでますか？」

ダメもとで聞いてみた。ここの待遇は、霊視能力者魔女たちと企業戦士たちの働きによって、割と良い方のはずだが、そこは裏組織、いちいち危険負担など出していられまい。

「出ます。悪の秘密結社・Wild Hunt Manは、下級戦闘員の福利厚生にも力を入れています。死んだら……まあ線香く

らいはお家に送ったげよう』

「わゝ、嬉しくなゝい！……ところでセンコウってなんですか、アロマ？」

出た。死なない限りは出してくれるらしい。今までの経験からおそらく一ヶ月分だろう（この結社は臨時となると、とにかく一ヶ月分なのだ）。しかし、いつからうちは悪の秘密結社になったのだろう？ わたしって下級戦闘員？ そりゃあ、幹部ではないだろうけど、これでも結構組織に貢献しているような……。

考えると頭が痛くなりそうなので、エージェントCは思考を打ち切り、臨時収入の使い道をあれこれと考えることにした。彼女はエリカたちほどお嬢様ではないのだから……。

その後チームの3人（ひとりはいやなので巻き添えにした。それに分担すればひとりで監視するより安全だ。分け前は減るが……）で交代しながら仮眠を取り、日付が変わる前に起きだす。

男2人と雑魚寝はあんまり気乗りのするものではないが、今更である。ひとりは歴戦のおじさまなので大丈夫なはず。いや、そもそも隊長のお手付きである（はずの）自分に手を出す度胸があるなら、もう少し出世しているだろう。

どちらにせよ『まつろわぬ神』どころか、神獣相手にも役に立ちそうにないメンツではあるのだが……。

『現地Aから本部Cへ、目標が動いた。地下へ向かうようだ』

「本部C、了解。ドラゴンがまつろわぬ神が出てくるとのことでしたので、十分注意してください」

『現地A、了解』

その無線が切れたほんの10数分後、エージェントCは恐ろしいまでの呪力の高まりを察知した。すぐさま、エージェントAから連絡が入る。

『現地Aから本部Cへ、地下から膨大な呪力を確認。グリーンのドラゴンが出てきた』

「本部C、了解。こちらでも確認しました。他にはどうなっていますか？」

『現地A、了解。津波が押し寄せてきているな……とは言え、街にまで来ることはあるまい』

『現地Bから本部Cへ、目標がドラゴンに攫われた様だ。いや、この場合は助けた、かな？』

「本部C、了解。ええい、この喋り方鬱陶しい。これからは普通に話しますよ！」

切れた。たしかに面倒かもしれないが、様式美というものがあるというのに……。それでも略式なんだよ？

『それは同感だけど、隊長の命令じゃなかったっけ？』

かるゝいノリのエージェントBが何かほざいているが、エージェントCは語気荒く反論した。彼女はいい加減うんざりしていたのだ。「名前を出さなければいいんです！ Bさんはこのノリを続けたいんですか！？ わたしはもうイヤです！」

『まあ良いのではないか？ただし、引き続き名前は出さないようにな。任務中は互いの名前を呼ばない、これだけは結社のルールにある』

大人の貫禄を以て、エージェントAは仲裁した。臨機応変に対応してこそプロである。線引きさえしつかりしていれば、とやかく言われないのがこの結社の特徴でもある。

『あいあい、わかってますよゝ。でも、何でこんなルールがあるんだろう？何か聞いてますか、Aさん』

『知らん』

「ああ、たぶんノリで決めたんじゃないですか？隊長だって『王』なのに隊長だし」

そんな雑談に興じていると、シーンに動きがあったようだ。

『おっと、目標に動きがあったぞ。いや、目標そのものじゃなくて、

誰かがすごいスピードでその娘の所に来ただけど……あれがペルセウス？」

「おそらくは。……じゃあ、そろそろ隊長を呼びますよ？」

『異議なし』』

こうして、新たな戦いの火蓋は人知れず斬って落とされたのだった。

実際に戦うのは彼らでもなければ、今でもないのだが……っていうか本当に関係ない。

リリアナ・クラニチャールは実のところ、『まつろわぬ神』と直接遭遇するのはこれが始めてである。それでも、この男が『まつろわぬ神』だということはすぐにわかった。

太陽の輝きを思わせる山吹色の巻き毛、秀麗でありながら微塵もひ弱さを感じさせない美貌。長身で、神々しいほど逞しい――。

その身に纏いつけた白い腰布と手に持つ赤銅の剣は、現代の装束としては明らかに通報ものだ。だと言うのに、その青年の美貌を見ていると『まあ、いいか』と思ってしまう。

周りに頼れる存在は居ない。彼に対抗できる存在であり、同時に原因の一つと思いきサルバトーレ・ドニはどこかに流された。

この神の目的など聞かずともわかる、十中八九自分の後ろに居る竜である。彼が持つのは『剣』、即ち竜を狩る『鋼』だ。ここへは戦いを求めて来たに決まっている。だが、斬らせる訳にはいかない。あの竜はナポリの水と大地の精髓を具現化した存在、下手をすればこの辺り一帯全ての霊脈が枯れかねない！

「……御身はいずこかの神であらせられますね？よろしければ、御名を賜りとうございます。お聞かせ願えますか？」

だからリリアナは覚悟を決めて、まずはどこの神かを聞いてみた。由来がわかれば、なにか対抗策が見つかるかも知れない……溺れた

人間は、藁であろうと縋りたくなるものである。

「よくぞ訊いた、乙女よ。我が名はペルセウス、東方より来たりし蛇を殺める者。以後、見知りおけ」

喝采願望があるのか、実に派手で大仰なポーズで名乗られた。

「最悪だ…… よりにもよって、蛇殺しの代表格だなんて」

「さて、我が名乗りを聞いたな、乙女よ。ならば次は、我が武勇を示す時！ さあ、疾くそこを退き、我が救いを待つが良い！」

ボソリと呟くりリアナを無視し、ペルセウスは笑顔と共にキラーンと輝く白い歯を見せながら言った。

その言葉には抗わなくてはいけない、そう思いながらもリリアナは抗いがたい感情に支配されていた。カリスマ？…… まさか、そんな生温いものではあるまい。どちらかと言えば魅了の魔術に近い。ただ言葉をかけるだけでそんな芸当ができるとは……。

「ペルセウス神よ、おやめください。これなる竜はナポリの——この土地の精より生まれた神獣。不用意にお手討ちにされては、この地の靈気が死に絶えてしまう恐れがございます。どうぞ、この場合は剣をお納めくださいませ」

しかし、それでも彼女は魔女であり騎士である。民を、土地を護るという義務感から、何とかその言葉を搾り出した。

「それはできぬ相談だな、乙女よ——竜を殺め、蛇を屠るは我が宿業とも言える務め。これこそが私を英雄たらしめる偉業であり、行動でもある。その務めを途中で止めることは、何人にも許されぬのだよ」

が、あっさり返された。微笑みながらも謹厳に、断固とした意思を込めて。

「そ、そのためにこの土地がどうなってもかまわぬと？」

「我が武勲の成就のためだ。そうなっても致し方あるまい——とは言え、おそらくはそのような事にはならぬよ」

「それはいかなる理由があつてのお言葉でしょうか？」

「竜蛇の類に限らず、神獣、いや、我ら神々であつてすら大地と星

の精気によって生まれるのだ。そして、生まれた時にはもう切り離されているのだよ。故に殺めたからといって、土地が死に絶える事などあるまい。いちいちそんな事になっいては、神代の時代より続く我らの闘争が終わりを告げる前に世界が滅びるというものだ。乙女よ、これで君の悩みは解決したな？さあ、わかったらそこを退け！」

食い下がるリリアナに最後の通告を下すペルセウス。それを聞いて今度こそ彼女の身体と舌は凍りついた。

彼の神の言葉は予想であって、確証はないのだ。そんなことでは納得できない。この神の暴虐を止めなくては……と頭では思っている、身体も舌ももう動いてはくれなかった。

「ハハハ、聞き分けのよい子だ。そうとも、乙女の役目は、救いを待ち、勝者たる武士に愛を捧げること。よければこの竜を打ち倒したあとで、我が侍女として召し抱えてやろう。いにしえの我が妻、アンドロメダの故事に倣ってな！」

ぶっちゃけ、リリアナにとって彼の行動はありがた迷惑どころか、迷惑100%な訳だが、ペルセウスはもとより、ドラゴンの方も戦闘態勢をとっている。

いや、ペルセウスの最後の言葉を皮切りに、空に飛び立った。頭上のアドバンテージを取るつもりなのだろう。

ドラゴンはスウツと息を吸い、直後激しい焰を口から吐き出した！大地にある英雄を空からの範囲攻撃で仕留めるつもりなのだろうか？

しかし、英雄もさるもの。焰が彼と大地に到達する直前に、彼は白き流星となって飛び退いた。どう考えても普通の動きではないし、オーラを纏って移動したようにも見えた。

おそらくだが、飛翔術に近い能力なのだろう。もっとも、魔術とは違って融通は利きそうではある……その証拠に、あのスピードで動きながら、彼の英雄神は剣を投擲して見せた。効果時に無防備になる飛翔術とは大違いだ。

剣は回転しながら上昇し、ドラゴンの片翼を切り裂いた。

グアアアアアアアッ！！

ドラゴンの咆哮が響き渡る。そして、墜落した。超常の存在であっても片翼が切り裂かれると飛べなくなるらしい。

明らかに真っ直ぐ飛んで行ったペルセウスの剣は、どういう力が働いたのか大きく弧を描いて戻ってきた。空中でその柄を掴み取り、勢いそのままにドラゴンに駆け寄って、その太い頸を半ばまで断ち切った！

ドラゴンが焰のブレスを吐いてから首を絶たれるまで、この間僅か二秒足らず。正しくあつという間の出来事だった。

神獣——ドラゴンはその中でもトップクラスのものである。人間で太刀打ちできるものは極僅か。普通なら上位魔術師が徒党を組み、必勝の戦術を練った上で戦ってなお、返り討ちにあう可能性が非常に高いという化物である。

カンピオーネもそうだが、神もまた不条理な存在なのだ。

もう駄目か……とリリアナが観念しかかったその時、文字通り救いの神が現れた。

もつとも、その神も『まつろわぬ神』なので、全く救われない可能性の方が高いのだが……

「しばし待つがいい、そこな軍神よ。あなたがまず戦うべき相手はこちらにおるぞ。神ともあるう者がたかだか神獣ごときをいたぶり、得意がるとは嘆かわしい話よな」

「フフ、竜どもは御身らの眷属。たかだか呼ばわりするほど私は不遜ではありませんな」

幼くとも威厳のある声に応えながら、ペルセウスは飛び退いてドラゴンから距離をとった。

落命寸前のドラゴンを庇うように、その少女は歩み寄ってきた。

大地母神だ——リリアナはそう直感した。なぜなら、満月の加護を受ける『ストレガの夜』のように身体が熱くなり、ペルセウスの呪縛も解けたからだ。名も知らぬ女神が何かした訳ではない。そん

な素振りはなかった。ならばリリアナの呪力が高まったのは、魔女と蛇の守護者の波動を受けたからだろう。

そんななか、リリアナはある人物が居心地悪そうにしているのを見つけた。この人物自体は知っている。前に出会ってから一月程度しか経っていないし、自分たちの業界では一度会ったら忘れられない存在でもある。

「草薙護堂？　あなたがなぜ、こんな所にいるのですか!？」

「おわっ!?!——あゝ君は確か、リリアナ……なにさんだっけか？　エリカの友達だよな？」

東方より来るカンピオーネは、何となくホツとした感が見受けられた。

ここには神が二柱、魔王が一人、ついでに神獣が一匹……

碌な事にはならないだろう——そんな予感しかせず、リリアナの心は不安で押し潰されそうになるのであった。

「草薙護堂、ひとつお伺いしておきたいのですが——あの女神をナポリに手引きしたのは、まさかあなたではないでしょうね？」

「逆だよ。あいつ——アテナが俺をここに連れてきたんだ」

普通の……とは言いがたいが、とにかく人間の知り合いに会えたことは、多少ではあるが護堂にとって嬉しい事だった。ついでに言えば、ここがナポリだとわかったことも収穫だ。

お返し、という訳ではないが、護堂は自身を連れてきた女神の名前を出して答えた。エリカと同格の騎士ならば、これだけでことの深刻さを察知してくれるだろう、という判断だった。

「……アテナ。この春にあなたが戦い、敗れた女神ですね。何でも西条祐一が、後一步というところまで追い詰めたにもかかわらず、止めを刺さず逃がしたとか……」

護堂の言葉に、リリアナは軽く目を瞠って答えた。明らかにその目はその時に始末しといてくれたらよかったのに、と告げていた。

負けた以上は何も言えないが、軽く責められている気がする……。
「では、わたしの方も手短にご報告いたします。あの『まつろわぬ神』は英雄ペルセウス。竜と地母神であるアテナにとっては仇敵に当たる神格です。ご留意ください」

「そう言えばアテナのやつ、メドウーサと一心同体みたいな神様だったって話だな」

そう言うってから護堂は、事の推移を見守るリリアナと同じく、二柱の神様を見やった。

女神の方が少々幼い気もするが、美男美女で実には絵になる風景だ。――かたや現代風のワンピース、かたや腰布一丁で、違和感が半端では無いが。

自分達が話し合っている最中に、どうやら話し合いは進んだようだ。緑の鱗を持つ竜が、その身をほどいて、アテナの小さな身体に吸い込まれていった。

「よかるう。ペルセウスよ、あなたの誘いに乗るうではないか。我が名はアテナ、されどかつてはメドウサとも呼ばれた石室の主。アテナの加護の無いあなたが、かつてと同じようにこの首を取れるか試してみようではないか！」

言葉と共に手を掲げる女神に呼応して、海中の土砂が盛り上がって大蛇を形作る。

1つでは無い。合計で8つ。眷属の召喚は無かったようだが、これだけでも十分威圧感を与えるだろう。ただし、普通の相手であればだが……

「大地の蛇ですか。たしかに少々厄介ですが――ペルセウスの名をもうお忘れか？我が武勲は蛇を殺めて得たもの。刈取りしゴルゴンの首にかけて申し上げる。あらゆる蛇は、私の前には無力だと」

その宣言通り、アテナが産みだしたばかりの大蛇たちは、ただの砂となって海へ還った。

「蛇殺しの言霊か。なるほど、さすがは英雄。一度殺めた敵は、例え神の守護が消えたとしても負けぬと見える。これは厄介よな」

「よろしければ、この戦には使わぬと制約いたしますが、いかがですか？」

「ふん、要らぬ気遣いよ。あなたこそ、このアテナの名を忘れたのか？ 妾は大地の女王というだけでは無い。智慧の神であり、闘神である！」

アテナが神力を高め、どこからともなく現れた槍と盾を構える。衣装は古代ギリシャ風に改まり、その胸には黄金の胸当て——その中央には蛇の髪を持つ鬼女のメダリオンが掲げられている——が装着された。

しかし、これを見せられてなお、ペルセウスは落ち着きを払っていた。

「おお、いにしえに私に貸し与えてくださったアイギスを纏われたか。しかし、あなたは私の庇護者。我が武勲の後見人でしかないのです。そのゴルゴンの首こそその証。——神よ、我を守護し給え……」

……大いなる武勲のために！」

ペルセウスが祈りを捧げる。するとアテナの黄金の胸当てが消えた！ 逆に青年神の逞しい胸にその黄金の胸当て——メダリオンは無いが——が装着される。武器が赤銅の長剣から青銅の鎌剣に改まり、左手には青銅の盾が現れた。その他にも、兜と翼の生えたサンダルもある。

完全武装だった。あれはまさしく、ペルセウスがメドゥーサ討伐の際に神々より貸与された武具！ 竜蛇の神格、古の大地母神を刈り取る鋼の武装であった。

「おのれ。蛇を消し去る言霊に加え、妾より力を奪い取るとは……いや、それだけではない。ハデスとヘルメスからも力を借り受けたな！」

奪われた黄金の胸当ての代わりに革の胸甲を装着しなおし、アテナが言った。その言葉は苦々しくも驚嘆の意を含んでいた。

「いかにも。しかしながら、私にこの守護を与えてくださったのは御身ではありませんか。竜蛇の神格を討つ神々の加護、例え御身を

相手にしても使えぬ訳ではありません。そう、いにしえのメドウサのことを思うのなら……」

あくまで涼やかにペルセウスは告げる。なるほど、神話の時代よりアテナとペルセウスは、相性がよろしくない様だ。

見ている護堂はハラハラ、ドキドキしていた。

「なあ、リリアナ……さん？」

「は、何でしょうか、草薙護堂」

「俺はすごく嫌な予感がするんだ。あのふたりを止めた方がいいよ
うな、でも止めるとばつちりが来るような……」

「その認識に間違いは無いでしょう。そしておそらくは、ナポリの街も壊滅的な被害を受けそうです……」

護堂の不安を煽る訳ではないが、リリアナの心も、いや、ただの人間だからこそ彼女の心はどよんと暗く沈んでいた。護堂を見る目に『止めてほしい、でもこの人を行かせると逆に被害が大きくなるかも……』という期待と不安が入り混じっている。

「あなたは、神々の大戦を止めることができるかもしれないお方です。ですが、お止めになったほうがよろしいでしょう。下手をすれば二柱の神を相手取る事になりかねません。ここは彼の神々が相打ち、弱った方の神を仕留めるのが上策かと思われます」

苦渋に満ちた決断だった。しかし、リリアナには最早收拾を治める事はできない。草薙護堂一人では荷が勝ちすぎている。

せめて、サルバトーレ・ドニがこの場にいれば……とリリアナが考えた時、そもその原因のひとつはあのダメ人間だった事を思い出して、頭痛が酷くなったような気がした。

「くそッ！ やっぱり止めよう。アテナはまだ話が通じるから、あのペルセウスの方をなんとかするんだ！」

護堂が覚悟を決めた。そして、一触即発な雰囲気醸し出している戦場へ躍り出た。

「止める、ふたりとも！ こんな所で暴れるのは止めるんだ！」

まずは争いを止める。護堂君の覚悟なんてそんなモンである。勿

論、戦う覚悟もできている。いざとなれば、アテナとふたりがかりでもこの青年神を仕留める、そんな覚悟が……。

「ふむ、先程から気にはなっていたのだが、君は何者だ？　只人ではあるまい……当代の神殺しのひとりと見たが、どうかね？」

そんな彼にペルセウスはのんきに訊ねてきた。目の前の女神などいつでも倒せる、と言った風情である。

「その通りだ。——ここは街から近い、あんたたちがケンカをするのは勝手だけど、場所くらい変えろ！　住んでる人間にはいい迷惑なんだぞ！」

「若き神殺しよ、それは君の了見が浅いだけだ。間違っているぞ。いいかね？　民は英雄の活躍を望み、我らの武勲を好んで聞きたがるもの。私は、己を崇める民のためにも彼らのそばで戦い、武勇を示さねばならぬ。それこそが英雄たる武士の務めだと言えよう」

英雄譚——それは世代を超えて語り継がれる物語のひとつ。確かにどこの国にもあり、特に男の子たちに人気がある。……ただし、それは安全な所で聞いているから良いのであって、自分が（主人公では無く）ただの一般人^{被害者}になって登場したり、巻き添えを喰らうてまで見聞したりしたい訳ではないのだ。

「神話の時代と同じ価値観でいられると思うなよ！　今には今の価値観があるんだ。今の世界に生きるなら、今の価値観に合わせる！」

無駄だろう、そう思いながらも言わずにおけない愚痴。こんな説得に応じるようならば、『まつろわぬ神』は脅威ではない。

「ハハハ、君はなかなか面白いな。だが、先程そこにいる乙女にも言ったが、我らの武勲を邪魔立てすることは何人にも許されぬ行い。改めさせたくば、実力を以てせよ！」

「ふむ、確かにその通りだ。草薙護堂に妾の戦いを見せるつもりでここまで来たが、戦とは己の身で以て経験してこそ血肉となるもの……そも、神殺しの魔王どもと英雄の軍勢は古来、決して相容れぬものでもあった。なるほど、天は妾に戦えと言っておったのではなく、魔王の武勲を見届けよと言っておったのか」

ペルセウスの言葉と、それを受けたアテナの厳かな啓示。これを聞いて護堂はイヤな予感がした。自分の思惑が外れたようなこの感覚はあまり味わいたくない。

「草薙護堂よ、此度の戦はあなたにこのアテナの試練と祝福を授ける。みごと鋼の勇士を打倒し、同胞らを守りきって見せよ」

護堂は非常に頭の痛い思いをした。要はひとりで戦え、という宣言だった。

そこへ、ついと頭に手を伸ばされ、ついでキスされた。アテナの祝福を授けられたのである。まあコンピオーネは能力上、そうしないと術をかけられないからね。（再確認）

「フフ。これはよき戦になりそうですね。私としてはふたりがかりでも一向に構いませんが……いかがか？」

「大きく出たな、勇士よ。——その大言は、死を意味するものと心得よ。妾と未熟とは言え神殺しを同時に相手にするとは、思い上がりも甚だしい！」

「いや、ここはお言葉に甘えよう。あんたも知っての通り、俺は神殺しになってまだ半年も経っていないんだ。アテナ、あんたは俺を鍛えてくれるって言ったぞ。協力してくれてもいいんじゃないか？」

ペルセウスの申し出に憤慨するアテナを宥める護堂。別に好き好んで戦いたい訳ではないのだ。相手がふたりがかりでもいいと言うのなら、甘えさせてもらうべきだ。

それになにやら、虫の知らせというべきか、第6感というべきか、アテナの祝福を受け取った直後から、嫌な予感しかしないのだ。漠然としているが、ひとりでは勝てない、自分の力が全く通用しない、そんな気が……。

「むっ、致し方あるまい。あなたひとりに任せては、確かに危うい気もする……智慧の女神たる妾の機知がそう告げている。何故かまではわからぬが」

アテナも同じ考えに至ったようだ。やはり、何故かまではわからない。しかしこの敵は草薙護堂にとっては天敵になりうる存在だと

……

「話はまとまったな？　ではそろそろ始めるとしようではないか！」
言うや否や、英雄が流星となつて駆ける。目標は護堂の方だ。

しかし、これはアテナがフォローしてくれた。例の神速を見切る闘技である。

「おみごと！　さすがは闘神、一筋縄では行きませぬな。神殺しよ、女性の影に隠れるだけでは魔王の名が泣くというもの、君も戦に参加するがいい」

あの一瞬で既に数合打ち合つたらしいペルセウスの言葉。

確かに情けなくあるが、そもそもどの化身であれば有効かがまずわからない。

現在使えそうなのは『雄牛』と『鳳』のみ。『猪』も使おうと思えば使えるが……。

「アテナ、少しの間そいつの足止めができるか？」

『雄牛』を使うことにする。この化身は副作用が無いので使いやすいのだ。しかしあのスピードで動き回られては、そもそも力が如何に強かろうと無意味である。組打ちに持つていかななくては……

「誰にものを言っておる。そのようなこと、造作も無い！」

さらに槍を繰り出すアテナ。その穂先がペルセウスの足元を払つた。今の護堂では理解する事もできないほど高度なフェイントからの足払いだった。追撃に顔面めがけて突きを入れているが、これは盾に防がれた。

速さと言う点ではペルセウスが一步先んじているが、剛力はどちらにも変わらず、技量では圧倒的にアテナが上回っているようだ。

ペルセウスの闘技は身体能力にものを言わせた蛮勇であり、アテナの闘技は洗練された優美なものであった。なんとなく、マタドールを思わせるあしらい方である。

転びこしなかったペルセウスだが、それでも多少は体勢を崩したようだ。その機を逃さず、護堂は組み付いた。渾身の力を籠めて羽交い絞めにする。

「ぬお、なんたる剛力！ このペルセウスが抜け出せぬとは……！
かしわかったぞ。この懐かしき力！ 君は我が古き同胞、ウルスラ
グナから権能を篡奪したな？」

「アテナ、早くこいつに止めを刺してくれ！」

「フフ、無駄ですぞアテナ！ 神殺しよ、運が悪かったな。君は我が脅威とはなり得ない。我が父祖たる東方の輝きよ、我に力を与えよ！」

言霊を唱えるとペルセウスの身体から光がこぼれる。それを受けた護堂は自身の化身の力が消えるのを感じた。

ペルセウスがあつという間に抜け出し、流星のような速度で距離をとった。

「なるほど、あなたの権能は勝利の軍神より篡奪したものだったのか……それでは確かに、あの勇士相手には分が悪かるう。妾が感じた不安はこれであつたか」

護堂にのみ当たる寸前で槍を止めたアテナは、訳知り顔で頷いている。

「神殺しよ、知っているか？ 君が殺めたその神は、我が曾孫であり弟でもあるヘラクレスとも習合している。私とも何か関係があつてもおかしくはあるまい」

「つまり、何か？ 曾祖父さんであるあんたを攻撃したくない、みたいな状況だつて言いたいのか？」

すこし残念な様子でペルセウスが告げたその言葉に、護堂は皮肉気に返した。今まで頼りにしていた言霊の剣、これを喰らった心境だった。しかも、自分はドニやヴォバンのように複数の権能を所持しているわけではない……絶体絶命の危機である。

「まさか。そのような関係では無いよ。そう、もっと直接的な関係だ。まあ謎解きはあの世でじっくりとするがいい。さら……グハッ！」

言葉を言い切る前に、何かがペルセウスを貫いた。あれは槍だ、と言ってもアテナの物ではない。全くの不意打ちだったのか、避け

る間も無かったようだ。護堂自身、全く気付かなかった。

「戦いの気配に惹かれて、あなたも姿を現したか……しかし、闇討ちとはいささか無粋ではあるまいか、西条祐一よ」

アテナは軽く言う。咎めている訳ではなさそうだ。そも、戦場で気を抜く奴が悪いのである。

「その無礼はお許しを。さすがに従弟を殺される訳には参りませんので……もともと遭遇戦には不利な権能で、しかも一方的に有利な能力を相手が持っているとなれば、どうにもなりますまい。第一、あの程度で神や英雄が死にますか？」

足が八本ある灰色の馬に跨って現れた祐一が肩を竦めて反論する。こちらのノリも非常に軽い。

「死にはせずとも、卑怯な振る舞いに怒る心くらいは持ち合わせているぞ、新たな神殺しよ」

神たる英雄は、予想通り生きていた。背中から生えた槍を引き抜き、文句を吐くが、やはり軽い。彼だつてメドウスサ狩りの時には、気配を絶つて闇討ちしたのだ。本気で文句を言う事はできないだろう。

「ハハハ、ペルセウスとあろう者がなんたる様か。神の加護を願っておきながら、慢心してその能力を使わなかった報いか……いやはや、戦場と言うのは常に何が起こるかわからぬもの、だからこそ面白い！」

カラン、と槍を投げ捨てる。軽傷ではないはずだが、戦意は全く衰えていない。

「今の一撃は戒めとして受け取っておこう。——さて、今度の相手は君か？」

「いや、さっきのは見るに見かねてのことだ。人の獲物を取る気は無いよ。また日を改めて戦うといい。今度は護堂もいい勝負をするだろうさ」

祐一は彼と戦う気は無かった。何故ならこれは、護堂に与えられた試練なのだから。

「ここら辺で挺入れをしておきたかったのだが、何かおかしい方向へ行っていたので介入したのだ。特にあの鎌剣は、何か危険な香りがする……。」

「そうか、時間稼ぎのためにあの槍を放ったのだな。よからう、ここは一先ず引き、再戦の時を待つとしよう。日時は追って伝える。我が傷が癒えるまでに刃を研いでいるのだな」

言い捨てると、白き英雄は流星となつて何処かに消えた。

「一先ず脅威は先送りにできた。派手な権能合戦ではなかったため被害もゼロに等しい。」

しかし、護堂はどうやって解決したものか、そもそもこの従兄は手伝ってくれないのか……と悩み始めたが、結局良い案は出なかった。

こうして、ナポリの夜は更けていくのだった。

九話 ペルセウス一戦目 卵城下の戦い（後書き）

ミトラス成分は控えめにするつもりです。太陽神として、多少その力が使える程度ですか。つまり、彼はペルセウスの神話を核にした英雄です。

唐突に源氏物語の批判？みたいなのが出てますが、本来、お昼の話でオリピの恋愛感とか出そうと思って、話を膨らますつもりだったのですが、エリカとルクレチアの反応がおかしく、あえなくボツ飛ばしています。そういう事です。繋がりがおかしくて昼の話を全て抜くこともできなかったという。でもせつかなので、源氏物語の話だけ（むりやり）入れてみたのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9848x/>

カンピオーネ暴虐伝～オリピの秘宝～

2011年11月14日03時16分発行